

西原大塚遺跡 第234地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

埼玉県志木市教育委員会

西原大塚遺跡 第234地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

埼玉県志木市教育委員会



1. 912号土坑 人骨及び播鉢出土状況



2. 912号土坑出土 播鉢（古瀬戸後期IV古～新段階）

はじめに

志木市教育委員会
教育長 柚木 博

ここに刊行する『西原大塚遺跡第 234 地点埋蔵文化財発掘調査報告書』は、教育委員会が令和 2・3 年度に受託事業として実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

現在、市内には、15 カ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されています。これらの埋蔵文化財は祖先が残してきた貴重な文化遺産であり、私たちはこれを大切に保護し後世に伝えていく使命があると言えます。

また、西原大塚遺跡については、これまでの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時期にわたる複合遺跡であることが判明しています。

さて、今回報告する西原大塚遺跡第 234 地点では、古墳時代～近世にかけての遺構・遺物が多数発見されました。特に中世においては、地下式坑と呼ばれる遺構から、人骨が発見され、埋葬施設であることが判明しています。

このように、今回の調査においても本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別の御理解と御協力を頂いた事業主体者、そして深い御理解と御協力を賜りました地元の方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、令和2・3年度に発掘作業を実施した、埼玉県志木市に所在する西原大塚遺跡第234地点の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、共同住宅建設に伴う記録保存のための発掘調査として、文化財保護法第99条に基づき、志木市教育委員会が調査主体者として実施したものである。
3. 本調査の実施にあたり、工事主体者・志木市教育委員会・株式会社中野技術（代表取締役 菅原広志）の三者による協定を締結した上で、株式会社中野技術が発掘調査支援業務を行った。
4. 発掘作業は令和3年3月10日から令和3年4月16日まで行い、整理事業・報告書刊行作業を令和4年4月28日まで行った。
5. 本書は尾形則敏・徳留彰紀・大久保 聡が監修し、編集は小林陽子・福泉 藍が行い、石川安司が補佐した。執筆は第1章、第2章第1節を尾形、それ以外は小林・福泉・石川が担当し、第4章第3節（2）を田中 信（前 川越市立博物館館長）氏、付編の自然科学分析は東北大学大学院歯学研究科・新潟医療福祉大学自然人類学研究所・東京大学総合研究博物館に委託した。
6. 縄文～古墳時代の遺物については、石坂俊郎（埼玉県立嵐山史跡の博物館）、書上元博（東松山市化石と自然の体験館）、金子直行・黒坂禎二（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）各氏のご教示を頂いた。なお、912号土坑・65号ピット出土の骨については取り上げから分析まで奈良貴史氏ほか（新潟医療福祉大学自然人類学研究所）が行った。
7. 近世の遺物については、主に石川が中世を、越村 篤が近世を担当して判別した。
なお、文中の陶磁器に関する産地は、巻末に掲げた文献（藤澤2002・2008、井汲1992）を参考に推定したものである。中世段階の瀬戸・美濃地方の施釉陶器については基本的に「瀬戸・美濃産」を表記したが、端境期で連続する連房（登窯）1期（16世紀末～17世紀前半）までを便宜的に含めて使用した。近世（便宜的に連房1期以降とする）の陶磁器については、それぞれに技術系譜の拡散に伴う多様な産地が想定され産地を厳密に絞り切れないので、「系」表記とした。
また、中・近世の焙烙、カワラケなどの土器については、狭域～中域流通を基本とすることが想定され、産地はほぼ不詳であるためすべて「系」表記とした。
8. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターで一括して保管している。
9. 調査組織は以下の通りである。

【志木市教育委員会組織】（令和2～4年度）

| | |
|---------|---------------|
| 調査主体者 | 志木市教育委員会 |
| 教育長 | 柚木 博 |
| 教育政策部長 | 北村 竜一（～令和3年度） |
| 〃 | 今野 美香（令和4年度～） |
| 教育政策部次長 | 大熊 克之（令和2年度） |
| 生涯学習課長 | 山本 勲（令和2年度） |
| 〃 | 土崎 健太（令和3年度～） |

| | |
|-------------|------------------|
| 生涯学習課副課長 | 中原敦也(令和2年度) |
| 〃 | 吉成和重(令和3年度～) |
| 生涯学習課主幹 | 浅見千穂 |
| 生涯学習課主査 | 武井香代子(令和2年度) |
| 〃 | 尾形則敏(～令和3年度) |
| 〃 | 徳留彰紀(令和2年度～) |
| 〃 | 大久保聡(令和4年度～) |
| 生涯学習課主任 | 松永真知子(令和2年度) |
| 〃 | 武井香代子(令和3年度) |
| 〃 | 大久保聡(～令和3年度) |
| 〃 | 石川千尋 |
| 〃 | 尾形則敏(令和4年度～) |
| 生涯学習課主事 | 塚原会理(令和4年度～) |
| 生涯学習課主事補 | 鈴木楓月(令和2年度) |
| 〃 | 遠藤彪雅(令和3年度) |
| 〃 | 木村結香(令和3年度～) |
| 調査担当者 | 尾形則敏 |
| 〃 | 徳留彰紀 |
| 〃 | 大久保聡 |
| 〃 | 木村結香(令和3年度～) |
| 志木市文化財保護審議会 | 井上國夫(会長) |
| | 深瀬克(委員) |
| | 上野守嘉(委員) |
| | 新田泰男(委員) |
| | 金子博一(委員)(令和3年度～) |
| | 高橋豊(委員)(～令和2年度) |

【株式会社中野技術】

○発掘調査

| | |
|-------|--|
| 調査員 | 原野真祐 |
| 現場代理人 | 福泉藍 |
| 測量員 | 下岡孝明・高橋貴子 |
| 作業員 | 明石千とせ・井上麻美子・植村智美・白井孝・川口砂織・坂本秀也 宮澤洋美・米島妙子・山口智・松尾貴弘・鈴木彩乃・石橋佳奈 |

○整理作業

| | |
|-------|--|
| 調査員 | 小林陽子・福泉藍・石川安司 |
| 調査補助員 | 越村篤・佐貫健・高橋貴子 |
| 作業員 | 青木利恵・明石千とせ・井上麻美子・白井孝・内田恭子・大原美紀 甲斐栄美子・加藤洋子・坂井美樹子・櫛原みゆき・徳光直子・山本圭子 |

10. 各遺跡の発掘調査及び整理事業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

浅野晴樹・五十嵐 睦・石坂俊郎・江原 順・金子直行・書上元博・隈本健介
黒坂 慎二・齊藤 純・齋藤欣延・笹川紗希・佐藤一也・鈴木一郎・田中 信
照林敏郎・中岡貴裕・中村謙伸・奈良貴史・野沢 均・橋口定志・早坂廣人
堀 善之・前田秀則・山本 龍・山田尚友・安田脩一・山本典幸・和田晋治

11. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

令和3年2月26日付け 教文資第4-1786号

○埋蔵物の文化財認定について（通知）

令和3年9月30日付け 教文資第7-67号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：5,000 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成27年4月発行
株式会社ゼンリン

2. 本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系に則している。
3. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
4. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
5. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。
6. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
7. 挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。
8. 土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は []、推定値は () を付した。

高：器高 口：口径 底：底径 厚：器厚

9. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

H＝古墳時代～平安時代の住居跡

D＝土坑 W＝井戸跡 P＝ビット

目 次

巻頭図版／はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

| | |
|--------------------------|----|
| 第1章 遺跡の立地と環境 | 1 |
| 第1節 市域の地形と遺跡 | 1 |
| 第2節 遺跡の概要 | 7 |
| 第2章 発掘調査の概要 | 10 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 10 |
| 第2節 発掘調査の経過 | 11 |
| 第3節 基本層序 | 13 |
| 第3章 検出された遺構・遺物 | 15 |
| 第1節 古墳時代の遺構・遺物 | 15 |
| 第2節 中世以降の遺構・遺物 | 16 |
| 第3節 遺構外出土遺物 | 50 |
| 第4章 調査のまとめ | 58 |
| 第1節 縄文時代晩期最終末～弥生時代初頭について | 58 |
| 第2節 古墳時代前期後半～中期初頭について | 58 |
| 第3節 中世以降について | 59 |

[付編] 自然科学分析

| | |
|----------------------|----|
| Ⅰ. 西原大塚遺跡出土人骨の同位体分析 | 76 |
| Ⅱ. 西原大塚遺跡出土人骨の人類学的研究 | 79 |
| Ⅲ. 西原大塚遺跡出土の動物骨 | 85 |

図 版

報告書抄録

挿図目次

| | | | | | |
|------|------------------------------|----|------|-----------------------------------|----|
| 第1図 | 市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000)----- | 2 | 第23図 | 10号井戸跡出土遺物 2 (1 / 3)----- | 40 |
| 第2図 | 西原大塚遺跡の調査地点 (1 / 5,000)----- | 8 | 第24図 | 10号井戸跡出土遺物 3 (1 / 3)----- | 41 |
| 第3図 | 確認調査時の遺構分布図 (1 / 300)----- | 10 | 第25図 | ピット位置図 (1 / 200)----- | 42 |
| 第4図 | 深掘りトレンチ位置図 (1 / 400)----- | 13 | 第26図 | 47・65号ピット (1 / 60)----- | 43 |
| 第5図 | 基本層序 (1 / 60)----- | 13 | 第27図 | 65号ピット出土遺物 (4 / 5)----- | 43 |
| 第6図 | 遺構分布図 (1 / 150)----- | 14 | 第28図 | ピット 1 (1 / 60)----- | 44 |
| 第7図 | 29号住居跡 (1 / 60)----- | 15 | 第29図 | ピット 2 (1 / 60)----- | 45 |
| 第8図 | 29号住居跡出土遺物 (1 / 3)----- | 16 | 第30図 | ピット 3 (1 / 60)----- | 46 |
| 第9図 | 土坑 1 (1 / 60)----- | 26 | 第31図 | ピット 4 (1 / 60)----- | 47 |
| 第10図 | 土坑 2 (1 / 60)----- | 27 | 第32図 | 遺構外出土遺物 1 (1 / 3)----- | 51 |
| 第11図 | 土坑 3 (1 / 15・1 / 30)----- | 28 | 第33図 | 遺構外出土遺物 2 (1 / 3)----- | 52 |
| 第12図 | 土坑 4 (1 / 60)----- | 29 | 第34図 | 遺構外出土遺物 3 (1 / 3)----- | 53 |
| 第13図 | 土坑 5 (1 / 60)----- | 30 | 第35図 | 遺構外出土遺物 4 (1 / 3)----- | 54 |
| 第14図 | 土坑 6 (1 / 60)----- | 31 | 第36図 | 遺構外出土遺物 5 (1 / 3・4 / 5)----- | 55 |
| 第15図 | 912号土坑出土遺物 (1 / 3)----- | 32 | 第37図 | 事例 2～5----- | 67 |
| 第16図 | 914号土坑出土遺物 (1 / 3)----- | 33 | 第38図 | 事例 6～12----- | 68 |
| 第17図 | 915号土坑出土遺物 1 (1 / 3)----- | 33 | 第39図 | 参考図----- | 69 |
| 第18図 | 915号土坑出土遺物 2 (1 / 3)----- | 34 | 第40図 | 骨コラーゲンと食料資源から期待される炭素・窒素の同位体比----- | 79 |
| 第19図 | 930号土坑出土遺物 (1 / 3)----- | 34 | 第41図 | 較正放射性炭素年代の確率分布----- | 80 |
| 第20図 | 10号井戸跡 1 (1 / 60)----- | 37 | 第42図 | 残存状況図----- | 85 |
| 第21図 | 10号井戸跡 2 (1 / 60)----- | 38 | 第43図 | 鼻骨平坦度----- | 85 |
| 第22図 | 10号井戸跡出土遺物 1 (1 / 3)----- | 39 | | | |

表目次

| | | | | | |
|------|-------------------------|----|------|-----------------------------|----|
| 第1表 | 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧----- | 1 | 第12表 | 遺構外出土土器一覧 (3)----- | 57 |
| 第2表 | 発掘調査工程表----- | 12 | 第13表 | 遺構外出土陶磁器・土器一覧----- | 57 |
| 第3表 | 29号住居跡出土土器一覧----- | 16 | 第14表 | 遺構外出土石製品一覧----- | 57 |
| 第4表 | 土坑出土土器一覧----- | 35 | 第15表 | 遺構外出土銭貨一覧----- | 57 |
| 第5表 | 10号井戸跡出土陶器・磁器・土器一覧----- | 41 | 第16表 | ゼラチン回収率とEA-IRMSによる分析結果----- | 79 |
| 第6表 | 10号井戸跡出土板碑一覧----- | 42 | 第17表 | 慣用放射性炭素年代----- | 79 |
| 第7表 | ピット一覧 (1)----- | 48 | 第18表 | 比較放射性炭素年代----- | 79 |
| 第8表 | ピット一覧 (2)----- | 49 | 第19表 | 頭骨計測表----- | 84 |
| 第9表 | 65号ピット出土銭貨一覧----- | 49 | 第20表 | 頭骨形態小変異----- | 84 |
| 第10表 | 遺構外出土土器一覧 (1)----- | 55 | 第21表 | 歯計測値----- | 84 |
| 第11表 | 遺構外出土土器一覧 (2)----- | 56 | 第22表 | 四肢骨計測表----- | 85 |

図版目次

巻頭図版

1. 912号土坑 人骨及び播種出土状況
2. 912号土坑出土 播種 (古瀬戸後期IV古～新段階)

図版1

1. 調査区全景 2. 調査区遠景

図版2

1. 調査前現況 (東から) 2. 表土剥ぎ
3. プラン確認 (北から) 4. プラン確認 (南から)
5. 29号住居跡土層断面 (東から)
6. 29号住居跡土層断面 (北から)
7. 29号住居跡完掘 (東から)
8. 29号住居跡掘り方完掘 (東から)

図版3

1. 912号土坑人骨検出 (東から)
2. 912号土坑人骨遠景 (北から)
3. 912号土坑人骨近景 (南から)
4. 912号土坑人骨取り上げ作業1
5. 912号土坑人骨取り上げ作業2
6. 912号土坑動物骨検出 (西から)
7. 913号土坑土層断面 (南から)
8. 912・913号土坑完掘 (北から)

図版4

1. 915号土坑遺物出土状況 (南から)
2. 914・915号土坑完掘 (南から)
3. 917号土坑土層断面 (北から)
4. 917号土坑完掘 (北から)
5. 920・930号土坑土層断面 (東から)
6. 930号土坑土層断面 (西から)
7. 930号土坑硬化面 (西から)
8. 930号土坑完掘 (南から)

図版5

1. 931号土坑土層断面 (南から)
2. 931号土坑完掘 (南から)
3. 933号土坑土層断面 (北から)
4. 933号土坑土層断面 (東から)
5. 933号土坑完掘 (北から)

6. 936号土坑土層断面 (南から)
7. 65号ピット土層断面 (北から)
8. 65号ピット完掘 (北から)

図版6

1. 10号井戸跡 (東から) 2. 調査区南壁 (北から)
3. 深掘トレンチ (T P 1) 西壁 (東から)
4. 深掘トレンチ (T P 1) 南壁 (北から)
5. 深掘トレンチ (T P 3) 西壁 (東から)
6. 深掘トレンチ (T P 3) 北壁 (南から)
7. 埋め戻し作業 8. 作業風景

図版7

1. 29号住居跡出土遺物
2. 912号土坑出土遺物

図版8

1. 914号土坑出土遺物
2. 915号土坑出土遺物1

図版9

1. 915号土坑出土遺物2
2. 930号土坑出土遺物
3. 10号井戸跡出土遺物1

図版10

- 10号井戸跡出土遺物2

図版11

1. 10号井戸跡出土遺物3
2. 65号ピット出土遺物
3. 遺構外出土遺物1

図版12

- 遺構外出土遺物2

図版13

- 遺構外出土遺物3

図版14

- 912号土坑出土 1号人骨

図版15

- 912号土坑出土 2号人骨

図版16

- 912号土坑出土 動物骨

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.05km²、人口約7万6千人の自然と文化の調和する都市である。

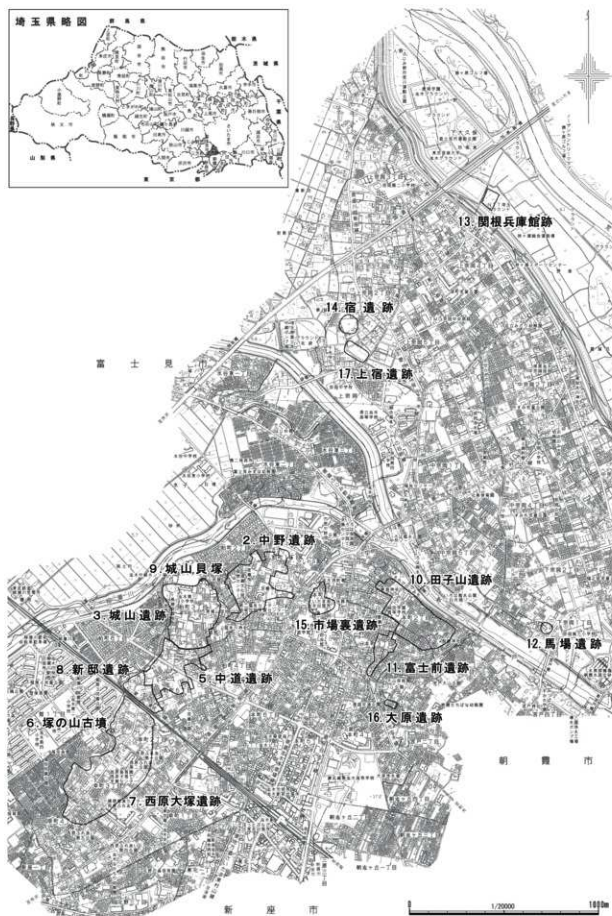
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡（17）が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、

| № | 遺跡名 | 遺跡の規模 | 地目 | 遺跡の種類 | 遺跡の時代 | 主な遺構 | 主な遺物 |
|-----|--------|------------------------|-------|-----------------|------------------------------------|--|---|
| 2 | 中野 | 70,950 m ² | 畑・宅地 | 集落跡 | 旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世 | 石器集中地点、住居跡、土坑、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等 | 石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等 |
| 3 | 城山 | 82,100 m ² | 畑・宅地 | 城館跡 集落跡 | 旧石器、縄（草創～晩）、弥（中～後）、古（前～後）、奈・平、中・近世 | 石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、跡道関連等 | 石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土質質土器、古銭、鋳造関連遺物等 |
| 5 | 中道 | 54,420 m ² | 畑・宅地 | 集落跡 墓跡 | 旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世 | 石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等 | 石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等 |
| 6 | 塚の山古墳 | 800 m ² | 林 | 古墳? | 古墳? | 古墳? | なし |
| 7 | 西原大塚 | 164,960 m ² | 畑・宅地 | 集落跡 墓跡 | 旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世 | 石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等 | 石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等 |
| 8 | 新邸 | 20,080 m ² | 畑・宅地 | 貝塚 集落跡 墓跡 | 縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代 | 貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット跡等 | 石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等 |
| 9 | 城山貝塚 | 900 m ² | 林 | 貝塚 | 縄（前） | 斜面貝塚 | 石器、縄文土器、貝 |
| 10 | 田子山 | 74,030 m ² | 畑・宅地 | 集落跡 墓跡 | 縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代 | 住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム探査遺構、溝跡等 | 縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等 |
| 11 | 富士前 | 14,830 m ² | 宅地 | 集落跡 | 縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降 | 住居跡、土坑?、溝跡? | 弥生土器、土師器 |
| 12 | 馬場 | 2,800 m ² | 畑 | 集落跡 | 古（前） | 住居跡? | 土師器 |
| 13 | 関根兵庫館跡 | 4,900 m ² | グラウンド | 館跡 | 中世 | 不明 | なし |
| 14 | 宿 | 7,700 m ² | 水田 | 館跡 | 中世 | 溝跡、井桁状構築物 | 木・石製品 |
| 15 | 市場裏 | 13,800 m ² | 宅地 | 集落跡 墓跡 | 弥（後）～古（前）、中世以降 | 住居跡、方形周溝墓、土坑 | 弥生土器、土師器、土師質土器 |
| 16 | 大原 | 1,700 m ² | 宅地 | 不明 | 近世以降? | 溝跡 | なし |
| 17 | 上宿 | 8,600 m ² | 水田・宅地 | 集落跡 | 平安、中・近世 | 住居跡、土坑、溝跡、井戸跡 | 土師器、須恵器、陶磁器、灰碑等 |
| 合 計 | | 522,570 m ² | | | | | |

令和4年4月1日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

前述した13遺跡ツガに塚ヤマの山古墳しろやまかいづか（6）、城山貝塚（9）を加えた15遺跡である（第1図・第1表）。

（2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で、礫群や石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7（1995）年度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。最新では、令和元（2019）年に第224地点で立川ローム層のⅣ層下部～Ⅴ層上部・Ⅶ層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。平成27（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91⑩地点からは、礫群1基が検出された。

また、城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層のⅣ層上部とⅦ層の2ヶ所で石器集中地点が検出されている。平成20・21年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも1ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層のⅣ層下部～Ⅴ層上部で石器集中地点2ヶ所、礫群9基が検出された。令和元（2019）年には第96地点で立川ローム層のⅣ層下部～Ⅴ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で石器集中地点や礫群が検出されている。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2006）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で燃糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から燃糸文系土器・石器がまとめて出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚遺跡・新邸遺跡で前期中葉の黒浜式期の住居跡が検出され、新邸遺跡のものは貝塚をもつ住居跡である。最新では、令和元（2019）年度に発掘調査が実施された城山遺跡第96地点から、

前期後葉の諸磯a式期で、貝層をもつ住居跡が4軒検出され、貝類としては、ヤマトシジミ・マガキが主体であった。平成2（1990）年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で200軒以上の住居跡が環状に配置されていることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡1軒が確認されているが、平成27（2016）年度の中道遺跡第76地点からは、加曾利EⅣ式の両耳壺を出土する住居跡1軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡の西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居（敷石住居）1軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成5・6（1993・1994）年度の田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。平成26（2015）年度の西原大塚遺跡第204地点や平成27・28（2016・2017）年度に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）の遺物が比較的多く出土している。最新では、令和元（2019）年度の西原大塚遺跡第216地点から、堀之内Ⅰ式期の住居跡1軒と遺物包含層が検出され、良好な土器・石器が出土している。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代中期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については令和元（2019）年度に発掘調査された城山遺跡第96地点で市内初となる宮ノ台式期の住居跡1軒・方形周溝墓1基が検出された。住居跡からは、壺・甕・高坏、挟入柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・石包丁などが良好な状態で出土している。

弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が600軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24（2012）年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅剣が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単

位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高杯が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。なお、鳥形土製品1点と壺形土器4点の計5点は、考古資料として市指定文化財に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的に新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後葉から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的に古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後葉以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材のほかベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後葉から7世紀後葉にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で265軒、次いで中野遺跡で58軒、中道遺跡で20軒、田子山遺跡で17軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後葉以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げるることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施さ

れた第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶ふじゅじんぼが2枚とその近くからは鉄鎌1点と土銚1点^{ちやう}が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を超える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群と南比企窯跡群の製品という生産地の異なる須恵器坏が共存して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、平成25年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と大塚千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『簡村旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する掘跡などが多数発見されている。近年では、『廻国雑記』（註2）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十五坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鑄造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鑄造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、銅本体の大型鋳型、銅の耳部分の小型鋳型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状態で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鋳の札くわいのしるしである鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状

遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ピット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新たに土坑45基・井戸跡2基・溝跡1本・ピット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「T字形」の火葬土坑5基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑竊1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、中道遺跡第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のピットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム探掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鎌などの無数の工具痕が観察され、探掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

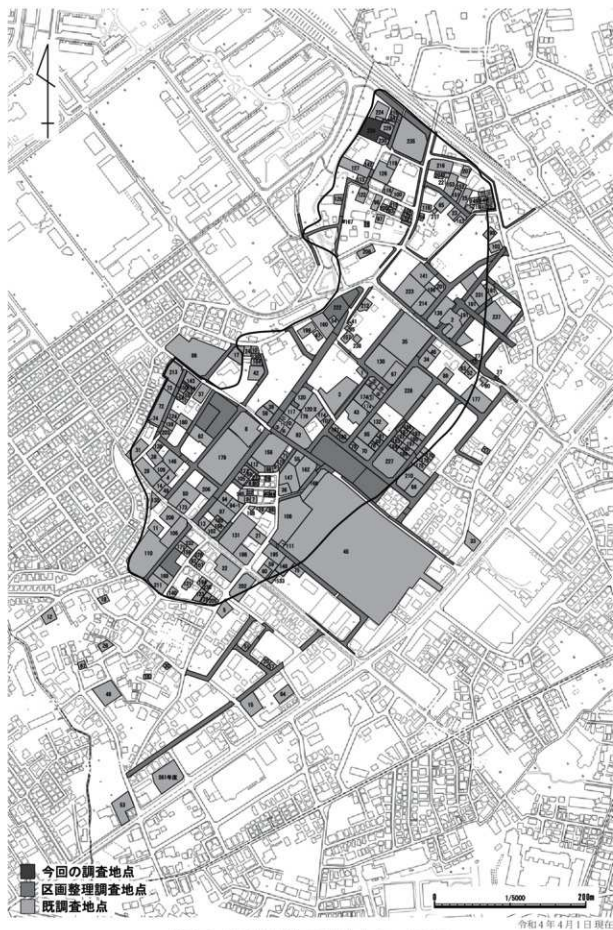
平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 遺跡の概要

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部にある幸町2～4丁目一帯に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約1kmに位置している。北東―南西方向に約700m、北西―南東方向に約150mの広がりを持ち、遺跡面積164,960㎡の市内最大規模の遺跡である。

本遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の台地の縁辺に形成されている。標高は10～18mと遺跡内で8mの比高差があるが、遺跡範囲の大部分は標高14～16mに位置しており、おおむね緩やかな傾斜をもち台地から低地に移行している。遺跡北西部分の台地下では、今でも小規模な湧水点が確認されている。

昭和48（1973）年に最初の調査が実施されて以降、志木市教育委員会、志木市遺跡調査会、志木市史編さん室による度重なる調査が実施されてきた。平成元（1989）年から平成19（2007）年までは、西原特定土地区画整理事業に伴い、道路新設部分を中心に公園予定地・保留地を対象とした発掘調査が継続的に実施された。近年では区画整理事業の完了に伴い、共同住宅や分譲住宅、個人住宅の建設など



第2図 西原大塚遺跡の調査地点 (1 / 5,000)

の各種土木工事が盛期を迎え、それらに伴う発掘調査も増加傾向にある。

本遺跡は、これまでに237回の調査（令和3年12月28日現在）が実施され、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。特に、縄文時代中期では住居跡約200軒以上からなる大規模な環状集落が形成され、また、弥生時代後期～古墳時代前期では、住居跡630軒以上、方形周溝墓36基が調査され、さらに環濠の存在が確認されている。

特に本遺跡から発見された資料として、以下の2件が、平成24年度に市指定文化財に指定され、大きな成果を上げることができた。

- ①西原大塚遺跡出土の動物形土製品
- ②西原大塚遺跡17号方形周溝墓出土遺物

【註】

- 註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原伸右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。
- 註2 『廻国雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

【引用文献】

- 神山健吉 1988 『「廻国雑記」に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察』『郷土志木』第7号
2002 『道興をめぐる二つの譚説を糾す』『郷土志木』第31号

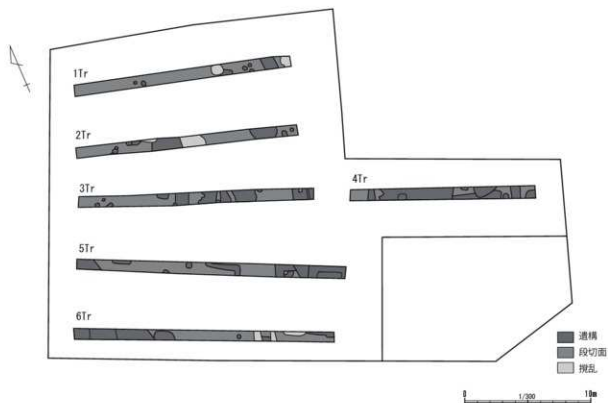
第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

令和2年12月、工事主体者から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町2丁目6281-2、6282、6283（面積753.04㎡）地内に共同住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は、当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228-09-007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず埋蔵文化財に影響を与える工事を実施する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。



第3図 確認調査時の遺構分布図（1／300）

令和2年12月8日、教育委員会は、土木工事主体者である個人より確認調査依頼書及び埋蔵文化財発掘届を受理し、西原大塚遺跡第234地点として、令和3年1月18・19日の2日間で確認調査を実施した。確認調査は、第3図に示すように調査区長軸方向に6本のトレンチ（1～6Tr）を設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の炉穴1基、中世以降の土坑26基・地下室か2基・溝跡1本・ピット16本などを確認した。教育委員会は、この結果をただちに土木工事主体者に報告し、保存措置について検討を依頼した。

令和3年2月15日、工事主体者と保存措置についての事前打合せを実施した。その結果、駐車場部分については、掘削を伴わないことから、盛土保存が可能であったが、建物部分（222.59㎡）については、柱状改良工事を実施する計画であることから、発掘調査を実施することに決定した。なお、浸透トレンチ部分については、狭小面積であることから工事立会として取り扱うこととなった。

令和3年2月16日、教育委員会は、工事主体者である個人より埋蔵文化財発掘調査依頼書を受理する。同時に、同日付けで埋蔵文化財発掘の届出及び発掘調査通知を埼玉県教育委員会に提出した。

令和3年3月3日、土木工事主体者・教育委員会・民間調査組織の三者により事前協議を実施し、同日、西原大塚遺跡第234地点埋蔵文化財保存事業に係る協定書を土木主体者である個人、教育委員会、株式会社中野技術（代表取締役 菅原広志）の三者により締結した。

以上により、教育委員会を調査主体として3月10日から発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過

ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第2表の発掘調査工程表に示した。

準備作業として令和3年3月8日からオレンジネット設置、現場事務所設置、器材搬入、基準点測量及び調査区の位置出しを行った後、0.4㎡バックホーによる表土除去を3月12日まで断続的に行った。続いて調査区整備や遺構確認作業、検出状況の写真撮影を行った後、16日から遺構精査を開始し令和3年4月19日に現地での作業を完了している。

3月16日、土坑（910～912D）、ピット（1～4P）の精査を行う。17日に土坑（913～916D）、ピット（5～15P）の精査を行う。912Dから骨が検出される。18日にはピット（16～24P）の精査を行う。914・915Dで遺物が多数出土する。19日には土坑（917～919D）、ピット（25・26P）の精査を行う。913Dは地下式坑とみられ、ベルトを設定し掘り下げを行った。22日には土坑（921・923・931D）、ピット（27・28・30P）の精査を行う。913Dは天井部が残存していた。920Dは確認面で焼土が確認された。23日には土坑（924～927D）、ピット（31～34P）の精査を行う。24日には住居跡（29H）、土坑（928・929D）、ピット（35～42P）の精査を行う。24日には住居跡（29H）、土坑（928・929D）、ピット（35～42P）の精査を行う。25日には土坑（920・930D）、ピット（43～48P）の精査を行う。930D堅坑部底面に硬化面を検出。26日には土坑（930・932・933D）、ピット（49～51P）の精査を行う。29日には土坑（935D）、トレンチ（6Tr）の精査を行う。30日には土坑（934・936～939D）、ピット（29・52～55P）の精査を行う。31日には段切状遺構の精査を行う。

| | 3月 | | | | | 4月 | | | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| | 5日 | 10日 | 15日 | 20日 | 25日 | 30日 | 5日 | 10日 | 15日 | 20日 | 25日 | 30日 |
| 表上測ざ | 310 | 312 | | | | | | | | | | |
| 29H | | | | 324 | 326 | | | | | | | |
| 910D | | 316 | | | | | | | | | | |
| 911D | | 316 | | | | | | | | | | |
| 912D | | 316 | | 323 | | | 47 | | 415 | | | |
| 913D | | 317 | | 323 | | | | | | | | |
| 914D | | 317 | | 322 | | | | | | | | |
| 915D | | 317 | | 322 | | | | | | | | |
| 916D | | 317 | | 319 | | | | | | | | |
| 917D | | | 319 | 322 | | | | | | | | |
| 918D | | | 319 | 322 | | | | | | | | |
| 919D | | | 319 | 322 | | | | | | | | |
| 920D | | | | 325 | 326 | | | | | | | |
| 921D | | | | 322 | | | | | | | | |
| 922D | | | | 322 | | | | | | | | |
| 923D | | | | 322 | | | | | | | | |
| 924D | | | | 323 | | | | | | | | |
| 925D | | | | 323 | | | | | | | | |
| 926D | | | | 323 | | | | | | | | |
| 927D | | | | 323 | 324 | | 45 | | 46 | | | |
| 928D | | | | 324 | | | | | | | | |
| 929D | | | | 324 | | | | | | | | |
| 930D | | | | 325 | 326 | 42 | | | 46 | | | |
| 931D | | | 322 | 323 | | | | | | | | |
| 932D | | | | 326 | 327 | | | | | | | |
| 933D | | | | 325 | 330 | | | | | | | |
| 934D | | | | 330 | | | | | | | | |
| 935D | | | | 329 | | | | | | | | |
| 936D | | | | 330 | | | | | | | | |
| 937D | | | | 330 | | | | | | | | |
| 938D | | | | 330 | | | | | | | | |
| 939D | | | | 330 | | | | | | | | |
| 10W | | | | | 331 | | 47 | | 47 | | | |
| 壁 | | | | | | | 45 | | 49 | | | |
| 基本土壁 | | | | | | | | | | | | |
| 埋め戻し | | | | | | | | | 410 | | 419 | |

第2表 発掘調査工程表

4月1日に空撮清掃。2日に空撮。調査区南壁、西壁(10W)、ピット(56~58P)の精査を行う。5日にはピット(59~62P)の精査を行う。TP1の掘り下げを開始。6日にはピット(63~66P)の精査を行う。TP2~4の掘り下げを開始。930Dにサブトレンチを設定し拡張を行った。7日には土坑(912D)から人骨検出。8日には人骨周辺の掘り下げ開始。13日には土坑(912D)の人骨を取り上げ。4日には土坑(912D)から動物骨検出、完掘。撤収作業開始。15日には土坑(912D)エレベーション作成。撤収作業。16日には埋め戻し開始。19日には埋め戻し完了。同日撤収作業も終了した。

第3節 基本層序

本調査区では4ヶ所の旧石器試掘坑を設定し、基本層序を記録した(第4・5図)。立川ローム第X層上位相当まで掘り下げを行った。第Ⅱ・Ⅲ層は削平を受けており確認できなかった。第Ⅳ層上面も同様に削平を受けており、一部分のみの確認となった。また、T P 2・3で第Ⅴ・Ⅵ層の一部が軟化している状況が確認された。

第Ⅳ層 黄褐色土のハードローム。赤色スコリア・黒色スコリアを多量含む。

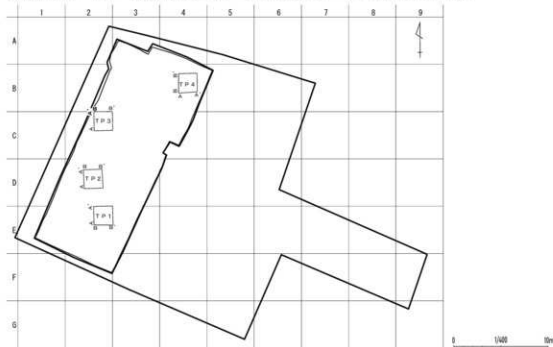
第Ⅴ層 淡暗褐色土のハードローム。赤色スコリア・黒色スコリアを多量含む。第1黒色帯。

第Ⅵ層 黄褐色土でA Tを含むハードローム。赤色スコリア・黒色スコリア・白色粒子を少量含む。

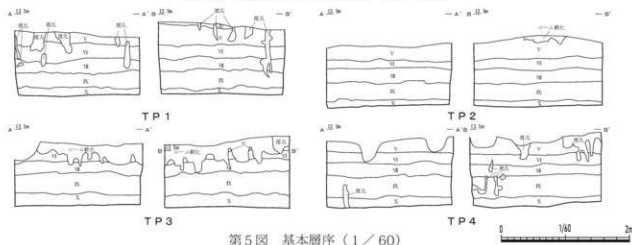
第Ⅶ層 暗褐色土のハードローム。赤色スコリア・黒色スコリアを少量含む。第2黒色帯上部。

第Ⅷ層 暗褐色のハードローム。赤色スコリアを微量含む。第2黒色帯部。

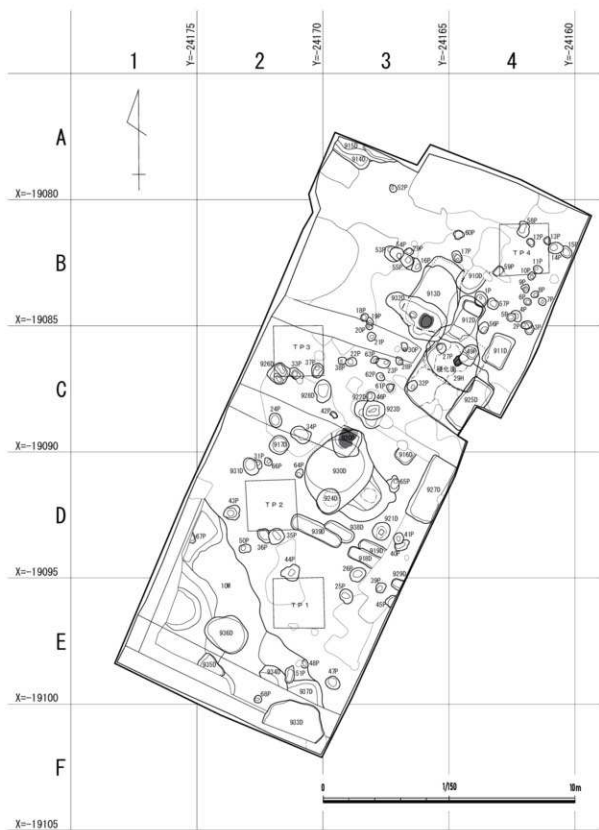
第Ⅸ層 黄橙色のハードローム。赤色スコリア・黒色スコリア・白色粒子を微量含む。



第4図 深掘りトレンチ位置図(1/400)



第5図 基本層序(1/60)



第6図 遺構分布図(1/150)

第3章 検出された遺構・遺物

第1節 古墳時代の遺構・遺物

(1) 概要

古墳時代の遺構は住居跡が1軒(29H)検出された。遺存状況は良好とは言えず、削平により北壁、東壁を失い住居内部も中世以降の土坑やピット、さらに攪乱が認められた。遺物は住居跡から出土した高环脚部がある。

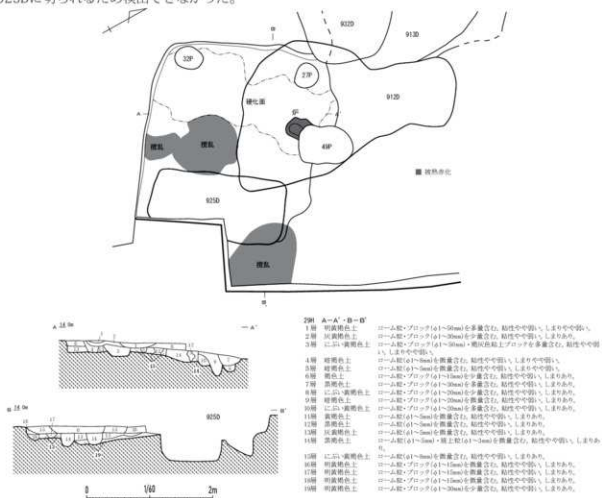
(2) 住居跡

29号住居跡

遺構 (第7図)

[位置] (C-3・4) グリッド

[検出状況] 912Dを切り、27・32・49Pと925Dに切られる。北壁と東壁の立ち上りは削平及び攪乱と925Dに切られるため検出できなかった。



第7図 29号住居跡(1/60)

[構 造] 平面形：不整形。規模：長軸現況3.17m／短軸現況3.00m／深さ34cm。壁：59°～80°で立ち上がる。主軸方位：N-60°-W。壁溝：確認されなかった。上幅現況19cm／下幅現況12cm／深さ現況9cm。床面：硬化面は西側のみ確認された。炉：検出範囲内の北西に寄って焼土範囲が確認された。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：確認されなかった。27・32Pは柱痕跡の立ち上りを土層に確認するが、西壁に近接し別時代の所産と推定する。入口施設：検出されなかった。

[覆 土] 19層に分層される。

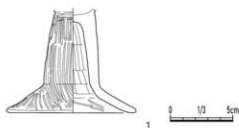
[遺 物] 土器23点、土師器6点、石器1点、古銭1点が出土した。

[時 期] 古墳時代前期から中期初頭。

[遺 物] (第8図、図版7-1、第3表)

[土 器] (第8図、図版7-1、第3表)

高坏の脚部で、やや膨らみを持ち、遺存する下方の1/3で屈曲し直線的に開く裾部へ移行する。器壁は赤黄褐色を呈し、外面は縦位のミガキ、裾部は部分的に横位のミガキで一部にハケ目が残る。



第8図 29号住居跡出土遺物(1/3)

| 調査番号 図版番号 | 器種 | 遺存部位 | 法量 (cm) | 出土位置 | 特徴 | 調査 | 胎土 | 色調 |
|-----------------|----|--------------|-------------------|-------|--|---|-----------------|---------|
| 第8図1 図版7-1-1 | 高坏 | 胴台部 95%残存 | 高 [8.4] 底 10.3 | 29H 炉 | 坏底欠損／胴部はやや膨らみを持ち、下1/3程で屈曲し、裾部へ移行。裾部は直線的に開く／胴部の一部摩滅 | 内面：胴柱部は縦・横位のヘラナデ。裾部は横位ナデ。一部ハケ目・ミガキ残る。／外面：胴柱上部は横位のミガキ。以下縦位のミガキ。裾部は斜位ミガキ／一部にハケ目残る／外面赤彩か | 石灰・褐色粘土・黒色粘土を含む | 赤黄褐色を基調 |

第3表 29号住居跡出土土器一覧

第2節 中世以降の遺構・遺物

(1) 概要

当地点全体が基本層序のⅢ層以上を失っており、隣接する第220地点(大久保・尾形 2020)と第224地点(尾形・大久保・成島・西川 2020)の調査結果から、段切状遺構の造成によって削平を受けていると解釈できる。段切状遺構の造成後に、土坑30基(910～939D)、井戸跡1基(10W)、ピット68本(1～68P)などが構築されたと考えられる。土坑のうち地下式坑が3基(912・913・930D)あり、912Dは比較的良好な遺存状況の人骨と瀬戸・美濃産完形播鉢が共伴し特筆される。10Wは南西の隅で検出され、調査区外へと続く巨大な形状から全体を把握できないものの、いわゆる「まいまいず」的構造が予想される。

(2) 土坑

910号土坑

遺構 (第9図)**位置** (B-4) グリッド**検出状況** 913Dを切り、北東側を攪乱に切られる。**構造** 平面形：楕円形。断面形：北西は32°で立ち上がり、東南は緩やかに立ち上がる途中で攪乱に切られる。底面は東南に傾斜する。規模：長軸現況1.04m / 短軸0.86m / 深さ12cm。主軸方位：N-43°-E。**覆土** 2層に分層される。**遺物** なし。**時期** 覆土の観察から中世以降と思われる。

911号土坑

遺構 (第9図)**位置** (C-4) グリッド**検出状況** 912Dを切る。**構造** 平面形：長方形。断面形：北西はほぼ垂直に、東南は55°で立ち上がる。底面は中央がやや盛り上がる。規模：長軸1.31m / 短軸0.85m / 深さ25cm。主軸方位：N-27°-E。**覆土** 3層に分層される。**遺物** 縄文土器と土師器小片が出土した。**時期** 縄文土器と土師器の小片が出土しているが、覆土の観察から中世以降と思われる。

912号土坑

遺構 (第10・11図)**位置** (B-4、C-3・4) グリッド**検出状況** 29Hを切り、925D、27・32・49Pに切られる。**構造** 地下式坑の形態をもつ。**【入口竪坑部】** 平面形：長方形。規模：長軸1.06m / 短軸0.76m。坑底は壁面がほぼ垂直に立ち上がり、壁際に長軸0.72m / 短軸0.40m / 深さ50cmの長方形の掘り込みがある。通路部はやや盛り上がり、主体部へは階段状に26~28cmの段差をもつ。主軸方位：N-27°-E。**【主体部】** 平面形：方形。断面形：81°~93°で立ち上がり、一部オーバーハンクしている。底面は中央がやや窪む。規模：長軸2.32m / 短軸2.10m。主軸方位：N-56°-W。**覆土** 9層に分層された。**遺物** 古瀬戸後期IV古~新段階の播鉢が出土し、未成人骨(1号人骨)と成人骨(2号人骨)、動物骨頭部を検出した(人骨・動物骨については付編I~III)。2体の人骨は、いずれも女性と推定され、未成人骨は、頭骨及び四肢骨が解剖学的位置を保っておらず、断定はできないが成人骨も竪穴付近と主体部南壁際に離れて検出された。**時期** 中世(15世紀中葉~後半)。

遺物 (第15図、図版7-2、第4表)

陶器 (第15図、図版7-2、第4表)

1～6は陶器である。1～5は瀬戸・美濃産の播鉢で、1は口唇付近に小さな片口状の窪みをつけ、内面中位やや上から見込み際に、8本一組の播目がほぼ等間隔に8単位、見込み中央に1単位施される。見込みから立ち上り際に使用痕があり播目が消えている。全面ににぶい赤褐色の鉄軸が掛かり、外面の一部は煤けている。古瀬戸後期IV古～新段階に当る(藤澤 2008)。2は1よりやや大振りで薄手でシャープな造りである。軸調はやや薄く黄白色を呈する鉄軸である。3～5は立ち上がりと底部付近の資料で、5は2と、3は4と軸調と胎土が類似し、それぞれ同一個体の可能性がある。2～5も播目と軸調、胎土から1と同時期の資料と推定される。

6は18世紀後半～19世紀にかけての堺系の播鉢で竪坑と主体部の中間上層からの出土である。

913号土坑

遺構 (第12図)

位置 (B-3・4、C-3) グリッド

検出状況 932Dに切られる。

構造 平面形：長楕円形。断面形：北北西側に天井部の残存が確認されたことから地下式坑の形態をもつと考えられる。規模：長軸3.38m / 短軸現況1.84m / 深さ150cm。主軸方位：N-23°-E。

覆土 8層に分層される。

遺物 縄文土器と土師器の小片が出土した。

時期 縄文土器と土師器の小片が出土しているが、覆土の観察と構造から中世以降と思われる。

914号土坑

遺構 (第9図)

位置 (A-3) グリッド

検出状況 915Dを切る。

構造 平面形：長楕円形。断面形：42°で緩やかに立ち上がる。規模：長軸現況1.55m / 短軸現況0.51m。主軸方位：N-65°-W。

覆土 大半が攪乱に壊されており分層できなかった。

遺物 陶磁器と土器が出土した。

時期 近世以降(17世紀後半～19世紀前葉)。

遺物 (第16図、図版8-1、第4表)

陶磁器・土器 (第16図、図版8-1、第4表)

1は磁器で、染付の肥前系の半筒碗。外面四方襷割菊文、緑内四方襷文で1760～1810年代の製品。

2は陶器で産地不詳の近世播鉢。

3は土器で在地系焙烙底部の破片で中世後半～近世の製品である。

915号土坑

遺 構 (第12図)

[位 置] (A-3) グリッド

[検出状況] 南側の一部分が検出され、大部分は調査区外へ延びる。914Dに切られる。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：深まり部分は77°~80°で急激に立ち上がる。底面は5'前後で北西へ緩やかにあがる。規模：長軸現況2.43m / 短軸現況0.42m / 深さ86cm。主軸方位：N-66°-W。

[覆 土] 4層に分層される。

[遺 物] 17世紀代から19世紀前半までの陶磁器と土器が多数出土した。

[時 期] 17世紀~19世紀前半。

遺 物 (第17・18図、図版8-2・9-1、第4表)

[陶磁器・土器] (第17・18図、図版8-2・9-1、第4表)

1~6は磁器でその内、1・3・6は肥前系、2・4・5は瀬戸・美濃系の染付で18世紀前半~19世紀前半の製品。

7~10は陶器で瀬戸・美濃系。7は灰釉、8~10は鉄釉で皿と裏である。

13~15は土器で在地系の焙烙である。13は立ち上がりから口唇部までロクロ挽きで、口唇部は丸みをもつ。14は外面中位以下に指頭痕が見られ口唇部は中央が窪み両端は角張る。15は底部の資料である。

916号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (C-3、D-3) グリッド

[検出状況] 北西側を攪乱に切られる。

[構 造] 平面形：長方形。断面形：ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸0.69m / 短軸0.61m / 深さ10cm。主軸方位：N-54°-W。

[覆 土] 2層に分層される。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

917号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (C-2、D-2) グリッド

[検出状況] 単独。

[構 造] 平面形：円形。断面形：南東に向かって2°~10°傾いて立ち上がる。底面は南西へ傾斜し窪む。規模：長軸0.79m / 短軸0.75m / 深さ52cm。主軸方位：N-86°-E。

[覆 土] 6層に分層される。

[遺 物] 縄文時代前期~中期の土器片と古墳時代の土師器片が出土した。

[時 期] 縄文時代と古墳時代の土器小片が出土したが、覆土の観察から中世以降と思われる。

918号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (D-3) グリッド

[検出状況] 919Dと攪乱に切られる。

[構 造] 平面形：長楕円形。断面形：ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。規模：長軸現況1.18m／短軸現況0.50m／深さ24cm。主軸方位：N-60°-W。

[覆 土] 2層に分層される。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

919号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (D-3) グリッド

[検出状況] 918Dを切り、攪乱に切られる。

[構 造] 平面形：長楕円形。断面形：緩やかにカーブした後ほぼ垂直に立ち上がる。底面は緩やかに弧を描く。規模：長軸現況1.04m／短軸現況0.57m／深さ22cm。主軸方位：N-59°-W。

[覆 土] 2層に分層される。

[遺 物] 土器（焙烙底部小片）が出土したが小破片のため図示できなかった。

[時 期] 遺物と覆土の観察から中世以降と思われる。

920号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (C-3、D-3) グリッド

[検出状況] 930Dを切る。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：緩やかに弧を描いて立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模：長軸1.22m／短軸現況1.21m／深さ43cm。主軸方位：N-28°-E。

[覆 土] 8層に分層される。

[遺 物] なし。

[時 期] 切り合いの状況から近世以降と想定される。

921号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (D-3) グリッド

[検出状況] 単独。

[構 造] 平面形：円形。断面形：2°~10°で立ち上がり、さらに55°~72°に広がって立ち上がる。底面は中央が窪む。規模：長軸0.73m／短軸0.67m／深さ56cm。主軸方位：N-37°-E。

[覆 土] 4層に分層される。

[遺 物] 土器1点が出土した。

[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

922号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (C-3) グリッド

[検出状況] 923Dと攪乱に切られる。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：80°で立ち上がる。底面は南へ向かって傾斜する。規模：長軸1.20m／短軸1.02m／深さ61cm。主軸方位：N-56°-W。

[覆 土] 2層に分層される。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

923号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (C-3) グリッド

[検出状況] 922Dを切り、46Pに切られる。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：南は内側に、北は外側へ弧を描いて立ち上がる。底面は丸みを帯びる。規模：長軸0.60m／短軸0.45m／深さ53cm。主軸方位：N-56°-E。

[覆 土] 4層に分層される。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

924号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (D-2・3) グリッド

[検出状況] 930Dを切る。

[構 造] 平面形：円形。断面形：南は凹凸を持ちながら65°で立ち上がり、北はほぼ垂直に立ち上がる。底面は僅かに凸凹があり北へ傾く。規模：長軸0.99m／短軸0.92m／深さ77cm。主軸方位：N-29°-E。

[覆 土] 3層に分層される。

[遺 物] 縄文土器2点、土師器1点と結晶片岩の細片が1点出土した。

[時 期] 地下式坑である930Dを切るため、15世紀末葉以降か。

925号土坑

遺 構 (第10図)

[位 置] (C-3・4) グリッド

[検出状況] 29Hを切り、攪乱により一部削平を受ける。南東部が調査区外。

[構 造] 平面形：長方形。断面形：72°~76°で立ち上がる。底面は平坦である。規模：長軸2.15m

／短軸1.02m／深さ63cm。主軸方位：N-31°-E。

[覆 土] 3層に分層され攪乱が入る。

[遺 物] 縄文時代早期末葉の条痕文系土器、前後葉諸磯期の土器、古墳時代の土師器片など土器16点が出土した。

[時 期] 切り合いと覆土の観察から中世以降と思われる。

926号土坑

遺 構 (第10図)

[位 置] (C-2) グリッド

[検出状況] 33Pを切る。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：北西が65°、南東が緩やかに立ち上がる。底面は凹凸を持ち中央が膨らむ。規模：長軸0.91m／短軸0.81m／深さ22cm。主軸方位：N-81°-E。

[覆 土] 5層に分層される。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

927号土坑

遺 構 (第9図)

[位 置] (D-3・4) グリッド

[検出状況] 単独。

[構 造] 平面形：長方形。断面形：ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸2.60m／短軸現況1.10m／深さ81cm。主軸方位：N-30°-E。

[覆 土] 7層に分層され攪乱が入る。

[遺 物] 縄文土器小片1点、土師器小片1点、小礫2点が出土した。

[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

928号土坑

遺 構 (第10図)

[位 置] (C-2・3) グリッド

[検出状況] 単独。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：60°～74°で立ち上がる。底面は北へ傾斜し窪む。規模：長軸0.90m／短軸0.67m／深さ54cm。主軸方位：N-3°-E。

[覆 土] 5層に分層される。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

929号土坑

遺構 (第10図)

[位置] (E-3) グリッド

[検出状況] 東部が調査区外。

[構造] 平面形: 楕円形。断面形: 71°~85°で立ち上がる。底面は北へ傾斜する。規模: 長軸0.44m / 短軸0.41m / 深さ43cm。主軸方位: N-64°-W。

[覆土] 2層に分層される。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

930号土坑

遺構 (第13図)

[位置] (C-2・3、D-2・3) グリッド

[検出状況] 920・924Dに切られる。

[構造] 地下式坑の形態をもつ。

[入口竪坑部] 平面形: 不整形。規模: 長軸2.10m / 短軸1.18m / 深さ142cm。坑底は平坦で、硬化面が薄く検出された。主体部へは57°で下がる。長軸方位: N-39°-E。

[主体部] 平面形: 不整楕円形。断面形: オーバーハングしながら立ち上がる。底面は平坦である。規模: 長軸3.51m / 短軸2.46m / 深さ202cm。長軸方位: N-25°-E。

[覆土] 14層に分層される。

[遺物] 主体部からは陶器と土器、竪坑からは古銭が出土した。

[時期] 遺構の形状と出土遺物から15世紀後半~17世紀前半頃の所産と想定される。

遺物 (第19図、図版9-2、第4表)

[陶器・土器・銭貨] (第19図、図版9-2、第4表)

1は陶器で、瀬戸・美濃産の鉄軸播鉢。立ち上がり中位付近の破片で器壁の厚さは5~8mm程で薄い。古瀬戸後期IV新段階前後の資料と思われる。

2は土器で、在地系の焙烙の立ち上り付近の資料。内耳の下部が僅かに残り、内耳は底部に取り付かず体部下端につく。16世紀中葉から17世紀前半の資料と思われる。また判読不能の中世銭が出土している(図版9-2-3)。

931号土坑

遺構 (第10図)

[位置] (D-2) グリッド

[検出状況] 31Pを切る。

[構造] 平面形: 楕円形。断面形: 東壁は70°、西壁は段をもって70°~80°で立ち上がる。底面は西へ傾斜する。規模: 長軸0.71m / 短軸0.56m / 深さ59cm。主軸方位: N-41°-W。

[覆土] 5層に分層される。

[遺物] 縄文前期土器小片とハケ目のある台付壘体部小片、土師器小片が出土した。

[時 期] 縄文時代前期の土器と弥生時代後期～古墳時代前期の土器などが出土したが、覆土の観察から中世以降と想定される。

932号土坑

遺 構 (第6図)

[位 置] (B-3、C-3) グリッド

[検出状況] 913Dを切る。

[構 造] 平面形：不整形。規模：長軸2.64m / 短軸1.52m。主軸方位：N-53°-W。

[覆 土] 攪乱により覆土は分層できなかった。

[遺 物] なし。

[時 期] 遺構の重複状況と覆土の観察から中世以降と思われる。

933号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (E-2、F-2・3) グリッド

[検出状況] 南側調査区外に続き、安全対策のための難壇掘削1段目壁で表土下から掘り込みがはじまることを確認。10W南東側の覆土を切る。未完掘。

[構 造] 室か。平面形：不整形。断面形：ほぼ垂直もしくは内側へ僅かに傾いて立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸2.48m / 短軸現況1.29m / 深さ現況122cm。長軸方位：N-74°-W。

[覆 土] 21層に分層される。

[遺 物] 縄文時代中期土器片と中・近世の土器（焙烙片・信楽産灯明皿片）、砂岩質の砥石片が出土した。

[時 期] 掘り込み層位と18世紀末葉の出土遺物から江戸時代後期以降と想定される。

934号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (E-2) グリッド

[検出状況] 937Dを切り、51Pに切られる。土層堆積から10Wの当初造成に伴う可能性がある。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：50°で立ち上がる。底面は南へ傾斜する。規模：長軸現況1.31m / 短軸現況0.65m。主軸方位：N-41°-W。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

935号土坑

遺 構 (第20・21図)

[位 置] (E-2) グリッド

[検出状況] 調査区外南側へ続き、安全対策による難壇掘削の3段目壁で土層確認した。壁外へ延びるため全容は不明。10Wに切られる。未完掘。

[構 造] オーバーハングする断面形状が予想され地下式坑の一部の可能性がある。

平面形：不整形。断面形：東が波状に僅かにうねりながら74°、西が10cm程度奥へ掘り込まれた後に85°で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸1.12m／短軸現況0.52m／深さ現況64cm。主軸方位：N-58°-W。

[覆 土] 3層に分層される。

[遺 物] 縄文時代後期の土器小片が出土した。

[時 期] 切り合いと覆土の観察から中世以降と思われる。

936号土坑

遺 構 (第6図)

[位 置] (E-2) グリッド

[検出状況] 10Wで検出され、10Wに切られる。未完掘。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：オーバーハングする断面形状から地下式坑の一部の可能性がある。規模：長軸1.70m／短軸1.39m。主軸方位：N-55°-W

[覆 土] 褐灰色土の単一層である。

[遺 物] なし。

[時 期] 切り合いと覆土の観察から中世以降と思われる。

937号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (E-2、F-2・3) グリッド

[検出状況] 934Dと51Pに切られる。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：38°で緩やかに立ち上がる。底面は西へ傾斜する。規模：長軸現況1.68m／短軸現況0.85m。主軸方位：N-53°-W。

[覆 土] 灰黄褐色土の単一層である。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。

938号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (D-3) グリッド

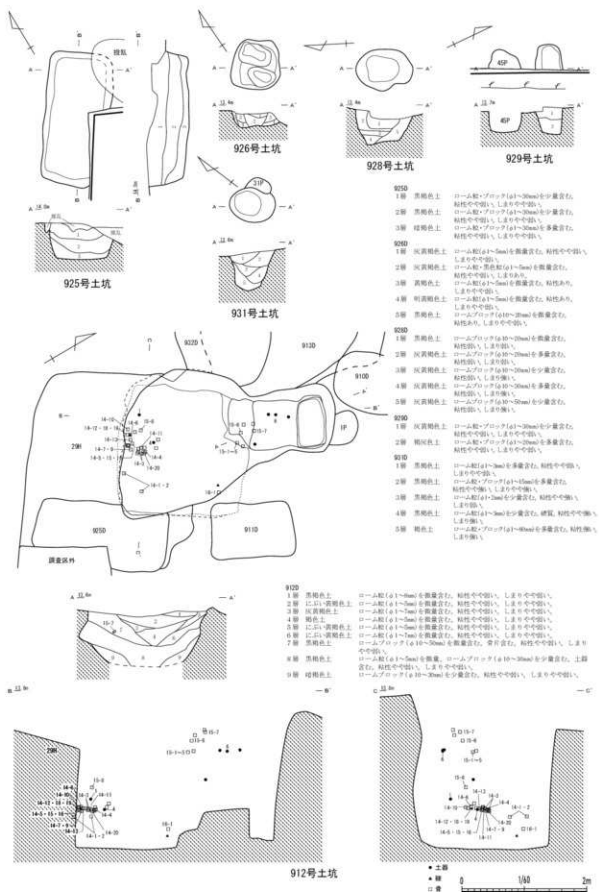
[検出状況] 939Dに切られる。

[構 造] 平面形：長楕円形。断面形：60°～71°で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸1.25m／短軸現況0.42m。主軸方位：N-59°-W。

[覆 土] 単一層である。

[遺 物] なし。

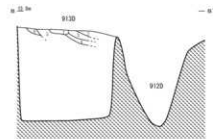
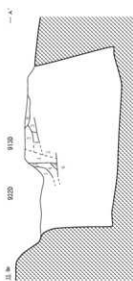
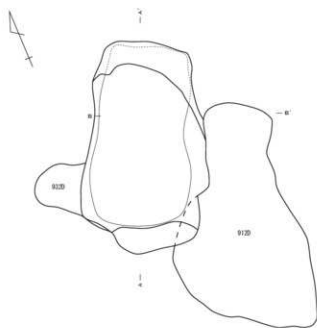
[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。



第10図 土坑2 (1/60)



第11図 土坑3 (1/15.1/30)



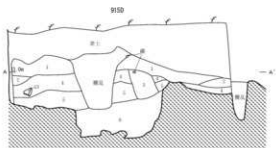
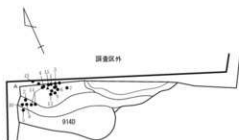
913号土坑

912 A-A'

- 1層 黄褐色土 コーム靴・ブロック (a1~30m) 少量含む、粘性や中弱い、しまりや中弱い。
- 2層 褐色土 コーム靴・ブロック (a1~20m) 少量含む、粘性や中弱い、しまりや中弱い。
- 3層 黄褐色土 コーム靴・ブロック (a1~6m) 散見含む、粘性あり、しまりあり。
- 4層 二色・黄褐色土 コーム靴・ブロック (a1~30m) 少量含む、粘性や中弱い、しまりや中弱い。
- 5層 黄褐色土 コーム靴・ブロック (a1~30m) 少量含む、粘性や中弱い、しまりや中弱い。
- 6層 黄褐色土 コーム靴・ブロック (a1~30m) 少量含む、粘性や中弱い、しまりや中弱い。
- 7層 黄褐色土 コーム靴・ブロック (a1~30m) 少量含む、粘性や中弱い、しまりや中弱い。
- 8層 褐色土 層土にブロック少量含む、粘土塊中央部に縦割線あり、粘性や中弱い、しまりや中弱い。

912 B-B'

- 1層 黄褐色土 層土にブロック少量含む、粘性あり、しまりあり。
- 2層 褐色土 コーム靴・ブロック (a1~30m) 散見含む、粘性あり、しまりあり。
- 3層 二色・黄褐色土 コーム靴・ブロック (a1~30m) 少量含む、粘性や中弱い、しまり弱い。
- 4層 黄褐色土 コーム靴・ブロック (a1~30m) 少量含む、粘性や中弱い、しまり弱い。
- 5層 黄褐色土 コーム靴・ブロック (a1~30m) 少量含む、粘性や中弱い、しまり弱い。

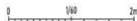


915号土坑

915-B-B'

- 1層 黄褐色土 コーム靴 (a2~5m) 少量含む、粘性弱い、しまりや中弱い。
- 2層 灰黄褐色土 コーム靴・ブロック (a2~15m) 少量含む、粘性弱い、しまりや中弱い。
- 3層 灰黄褐色土 コーム靴 (a2~5m) 少量含む、同化物少量含む、粘性弱い、しまりや中弱い。
- 4層 灰黄褐色土 コーム靴・ブロック (a2~20m) 少量含む、同化物少量含む、粘性弱い、しまりや中弱い。
- 5層 褐色土 コーム靴・ブロック (a2~30m) 少量含む、粘性弱い、しまりあり。
- 6層 黄褐色土 コーム靴・ブロック (a2~30m) 少量含む、粘性弱い、しまりあり。

● 土層
■ 土層



第12図 土坑4 (1/60)

939号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (D-2・3) グリッド

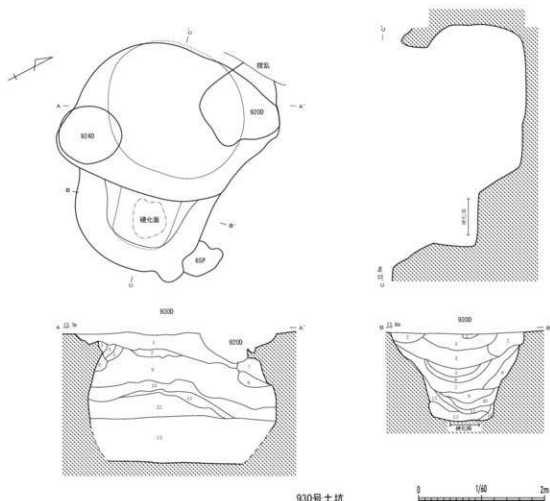
[検出状況] 938Dを切る。

[構 造] 平面形：長楕円形。断面形：72°~78°で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸2.18m / 短軸0.63m。主軸方位：N-62°-W。

[覆 土] 単一層である。

[遺 物] なし。

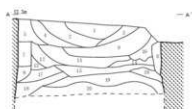
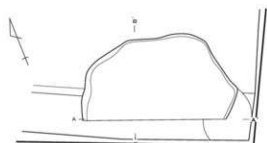
[時 期] 覆土の観察から中世以降と思われる。



| | |
|-----------|---|
| 9300 A-A' | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性土を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 2層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 3層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 4層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 5層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 6層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 7層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 8層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 9層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 10層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 11層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 12層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 13層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 9300 B-B' | ローム層・ブロック、黄褐色土・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 1層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |

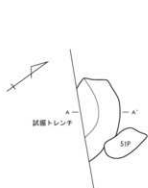
| | |
|----------|---|
| 3層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 4層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 5層 黄褐色土 | ローム層・ブロック、黄褐色土・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 6層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 7層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 8層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 9層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 10層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 11層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 12層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 13層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |
| 14層 黄褐色土 | ローム層・ブロック(φ1~30mm)を少量含む。粘性あり、しまりあり。 |

第13図 土坑5 (1/60)

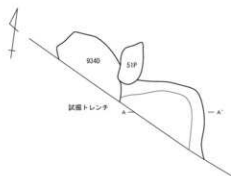


933号土坑

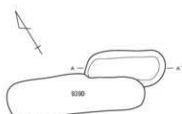
- 9330
- 1層 灰黄褐色土 ローム層・ブロック(a2=15mm)を少量含む。粘性あり、しりりあり。
 - 2層 灰黄褐色土 ローム層・ブロック(a2=25mm)を少量含む。粘性あり、しりりあり。
 - 3層 灰黄褐色土 ローム層・ブロック(a2=30mm)を少量含む。粘性あり、しりりあり。
 - 4層 褐色土 ローム層・ブロック(a2=15mm)・礫(a50mm)を数層含む。粘性や中粒なし、しりりあり。
 - 5層 1:10(黄褐色土) ローム層・ブロック(a2=15mm)を数層含む。粘性や中粒なし、しりりあり。
 - 6層 明黄褐色土 ローム層・ブロック(a2=25mm)を少量含む。粘性強い、しりりあり。
 - 7層 褐色土 ローム層(a2=25mm)・礫(a30~50mm)を数層含む。粘性強い、しりりあり。
 - 8層 1:10(黄褐色土) ローム層・ブロック(a2=15mm)を少量含む。粘性強い、しりりあり。
 - 9層 褐色土 ローム層・白色砂(a2=25mm)を数層含む。粘性や中粒なし、しりりあり。
 - 10層 1:10(黄褐色土) ローム層・ブロック(a2=30mm)を少量含む。粘性あり、しりりあり。
 - 11層 1:10(黄褐色土) ローム層・ブロック(a2=30mm)を少量含む。粘性あり、しりりあり。
 - 12層 1:10(黄褐色土) ローム層・ブロック(a2=20mm)を少量含む。粘性あり、しりりあり。
 - 13層 1:10(黄褐色土) ローム層・ブロック(a2=20mm)を少量含む。粘性や中粒なし、しりりあり。
 - 14層 褐色土 ローム層・ブロック(a2=15mm)を数層含む。粘性や中粒なし、しりりあり。
 - 15層 1:10(黄褐色土) ローム層・ブロック(a2=20mm)を少量含む。粘性や中粒なし、しりりあり。
 - 16層 褐色土 ローム層・ブロック(a2=15mm)・礫(a20mm)を数層含む。粘性や中粒なし、しりりあり。
 - 17層 1:10(黄褐色土) ローム層・ブロック(a2=15mm)を数層含む。粘性や中粒なし、しりりあり。
 - 18層 灰黄褐色土 ローム層・ブロック(a2=20mm)を少量含む。礫(a30~15mm)を数層含む。粘性あり、しりりあり。
 - 19層 1:10(黄褐色土) ローム層・ブロック(a2=30mm)を少量含む。粘性あり、しりりあり。
 - 20層 1:10(黄褐色土) ローム層・ブロック(a2=15mm)を数層含む。粘性あり、しりりあり。
 - 21層 褐色土 ローム層(a2=25mm)を数層含む。粘性あり、しりりあり。



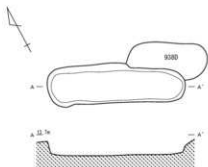
934号土坑



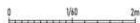
937号土坑



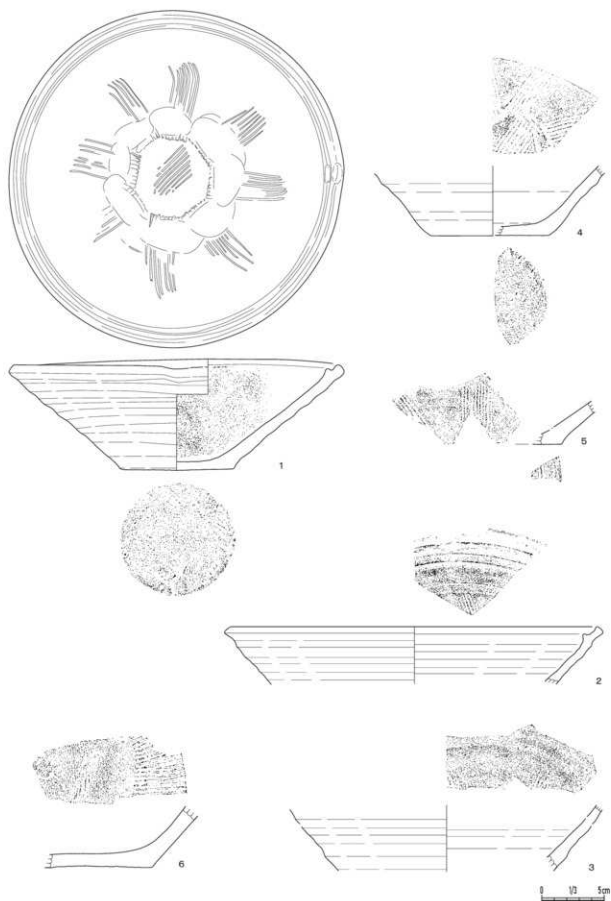
938号土坑



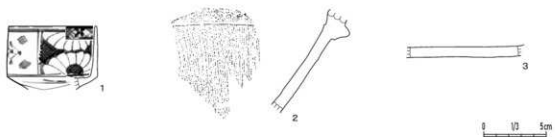
939号土坑



第14図 土坑6(1/60)



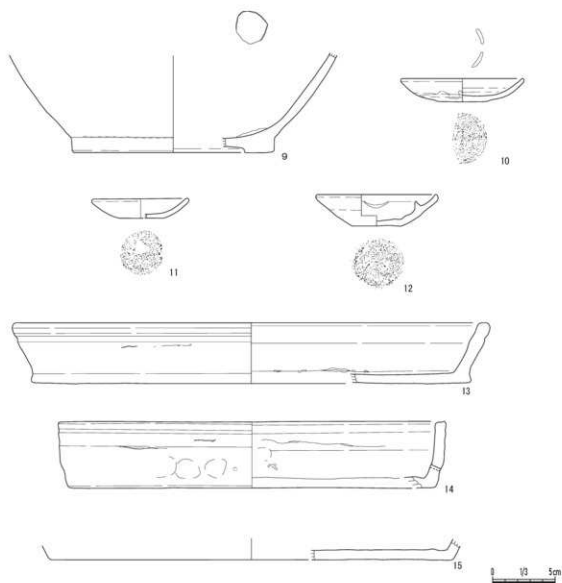
第15図 912号土坑出土遺物(1/3)



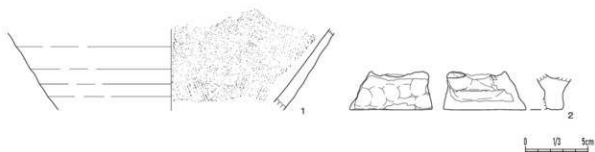
第16図 914号土坑出土遺物(1/3)



第17図 915号土坑出土遺物1(1/3)



第18図 915号土坑出土遺物2 (1/3)



第19図 930号土坑出土遺物 (1/3)

| 調査番号 図版番号 | 遺構名 | 種 別 | 形 相 | 法量 (cm) | 製作の特徴等 | 指定地域 | 時 期 |
|--------------------|------|-----|-----|----------------------------|---|--------|---------------------|
| 第15図1 図版7-2-1 | 912D | 陶器 | 環鉢 | 口径57 高43 底8.7 | 口縁部はY字型/口内面を内側から押出し、片口を成形/体部は直線的に外傾/色調は濃い赤褐色/胎土に石英・チャート・白色粒子・褐色粒子を含む/8本一筋の頸口を9本放射状に推す/内底部には頸口を「一」字状に推す/胎土の色調は黄褐色/内外面に鉄軸/底部に回転糸切り痕が現る/面取り中継出土/古瀬戸後期IVa~新涼派 | 瀬戸・美濃産 | 中世 (15c後半) |
| 第15図2 図版7-2-2 | 912D | 陶器 | 環鉢 | 高[3.5] | 口縁部はY字型/8本一筋の頸口/外面クロコ目面露/外面に鉄軸/胎土の色調は黄褐色/胎土に白色粒子を含む/口縁部は鉄軸/胎土が1と類似 | 瀬戸・美濃産 | 中世 (15c後半) |
| 第15図3 図版7-2-3 | 912D | 陶器 | 環鉢 | 高[5.6] | 体部は直線的に外傾する/6本一筋の頸口/外面クロコ目面露/内外面に鉄軸/胎土の色調は黄褐色/胎土に白色粒子を含む、精練されている/体部片/胎土などが1と類似 | 瀬戸・美濃産 | 中世 (15c後半) |
| 第15図4 図版7-2-4 | 912D | 陶器 | 環鉢 | 高[37] 底(8.8) | 体部は直線的に外傾する/9本一筋の放射状頸口/内底面の頸口は交差する/内外面に鉄軸/底部に回転糸切り痕が現る/胎土の色調は黄褐色/胎土に長石を含む、精練されている/体部から底部小片/面取り中継出土/胎土などが1と類似 | 瀬戸・美濃産 | 中世 (15c後半) |
| 第15図5 図版7-2-5 | 912D | 陶器 | 環鉢 | 高[3.4] | 体部は直線的に外傾する/10本一筋の放射状頸口/内外面に鉄軸/底部に回転糸切り痕が現る/胎土の色調は黄褐色/胎土にチャート・褐色粒子を含む/体部から底部小片/胎土などが1と類似 | 瀬戸・美濃産 | 中世 (15c後半) |
| 第15図6 図版7-2-6 | 912D | 陶器 | 環鉢 | 高[4.9] | 体部は直線的に外傾する/8本一筋の放射状頸口/内底面の頸口は三角パターン/内外面に鉄軸/底部に付着/内面黄褐色、外面褐色/胎土の色調は褐色、胎土に石英・チャート・白色粒子を含む/内底部は頸口が浅くなるほど低く込まれる/体部から底部小片/頸口と主部の高、土層出土 | 堺系 | 近世 (18c後半~19c) |
| 第16図1 図版8-1-1 | 914D | 磁器 | 平皿碗 | 口(7.0) 高[5.0] | 外面染付四喜刺唐文/縁内四喜方文 | 肥前系 | 近世 (1760~1810年代) |
| 第16図2 図版8-1-2 | 914D | 陶器 | 環鉢 | 高[8.2] | 体部は僅かに内湾しつつ外傾する/9本一筋の頸口/内外面に鉄軸/色調は灰青色/胎土に石英・長石・黄色粒子を含む | - | 近世 |
| 第16図3 図版8-1-3 | 914D | 土器 | 燈塔 | 高[1.0] | 内面端部は僅かに残存/内面1等なナデ/外底面はちり/色調は内面に濃い黄褐色、外面に濃い黄褐色/胎土に石英・角閃石・白色粒子を含む/中央部下継出土 | 在地系 | 中世後半~近世 |
| 第17図1 図版8-2-1 | 915D | 磁器 | 半球碗 | 口(10.0) 高[4.0] | 外面染付唐草唐文 | 肥前系 | 近世 (1710~1750年代) |
| 第17図2 図版8-2-2 | 915D | 磁器 | 広葉碗 | 口(11.5) 高[4.0] | 外面染付新先文/縁内二重唐線 | 瀬戸・美濃産 | 近世 (1810~1830年代) |
| 第17図3 図版8-2-3 | 915D | 磁器 | 広葉碗 | 口(9.0) 高[5.5] 底(4.8) | 外面染付竹持竹文/縁内唐線 | 肥前系 | 近世 (1780~1830年代) |
| 第17図4 図版8-2-4 | 915D | 磁器 | 燗火碗 | 口(11.2) 高5.7 底4.2 | 外面染付花蝶文/見込寿字文/縁内大唐線 | 瀬戸・美濃産 | 近世 (1810~1820年代) |
| 第17図5 図版8-2-5 | 915D | 磁器 | 燗火碗 | 口(10.0) 高[4.0] | 外面染付牡丹文/縁内大唐線 | 瀬戸・美濃産 | 近世 (1810~1830年代) |
| 第17図6 図版8-2-6 | 915D | 磁器 | 碗蓋 | 口11.2 高3.7 底6.2 | 外面染付草花文/見込染付曇文 | 肥前系 | 近世 (1820~1860年代) |
| 第17図7 図版8-2-7 | 915D | 陶器 | 輪売皿 | 口(16.4) 高4.4 底(6.8) | 瓦軸/見込蛇の目軸ハギ/付高台 | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1730~1770年代) |
| 第17図8 図版8-2-8 | 915D | 陶器 | 鏝 | 高[7.5] | 内外面鉄軸/外面黒軸流し | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1700~1860年代) |
| 第18図9 図版8-2-9 | 915D | 陶器 | 鏝 | 口(10.0) 高[4.0] | 内外面鉄軸/見込目紋 | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1700~1860年代) |
| 第18図10 図版8-2-10 | 915D | 陶器 | 皿 | 口(9.6) 高1.8 底(3.8) | 内外面鉄軸/底面軸拭き取り/見込唐文様 | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1670~1860年代) |
| 第18図11 図版8-2-11 | 915D | 土器 | 皿 | 口7.5 高1.6 底3.6 | 内外面透明軸/左回転糸切底 | 在地系 | 近世 (1770~1860年代) |
| 第18図12 図版9-1-12 | 915D | 陶器 | 灯明皿 | 口9.5 高2.5 底3.8 | 内外面透明軸/左回転糸切底 | 在地系 | 近世 (1770~1860年代) |
| 第18図13 図版9-1-13 | 915D | 土器 | 燈塔 | 口(37.4) 高4.7 底(34.8) | 口縁部は油取りされ、頂部は平坦/体部は直線的に外傾し、内外面ナデ調整/内面上部はナデによる段を有する/外面上部に横位波紋が1条めぐる/体部内外面厚付着/胎土に石英・長石・褐色粒子を含む | 在地系 | 近世 (17c後半以降) |
| 第18図14 図版9-1-14 | 915D | 土器 | 燈塔 | 口(30.6) 高5.3 底(29.0) | 口縁部は中やせむ/体部はゆるやかに内湾/外面上部の指節部により顕明凹む/外面から底面はちり/体部下にφ2.5mmの補修孔1ヶ所/色調は暗褐色/胎土に石英・長石・黒色粒子・褐色粒子を含む | 在地系 | 近世 (17c後半以降) |
| 第18図15 図版9-1-15 | 915D | 土器 | 燈塔 | 高[7.7] 底(32.0) | 体部は僅かに外傾する/内底面端部に強いナデがめぐる/外底面はちり/内面厚付着/第4層出土 | 在地系 | 近世 (17c後半以降) |
| 第19図1 図版9-2-1 | 930D | 陶器 | 環鉢 | 高[3.4] | 体部は直線的に外傾する/14本一筋の頸口/内外面に鉄軸/胎土色調は濃い黄褐色/930D覆土出土 | 瀬戸・美濃産 | 中世 (16c後半) |
| 第19図2 図版9-2-2 | 930D | 土器 | 燈塔 | 高[3.0] | 体部下は僅かに外傾、底面は平坦/内面上部に耳が僅かに残存/外面に黒斑痕多数/外面から底面はちり/色調は灰黄褐色/胎土に角閃石、白色粒子・褐色粒子を含む | 在地系 | 近世 (16c~17c前半) |

第4表 土坑出土土器一覧

(3) 井戸跡

10号井戸跡

遺 構 (第20・21図)**[位 置]** (E-1・2) グリッド**[検出状況]** 933Dに切れ、935・936Dを切る。

[構 造] 南西側の崖線に向かう自然傾斜を利用して難壇状に粗造成し、いわゆる「まいまいず井戸」状の昇降ルートを推定南東側に設定して、版築または修復しながら大型井戸を構築する。平面形：不整円形か。井戸跡本体の開口部は円形。井戸跡本体を囲むように平場が構築されている。断面形：井戸跡本体は漏斗状に大きく広がり、64°~67°で立ち上がってから凹凸を描きつつ24°~35°で立ち上がる。平場面は15°程度で緩やかに傾斜し50°で立ち上がる。規模：長軸現況9.50m / 短軸現況4.55m / 深さ現況180cm。危険を伴うため底面の検出は断念した。主軸方位：N-31°-W。

[覆 土] 31層に分層される。

[遺 物] 土器（鉢・かわらけ・焙烙）、陶器（甕・香炉・灰軸皿・志野皿・総織部皿・播鉢）、磁器（染付碗皿）、板碑片、礫など162点が出土した。

[時 期] 当地点全体の造成状況と覆土、出土遺物の垂直分布、遺構の切り合いから総体として15世紀後半以降に設置され、以後数回の補修を経て18世紀代に窪地となるまで遺物が投棄または流れ込む。遺物は、当初の掘り方面や補修を伺わせる版築層からは出土せず、36~37層の内側から出土し、且つ22層より上層では17世紀後半以降の遺物が出土する。この傾向から使用時期は、設置当初の15世紀後半以降で血状の窪地（第21図 21・22層）からの出土遺物以前、17世紀前半と推定される。

遺 物 (第22~24図、図版9-3、10、11、第5・6表)**[陶磁器・土器]** (第22・23図、図版9-3、10、第5表)

1~3、5~7、14~20は陶器、12・13は磁器、4・8~11・21~23は土器である。

1・2・18は瀬戸・美濃産、5~7・14~17は瀬戸・美濃系の陶器である。18は香炉で古瀬戸後期IV新段階、5・7は播鉢で5は大窯2段階（藤澤 2002）、7は大窯2~4段階のものである。1は折縁皿で大窯4~連房1段階、2は志野皿で大窯4後半以降。いずれも16世紀末葉~17世紀中葉ごろ、17が総織部皿で17世紀前半~中葉頃の製品である。6は播鉢で17世紀中葉頃、14~16は灰軸の皿で、14は折縁となり見込みに鉄繪蘭竹文がある。15は稜皿で17~18世紀代の製品、16は17世紀中葉の製品である。19は外面に鉄軸が掛かる甕片である。3は常滑産の甕体部下方の破片で焼き上がりから14~15世紀の資料であろう。

4は在地系鉢の体部立ち上がり部の破片で14~15世紀段階の製品。10・11は中世のかわらけで15~16世紀のものか。11は緻密な胎土で、いわゆる「うずまき」かわらけ（田中 2012）の可能性がある。底面には板状圧痕がみとめられる。

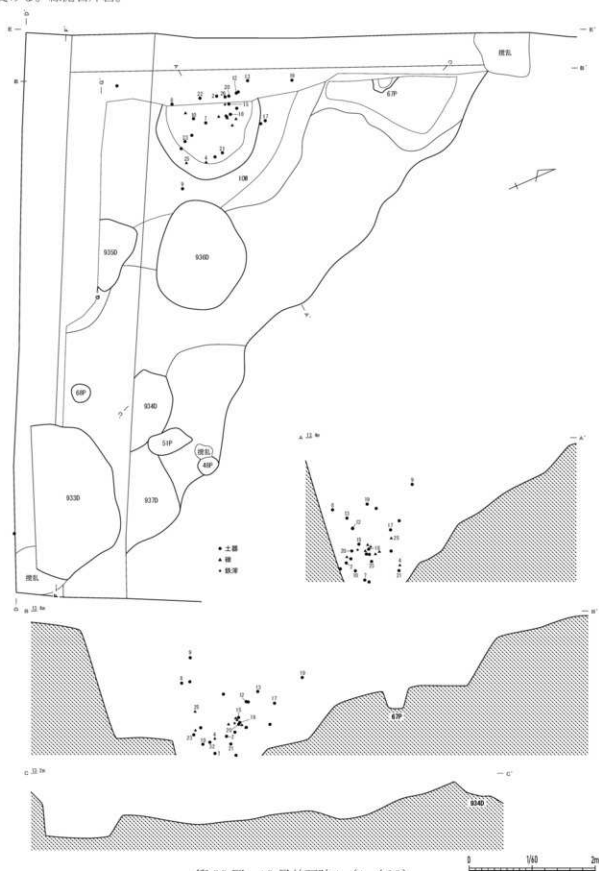
12・13は肥前系磁器の碗17世紀後半~18世紀代の製品。20は近世段階の備前播鉢片。

8・21・22は在地系の焙烙片。8は内面中位に明瞭な段を有し、古制を留ており16世紀中葉頃のものであろう。23は在地系の火鉢である。21~23は近世段階のものとして推定される。

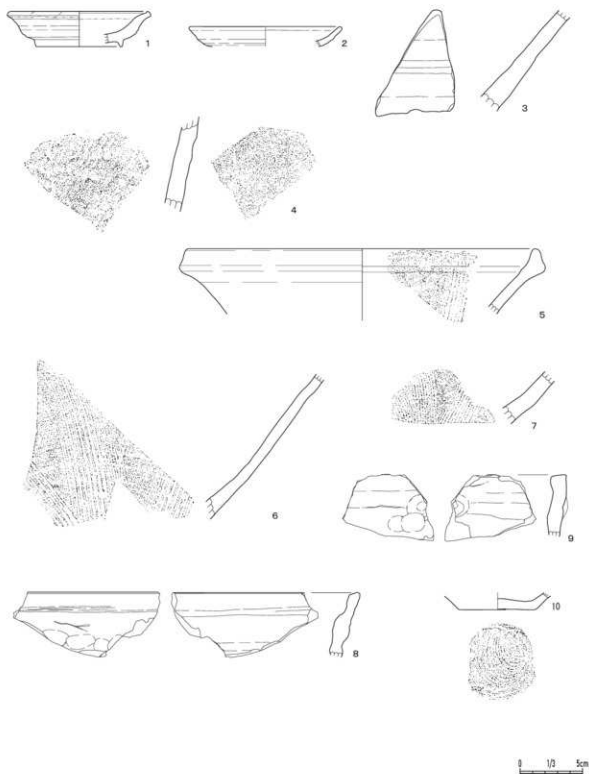
[板 碑] (第23・24図、図版11、第6表)

24・25は板碑片である。24は当初面を残さず片理に沿った平面的な剥離面の側面及び半円形の端に数ヶ所打痕をもって形を整え、2次的な加工を受けている。裏面は4条の押し削り痕を有し、一部に当

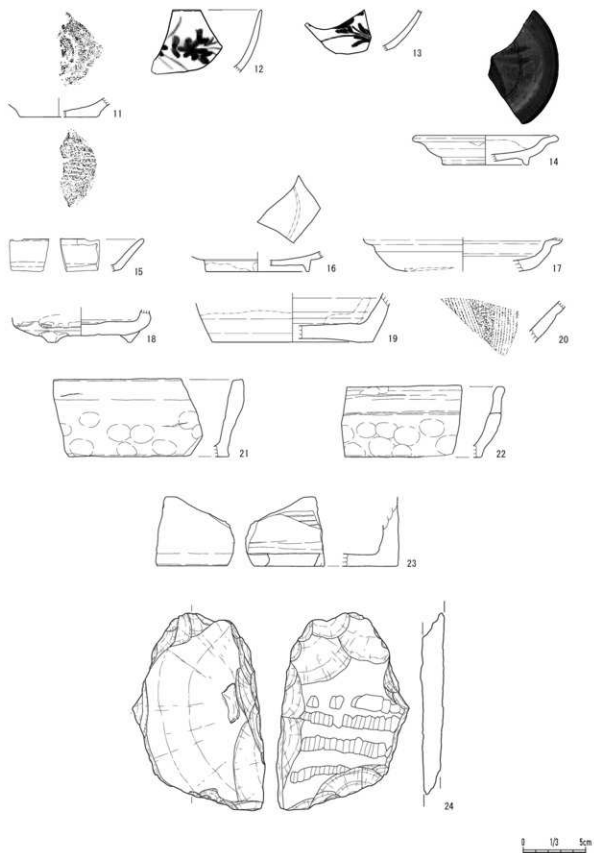
初面を有する。緑泥石片岩。25は表面に文字様の小さな葉研彫りの痕跡があり、僅かに当初面を残すが判読はできなかった。裏面は明瞭な剝離面となる。表裏とも周囲に小さな打痕があり2次的な加工を受ける。緑泥石片岩。



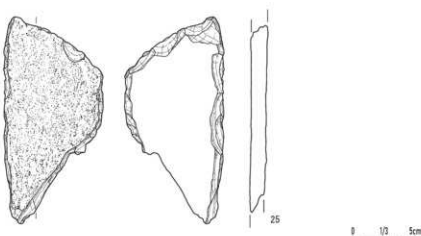
第20図 10号井戸跡1 (1/60)



第22図 10号井戸跡出土遺物1 (1/3)



第23図 10号井戸跡出土遺物2 (1/3)



第24図 10号井戸跡出土遺物3 (1/3)

| 発掘番号 図版番号 | 遺構名 | 種別 | 器種 | 法量 (cm) | 制作の特徴等 | 検定年代 | 時期 |
|-------------------|-----|----|------|---------------------|---|--------|---------------------|
| 第22第11 図版9-3-1 | 10W | 陶器 | 皿 | 高 [2.7] 底 [6.8] | 緑内面土胎/見込鉄絵付高台/胎土色調は淡黄褐色/折縁直 | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1590～1610年代) |
| 第22第2 図版9-3-2 | 10W | 陶器 | 皿 | 口 [11.6] 高 [1.5] | 珪石粒/土野直 | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1590～1600年代) |
| 第22第3 図版9-3-3 | 10W | 陶器 | 鉢 | 高 [8.0] | 内面に自然釉/外面に鉄粒/胎土色調は淡い黄褐色/胎土は長石・石英・白色粒子を含む | 常滑産 | 中世 (14c～15c) |
| 第22第4 図版9-3-4 | 10W | 土器 | 鉢 | 高 [7.5] | 高縁的に外縁する体部/外面に幅広のハケ目発現する/内面は滑らかに磨製。斜色の押痕が見られる/南東寄り下掘出土 | 在地系 | 中世 (14c～15c 前期) |
| 第22第5 図版9-3-5 | 10W | 陶器 | 深鉢 | 口 [29.0] 高 [5.7] | 内外面鉄粒/体部は外反し、口縁部は直立/口縁部は横ナデにより凹凸/胎土色調は黄褐色/胎土は長石・チャートを含む | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1630～1660年代) |
| 第22第6 図版10-6 | 10W | 陶器 | 深鉢 | 高 [12.5] | 内外面鉄粒/器目 12 条一組/胎土色調は黄褐色/胎土は長石・黒色粒子を含む | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1630～1660年代) |
| 第22第7 図版10-7 | 10W | 陶器 | 深鉢 | 高 [4.2] | 内外面鉄粒/器目 14 条一組/胎土色調は黄褐色/胎土は白色粒子を含む精緻されている/内面下部掘出土 | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1630～1660年代) |
| 第22第8 図版10-8 | 10W | 土器 | 燈炷 | 高 [5.1] | 口縁部は直取られ、頂部は平削。外縁部は鋭角/外面下部はくびれ強く、折頭が見られる/内面からの押はてで一部磨製が過り上がる/内面強い焼ナデ・約 12cmほどの穿孔が押圧される/胎土色調は淡い黄褐色/胎土は石英・チャート・褐色粒子を含む/南東へ掘出土 | 在地系 | 中世 (16c 中葉) |
| 第22第9 図版10-9 | 10W | 土器 | 燈炷 | 高 [4.9] | 口縁部は直取られ、頂部は平削。外縁部は鋭角/外面下部はくびれ強く、折頭が見られる/内面からの押はてで一部磨製が過り上がる/内面強い焼ナデ・約 12cmほどの穿孔が押圧される/胎土色調は淡い黄褐色/胎土は石英・チャート・褐色粒子を含む/南東へ掘出土 | 在地系 | 中世 (15c～16c) |
| 第22第10 図版10-10 | 10W | 土器 | かわらけ | 高 [1.35] 底 [6.0] | 底部回転糸切り施し/体部はわずかに外反する/胎土色調は褐色/胎土は石英・チャート・角閃石を含む/中央部下掘出土 | 在地系 | 中世 (15c～16c) |
| 第23第11 図版10-11 | 10W | 土器 | かわらけ | 高 [1.5] 底 [6.0] | ロクロ形成/内底面に移状工具による円形傷文/底面に幅 4cmの板状はね/内外面にうすく磨付殺/胎土色調は外面褐色、内面に淡い褐色/胎土はチャートを含み精緻されている | 在地系 | 中世 (15c 後半) |
| 第23第12 図版10-12 | 10W | 磁器 | 碗 | 高 [5.0] | 外面染付草花文 | 肥前系 | 近世 (1680～1740年代) |
| 第23第13 図版10-13 | 10W | 磁器 | 碗 | 高 [3.25] | 外面染付草花文 | 肥前系 | 近世 (1650～1700年代) |
| 第23第14 図版10-14 | 10W | 陶器 | 皿 | 口 [20.0] 底 [6.8] | 緑内面土胎/見込鉄絵染付竹文高台/胎土色調は灰白色/折縁鎌竹文直 | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1630～1660年代) |
| 第23第15 図版10-15 | 10W | 陶器 | 皿 | 高 [2.6] | 内外面鉄粒/灰輪縁直 | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1630～1700年代) |
| 第23第16 図版10-16 | 10W | 陶器 | 皿 | 高 [1.6] 底 [8.2] | 内外面鉄粒/見込に重ね鉄絵/逆周 1式 | 瀬戸・美濃系 | 近世 (17c 中葉) |
| 第23第17 図版10-17 | 10W | 陶器 | 皿 | 口 [15.0] 高 [2.7] | 内外面鉄粒/組織断面 | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1630～1660年代) |
| 第23第18 図版10-18 | 10W | 陶器 | 香炉 | 高 [2.7] 底 [7.0] | 外面鉄粒/足形付け/胎土色調は淡い黄褐色/胎土は白色粒子・黒色粒子を含む | 瀬戸・美濃系 | 中世 (15c 後半) |
| 第23第19 図版10-19 | 10W | 陶器 | 鉢 | 高 [3.9] 底 [12.8] | 内外面鉄粒/器目 9 条一組/胎土色調は淡い黄褐色/胎土は長石・白色粒子・チャートを含む | 瀬戸・美濃系 | 近世 (1670～1860年代) |
| 第23第20 図版10-20 | 10W | 陶器 | 深鉢 | 高 [3.3] | 内外面鉄粒/器目 9 条一組/外面のロクロ目銀著/胎土色調は褐色/胎土は白色粒子・褐色粒子・黒色粒子を含む | 瀬前系 | 近世 |
| 第23第21 図版10-21 | 10W | 土器 | 燈炷 | 口 [33.2] 高 [6.1] | 口縁部は直取られ平削/外面下部のくびれ強く、折頭が磨製される/胴下部から底部に断面のちぢみ/内面横ナデ/胎土色調は暗褐色/胎土は白色粒子・褐色粒子・石英を含む/南東寄り下掘出土 | 在地系 | 近世 |
| 第23第22 図版10-22 | 10W | 土器 | 燈炷 | 口 [37.8] 高 [5.6] | 口縁部は直取られ、頂部は平削/外面下部はくびれ強く、折頭が磨製して見られる/上方に粘土層合痕が明瞭/内面横ナデ/胎土色調は外面黒色、内面暗褐色/胎土は白色粒子・褐色粒子・角閃石を含む | 在地系 | 近世 |
| 第23第23 図版10-23 | 10W | 土器 | 火鉢 | 高 [5.5] | 鉢部は垂直に立ち上がる/外面に帯状ナデ/内面磨製削し、ナデ前の横板ハケ目が発出/底部近くの横ナデ顯著/胎土色調は外面灰黄色、内面に淡い黄褐色/胎土は石英・白色粒子を含む/南東寄り下掘出土 | 在地系 | 近世 |

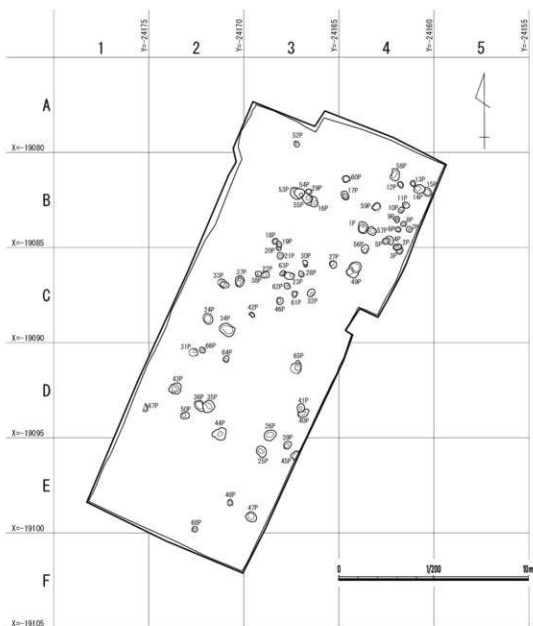
第25表 10号井戸跡出土陶器・磁器・土器一覽

| 検出番号 図版番号 | 器種 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 特徴 | 出土位置 |
|---------------------|----|------|------------|-----------|------------|-----------|--|------------|
| 第23図24 図版11-1-24 | 板碑 | 緑泥片岩 | [15.7] | [10.0] | 1.8 | 457.7 | 表面割傷／裏面に4本のノミ跡／左縁縁と上下端に粗い調整刻 痕を遺し、転用の意図がみられる／中世以降 | HOW |
| 第24図25 図版11-1-25 | 板碑 | 緑泥片岩 | [16.4] | [7.8] | 1.3 | 256.0 | 表面割傷／表面にわずかに文字彫りが見られ、裏面が残る／ 裏面下部に内全周部に調整刻痕を遺し、丸みのある台布に整形 している／中世以降 | HOW 南東寄り中層 |

第6表 10号井戸跡出土板碑一覧

(4) ビット

本地点では計68本のビットを検出し、すべて中世以降の所産と想定した。ここでは、第26～31図、
第7～9表に示し、その内、遺物の出土した47・65Pについて記述する。



第25図 ビット位置図(1/200)

47号ピット

遺 構 (第30図)

[位 置] (E-3) グリッド

[検出状況] 上面に一部擾乱が被る。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：72°~78°で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸56cm/短軸50cm/深さ17cm。主軸方位：N-75°-W。

[覆 土] 3層に分層される。

[遺 物] 18世紀後半の磁器(肥前系染付碗片)が出土した。小片のため図示はしていない。

[時 期] 出土遺物から江戸時代後期と想定される。

65号ピット

遺 構 (第26図)

[位 置] (D-3) グリッド

[検出状況] 930Dと重複するが切り合い関係は不明である。

[構 造] 平面形：不整形楕円形。断面形：底面から85°~90°で立ち上がり、上層10cmで逆ハの字に40°~60°に開いて立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模：長軸69cm/短軸50cm/深さ91cm。主軸方位：N-30°-W。

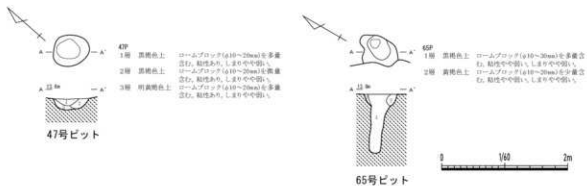
[覆 土] 2層に分層される。

[遺 物] 縄文時代早期末葉の条痕文系土器底部小片と銭貨が出土し、細片化した人頭骨片を検出した。

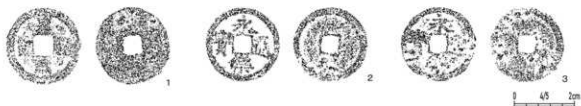
[時 期] 最新出土銭から15世紀前葉以降と想定される。

遺 物 (第27図、図版12-2、第9表)**銭 貨** (第27図、図版12-2、第9表)

永楽通宝(明銭/初铸1408年)2枚、皇宋通宝(北宋銭/1038~1040)1枚が出土した。

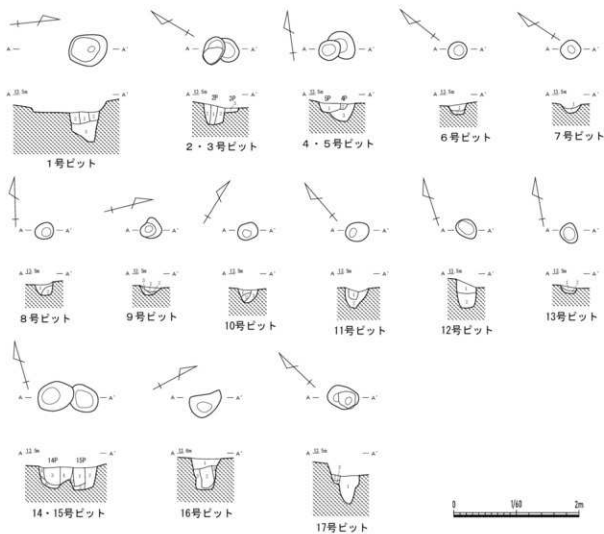


第26図 47・65号ピット (1/60)



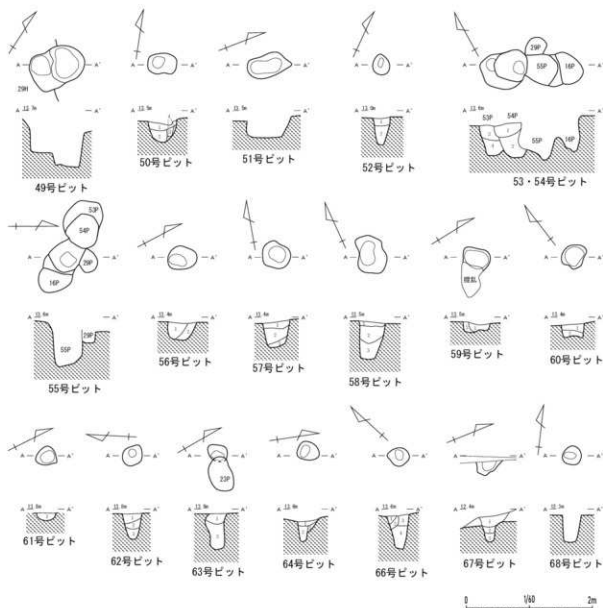
第27図 65号ピット出土遺物 (4/5)

第3章 検出された遺構・遺物



- 1P**
- 1層 灰褐色土 ローム殻・ブロック(a2~15cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 灰褐色土 ローム殻・ブロック(a2~15cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 3層 褐色土 ローム殻・ブロック(a2~15cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
- 2・3P**
- 1層 灰褐色土 ロームブロック(a20~30cm)を少量含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 褐色土 ロームブロック(a20~30cm)を少量含む。粘性あり。しまりあり。
 - 3層 灰褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりあり。
- 4・5P**
- 1層 濃い黄褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 濃い黄褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 3層 褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
- 6P**
- 1層 濃い黄褐色土 黒色殻(a2~5cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりあり。
 - 2層 灰褐色土 黒色殻(a2~5cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりあり。
- 7P**
- 1層 茶褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
- 8P**
- 1層 灰褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 濃い黄褐色土 ローム殻(a2~8cm)・黒色ブロック(a10~20cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりあり。
- 9P**
- 1層 褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりあり。
 - 2層 褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を少量含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 3層 褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりあり。
- 10P**
- 1層 茶褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 灰褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 3層 灰褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
- 11P**
- 1層 茶褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 茶褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 3層 灰褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
- 12P**
- 1層 褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 3層 灰褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
- 13P**
- 1層 濃い黄褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を少量含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 濃い黄褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
- 14・15P**
- 1層 灰褐色土 ローム殻・ブロック(a1~10cm)を少量含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 褐色土 ローム殻(a1~5cm)を多数。ロームブロック(a10cm)を少量含む。粘性あり。しまりや中強い。
 - 3層 灰褐色土 ローム殻(a1~5cm)を多数。ロームブロック(a10~40cm)を少量含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 4層 褐色土 ローム殻(a1cm)を多数。ロームブロック(a15cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 5層 褐色土 ローム殻(a1cm)を多数含む。粘性強い。しまり強い。
 - 6層 褐色土 ローム殻(a1cm)を多数含む。粘性強い。しまり強い。
- 16P**
- 1層 褐色土 ローム殻・黒色殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 茶褐色土 ローム殻・黒色殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 3層 灰褐色土 ローム殻・黒色殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
- 17P**
- 1層 濃い黄褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を少量含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 2層 濃い黄褐色土 ローム殻(a2~8cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。
 - 3層 濃い黄褐色土 ロームブロック(a10~20cm)を多数含む。粘性や中強い。しまりや中強い。

第28図 ビット1 (1/60)



- 50P**
- 1層 灰褐色土
 - 2層 灰褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 土質不明
- ロームブロッコ (径約30cm)を多数含む。粘性あり、しまりやや強い。
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性あり、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~7cm)を多数含む。粘性あり、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~7cm)を多数含む。粘性あり、しまりやや強い。
- 52P**
- 1層 土質不明
 - 2層 土質不明
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性あり、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性あり、しまりやや強い。
- 53-54P**
- 1層 灰褐色土
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 灰褐色土
 - 4層 灰褐色土
- ロームブロッコ (径約30cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- 55P**
- 1層 灰褐色土
 - 2層 灰褐色土
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- 57P**
- 1層 赤褐色土
 - 2層 土質不明
 - 3層 赤褐色土
- ローム錠 (径2~5cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~5cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~5cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- 58P**
- 1層 土質不明
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 赤褐色土
- ロームブロッコ (径約30cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- 59P**
- 1層 赤褐色土
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 赤褐色土
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- 60P**
- 1層 赤褐色土
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 赤褐色土
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。

- 61P**
- 1層 灰褐色土
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 赤褐色土
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- 62P**
- 1層 灰褐色土
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 赤褐色土
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- 63P**
- 1層 赤褐色土
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 赤褐色土
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性あり、しまりあり。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性あり、しまりあり。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性あり、しまりあり。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性あり、しまりあり。
- 64P**
- 1層 赤褐色土
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 赤褐色土
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ロームブロッコ (径約20cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- 66P**
- 1層 赤褐色土
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 赤褐色土
- ロームブロッコ (径約30cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- 67P**
- 1層 赤褐色土
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 赤褐色土
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- 68P**
- 1層 赤褐色土
 - 2層 赤褐色土
 - 3層 赤褐色土
 - 4層 赤褐色土
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。
- ローム錠 (径2~8cm)を多数含む。粘性やや強い、しまりやや強い。

第31図 ビット4 (1/60)

| 遺構名 | 位置 | 平面形 | 主軸方位 | 規模 (m) | | | 覆土及び特徴 | 主な遺物 | 時 期 |
|-----|-------|-------|---------|--------|--------|------|-----------------------------------|-------------------|------|
| | | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | |
| 1P | B4 | 円形 | N-9°-E | 0.60 | 0.50 | 0.47 | 3層/912Dを切る/柱痕? | 無 | 中世以降 |
| 2P | B4・C4 | 楕円形 | N-77°-E | 0.45 | 0.32 | 0.31 | 2層/3Pを切る/柱痕? | 縄文前期末〜中世初遺土器片 | 中世以降 |
| 3P | B4・C4 | 楕円形 | N-20°-E | 0.32 | (0.24) | 0.06 | 単層/2Pに切られる | 無 | 中世以降 |
| 4P | B4 | 楕円形 | N-29°-W | 0.49 | (0.23) | 0.28 | 2層/5Pに切られる | 弥生遺片 | 中世以降 |
| 5P | B4 | 円形 | N-9°-E | 0.33 | 0.32 | 0.14 | 単層/4Pを切る | 無 | 中世以降 |
| 6P | B4 | 円形 | N-86°-E | 0.30 | 0.28 | 0.15 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 7P | B4 | 円形 | N-57°-E | 0.32 | 0.30 | 0.08 | 単層/ローム粒を微量含む黒褐色土 | 無 | 中世以降 |
| 8P | B4 | 円形 | N-2°-E | 0.29 | 0.26 | 0.16 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 9P | B4 | 不整形 | N-14°-E | 0.34 | 0.33 | 0.13 | 3層 | 無 | 中世以降 |
| 10P | B4 | 楕円形 | N-10°-E | 0.32 | 0.28 | 0.20 | 3層 | 無 | 中世以降 |
| 11P | B4 | 楕円形 | N-45°-W | 0.36 | 0.30 | 0.29 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 12P | B4 | 楕円形 | N-21°-W | 0.35 | 0.28 | 0.43 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 13P | B4 | 円形 | N-34°-W | 0.31 | 0.25 | 0.11 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 14P | B4 | 円形 | N-75°-W | 0.56 | 0.46 | 0.34 | 3層/15Pを切る/柱痕? | 無 | 中世以降 |
| 15P | B4 | 円形 | N-75°-W | 0.42 | (0.39) | 0.35 | 3層/14Pに切られる/柱痕? | 無 | 中世以降 |
| 16P | B3 | 不整形 | N-12°-W | 0.57 | 0.37 | 0.49 | 3層/柱痕? | 無 | 中世以降 |
| 17P | B4 | 楕円形 | N-14°-W | 0.46 | 0.35 | 0.44 | 3層 | 無 | 中世以降 |
| 18P | B3 | 円形 | N-35°-E | 0.33 | 0.29 | 0.36 | 2層/19Pを切る | 無 | 中世以降 |
| 19P | B3 | 不整形円形 | N-23°-W | (0.32) | 0.27 | 0.27 | 2層/18・20Pに切られる | 無 | 中世以降 |
| 20P | B3・C3 | 不整形円形 | N-80°-W | 0.28 | 0.19 | 0.10 | 単層/ローム粒・ブロックを多量に含む/黒褐色土/19Pを切る | 無 | 中世以降 |
| 21P | C3 | 円形 | N-9°-E | 0.35 | 0.33 | 0.37 | 3層 | 小礫 | 中世以降 |
| 22P | C3 | 楕円形 | N-77°-E | 0.44 | 0.33 | 0.32 | 3層/38Pと重なる | 無 | 中世以降 |
| 23P | C3 | 不整形円形 | N-86°-E | 0.56 | 0.35 | 0.56 | 7層/63Pと重なる | 縄文前期 浮島・美津系土器片 | 中世以降 |
| 24P | C2 | 円形 | N-0° | 0.55 | 0.50 | 0.19 | 3層 | 無 | 中世以降 |
| 25P | E3 | 不整形円形 | N-30°-W | 0.60 | 0.49 | 0.47 | 4層 | 無 | 中世以降 |
| 26P | D3・E3 | 円形 | N-81°-E | 0.63 | 0.55 | 0.42 | 4層 | 土器破片 | 中世以降 |
| 27P | C3 | 円形 | N-55°-W | 0.40 | 0.36 | 0.36 | 3層/29Hと重なる/柱痕? | 無 | 中世以降 |
| 28P | C3 | 円形 | N-30°-W | 0.34 | 0.27 | 0.26 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 29P | D3 | 楕円形 | N-18°-W | 0.71 | 0.54 | 0.60 | 2層/55Pに切られる | 無 | 中世以降 |
| 30P | C3 | 不整形円形 | N-20°-W | 0.35 | 0.34 | 0.38 | 3層 | 無 | 中世以降 |
| 31P | D2 | 円形 | N-25°-W | 0.41 | (0.20) | 0.31 | 2層/931Dに切られる | 無 | 中世以降 |
| 32P | C3 | 円形 | N-25°-E | 0.45 | 0.36 | 0.18 | 2層/29Hと重なる/柱痕? | 無 | 中世以降 |
| 33P | C2 | 不整形円形 | N-79°-E | (0.55) | 0.43 | 0.48 | 7層/926Dと重なる/柱痕? | 無 | 中世以降 |
| 34P | C2 | 楕円形 | N-52°-W | 0.79 | 0.56 | 0.28 | 6層 | 縄文前期末土器片 | 中世以降 |
| 35P | D2 | 円形 | N-30°-E | 0.67 | 0.60 | 0.34 | 4層/柱痕? | 無 | 中世以降 |
| 36P | D2 | 不整形円形 | N-44°-W | 0.65 | 0.44 | 0.08 | 単層/ロームブロックを多量に含む/にぶい褐色褐色土/35Pと重なる | 無 | 中世以降 |
| 37P | C2・C3 | 楕円形 | N-13°-E | 0.59 | 0.44 | 0.25 | 4層/36Pと重なる/柱痕? | 弥生土器片 | 中世以降 |
| 38P | C3 | 円形 | N-42°-E | 0.32 | 0.32 | 0.38 | 3層/22Pと重なる | 無 | 中世以降 |
| 39P | E3 | 円形 | N-53°-E | 0.45 | 0.38 | 0.35 | 3層 | 土器破片 | 中世以降 |

第7表 ビット一覧(1)

| 遺構名 | 位置 | 平面形 | 主軸方位 | 規模 (m) | | | 層土及び特徴 | 主な遺物 | 時 期 |
|-----|-------|-------|---------|--------|--------|------|-----------------------------------|-------------------------------|------|
| | | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | |
| 40P | D3 | 不整楕円形 | N-64°-E | 0.62 | 0.28 | 0.44 | 単層/ロームブロックを多量に含む/黄褐色土/41Pに切られる | 無 | 中世以降 |
| 41P | D3 | 円形 | N-21°-W | 0.41 | 0.39 | 0.13 | 単層/ロームブロックを多量に含む/黄褐色土/40Pを切る | 無 | 中世以降 |
| 42P | C3 | 不整形 | N-31°-W | 0.69 | 0.58 | 0.28 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 43P | D2 | 不整円形 | N-60°-E | 0.68 | 0.65 | 0.72 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 44P | D2・E2 | 不整形 | N-38°-E | 0.52 | 0.31 | 0.38 | 5層/柱礎? | 土師器片 | 中世以降 |
| 45P | E3 | 不整楕円形 | N-64°-W | 0.44 | 0.41 | 0.43 | 4層/東側調査区外 | 無 | 中世以降 |
| 46P | C3 | 円形 | N-4°-E | 0.37 | 0.34 | 0.43 | 4層/923Dと重複する | 無 | 中世以降 |
| 47P | E3 | 円形 | N-75°-W | 0.59 | 0.51 | 0.17 | 3層 | 18c 後平肥前系染付 | 近世以降 |
| 48P | E2 | 円形 | N-18°-E | 0.33 | (0.28) | 0.16 | 単層/ロームブロックを多量に含む/にぶ、黄褐色土/10Wと重複する | 無 | 中世以降 |
| 49P | C4 | 不整楕円形 | N-35°-E | 0.85 | 0.60 | - | 単層/ローム粒を少量含む/黄褐色土/29Hを切る | 無 | 中世以降 |
| 50P | D2 | 不整楕円形 | N-81°-E | 0.46 | 0.31 | 0.19 | 4層 | 無 | 中世以降 |
| 51P | E2 | 不整楕円形 | N-21°-E | 0.69 | 0.38 | - | 934・937D、10Wと重複する | 無 | 中世以降 |
| 52P | A3 | 不整円形 | N-37°-W | 0.33 | 0.27 | 0.41 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 53P | B3 | 円形 | N-34°-E | 0.68 | (0.19) | 0.48 | 2層/54Pに切られる | 無 | 中世以降 |
| 54P | B3 | 円形 | N-61°-W | 0.52 | 0.48 | 0.54 | 2層/53Pを切って、55Pに切られる | 無 | 中世以降 |
| 55P | B3 | 不整円形 | N-57°-W | 0.31 | 0.28 | 0.19 | 29・54Pを切る | 弥生後〜古墳初葉片 | 中世以降 |
| 56P | B4・C4 | 楕円形 | N-28°-E | 0.47 | 0.37 | 0.26 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 57P | B4 | 円形 | N-80°-W | 0.44 | 0.41 | 0.40 | 3層 | 無 | 中世以降 |
| 58P | B4 | 不整形 | N-6°-W | 0.64 | 0.45 | 0.59 | 3層 | 無 | 中世以降 |
| 59P | B4 | 不整形 | N-31°-E | 0.42 | (0.32) | 0.16 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 60P | B4 | 不整円形 | N-79°-E | 0.38 | 0.36 | 0.22 | 2層 | 無 | 中世以降 |
| 61P | C3 | 円形 | N-27°-E | 0.30 | 0.29 | 0.12 | 単層/ロームブロックを含む黄褐色土 | 中近世在地土器 | 中世以降 |
| 62P | C3 | 円形 | N-4°-W | 0.32 | 0.31 | 0.40 | 3層 | 無 | 中世以降 |
| 63P | C3 | 不整円形 | N-65°-E | 0.34 | 0.27 | 0.57 | 2層/23Pと重複する | 無 | 中世以降 |
| 64P | D2 | 不整円形 | N-24°-E | 0.35 | 0.28 | 0.32 | 3層 | 無 | 中世以降 |
| 65P | D3 | 不整形 | N-30°-W | 0.52 | (0.44) | 0.93 | 2層 | 縄文早期末土器、 宋通宝、永楽通宝、 人骨細片 | 中世以降 |
| 66P | D2 | 不整円形 | N-43°-W | 0.34 | 0.29 | 0.52 | 4層 | 無 | 中世以降 |
| 67P | D1 | 不整形 | N-19°-E | 0.40 | 0.20 | 0.40 | 3層 | 無 | 中世以降 |
| 68P | E2 | 円形 | N-7°-W | 0.30 | 0.30 | - | - | 無 | 中世以降 |

第8表 ビット一覧(2)

| 探検番号 探検番号 | 器 種 | 材 質 | 外径 (mm) | 内径 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 特 徴 | 出土位置 |
|----------------------|-----|-----|------------|------------|------------|-----------|-----------------------|------|
| 第27区1 2006 11-2-1 | 銭貨 | 銅 | 2.4 | 7.0 | - | 3.0 | 奈良遺宝/初鋳1039年/遺存状態不良 | 65P |
| 第27区2 2006 11-2-2 | 銭貨 | 銅 | 2.4 | 6.0 | - | 4.0 | 奈良遺宝/初鋳1411年/遺存状態やや不良 | 65P |
| 第27区3 2006 11-2-3 | 銭貨 | 銅 | 2.4 | 6.0 | - | 3.0 | 奈良遺宝/初鋳1411年/遺存状態やや不良 | 65P |

第9表 65号ビット出土銭貨一覧

第3節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内出土であるが明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては縄文時代～弥生時代初頭の遺物、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物、中・近世以降の遺物に分類する。

(1) 縄文時代～弥生時代初頭の遺物 (第32～34図、図版11-3・12・13、第10～12・14表)

[石 器] (第32・33図1～5、図版11-3、第14表)

1～5は縄文時代の石器である。

1は2次加工を有する剥片で、両打面の縦長剥片素材。チャート製。2・3は打製石斧で3は表面に自然面を残し基部を欠損する。ホルンフェルス製。4は通有の形態とは異なるが打製石斧とした。平面形は細身で開きのないバチ状、断面は三角形を呈する。全面滑らかに摩滅し左下端部から裏面にかけて連続する剝離が見られる。左右上端部から所々剝離するも摩滅が見られる。ホルンフェルス製。5は石皿で多孔質安山岩製。全体に丁寧な造りである。

[土 器] (第33・34図6～43、図版12・13、第10～12表)

6～9は縄文時代早期の土器、10～26は前期、27～42は中期、43は晩期終末～弥生時代の初頭の土器である。

6～9は早期末葉の条痕文系の土器。

10は外面に貝殻背圧痕文のある前期初頭花積下層式の土器。11～13は前期羽状縄文系の土器である。11・12は外面に0段多条の結束羽状縄文を施文し、13は横位の平行沈線をやや弓なりに施文する。14・15は前期後葉諸磯a式、16～18は同b式、19・20・25は同c式で、25は胴下部から底部にかけて強くくびれる器形となろう。21は器面が摩滅して不鮮明だが形状から諸磯期の獸面把手であろう。22・23は前期後葉浮島系の土器で諸磯a並行のものと思われる。24も浮島系の土器で、半截竹管状工具による横位の三角文が施文され、浮島式後半か。26は横位の結節浮線文が見られる前期末葉の十三菩提式である。

27・29～32は中期初頭の五領ヶ台式、33は外面に縦位のZ字状結節文、34は横位のZ字状結節文があり中期初頭の深鉢体部片である。28は中期中葉で東関東系の中峠式、35は中期中～後葉勝坂～加曾利E式前半期の口縁部片、36は勝坂期の橋状把手、37・38は勝坂系統の体部破片で、垂下する隆帯に横位の連続刻みを施し、地文は縦位LR縄文である。39は加曾利E I～II期の深鉢頸部付近の破片、40は加曾利E II式、41は加曾利E II期並行の連弧文土器口縁部である。42は中期深鉢の底部破片である。

43は縄文時代晩期終末～弥生時代初頭(東日本)の条痕系土器の破片と推定される。資料外面の上部に突帯を付し丸棒状工具で連続した押圧を加える。外面に確認できる地文は斜位の条線文で幅1.5mmで均質な深さで施文されている。内面は横位・斜位の条線文を施し一部をナデ消す。小片ではあるが、突帯を付し表裏条痕を施文する条痕文壺または甕と評価され、柳瀬川流域をはじめ県南西部地区を含め

でも報告例としては管見の限り初出であろう。

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物 (第35図、図版13、第12表)

【土器】(第35図44～47、図版13、第12表)

44～47は弥生時代後期～古墳時代前期の土器である。

44は器台基部、45は高環の脚部から環部へ移行する頸部付近の破片で脚部に1ヶ所穿孔がある。46は甕で口唇端部にハケ状工具で面取りがあり、口縁端部に連続した刻みを有する。47は台付甕の脚部で外面に縦・斜位のハケ目がある。

(3) 中・近世以降の遺物 (第35・36図48～60、図版13、第13～15表)

【陶磁器】(第35図48～54、図版13、第13表)

48・49は磁器、50・51は陶器、52～54は土器である。

48・49は肥前系の染付で、18～19世紀の製品である。

50は堺・明石系の播鉢で19世紀前葉～中葉頃の製品、51は丹波系の播鉢で17世紀後半～18世紀初頭の製品である。

52・53は在地系の焙烙で、52は口縁部が丸みを持って肥厚する形態から18世紀後半以降の製品、53は剥離しているが耳が底部に取り付き、体部が外反して鋭角に立ち上がる形態から17世紀以降の製品であろう。54は七厘の体部片で、外面に型押縦横網目文が施文される。18世紀以降の製品である。

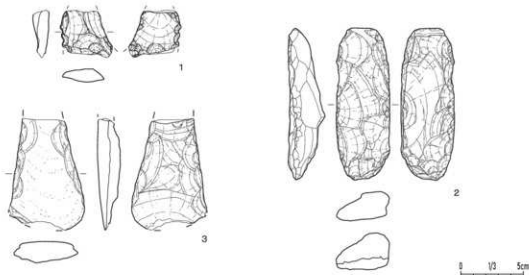
【石製品】(第35・36図55～59、図版13、第14表)

55～58は砥石、59は多面体石製品である。

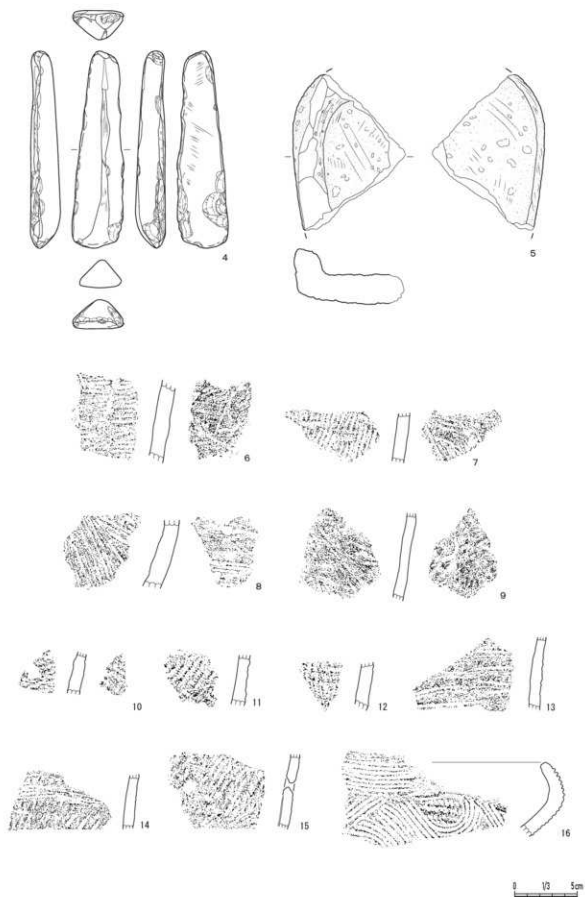
55～57は凝灰岩製で、58は粘板岩製である。59は性格不明の石製品で近世の遺構とした915Dから出土した。形態は粗い球状を呈する多面体で、全体を1～2cm程度の多角形の面で構成する。脆い砂岩質の石材で、各面に浅い擦痕があり、削り出されたものか。

【銭貨】(第36図60、図版13、第15表)

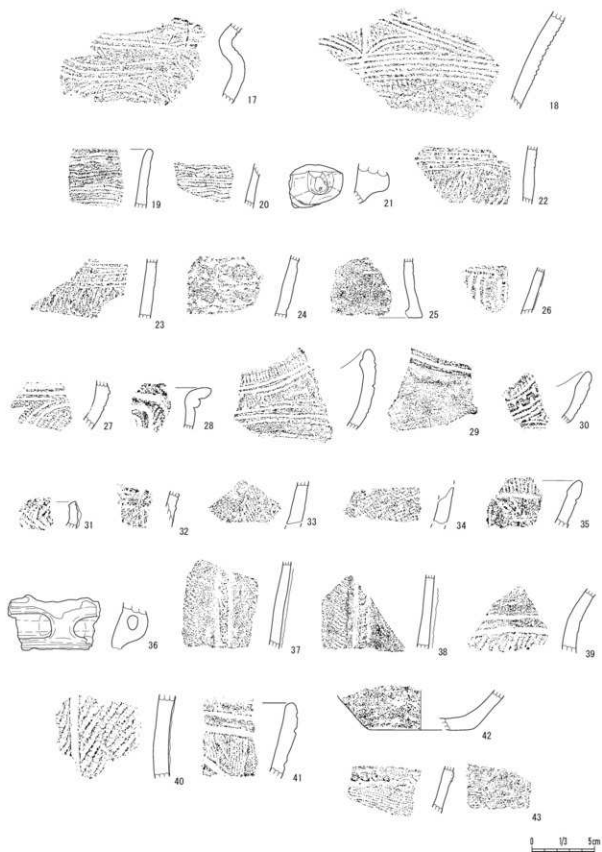
29Hから出土した「祥符通宝」である。初鑄は1009年の北宋銭となる。中世段階に使用されたものであろう。



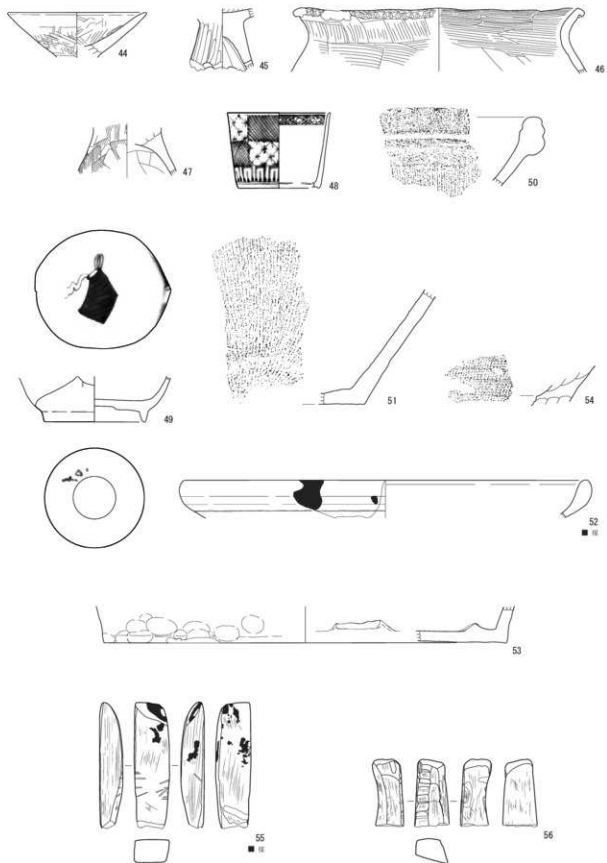
第32図 遺構外出土遺物1 (1/3)



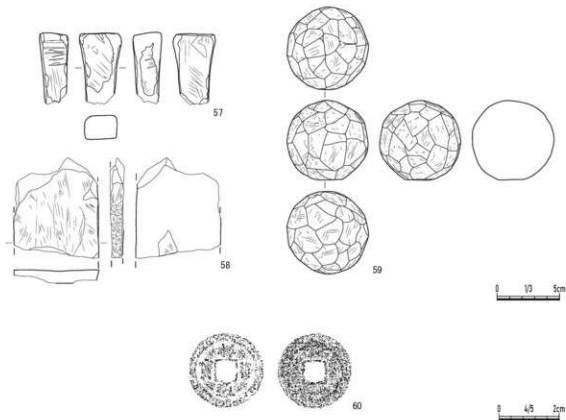
第33図 遺構外出土遺物2 (1/3)



第34図 遺構外出土遺物3 (1/3)



第35図 遺構外出土遺物4 (1/3)



第36図 遺構外出土遺物5 (1/3・4/5)

| 調査番号 図版番号 | 器種 種別 | 遺存部位 | 法量 (cm) | 器形・形態 | 文様・特徴 | 色調 | 胎土 | 時期 型式等 | 出土位置 |
|-------------------|----------|-----------|------------|-------------------|---|----------------------|---------------------------------|-------------------------|------|
| 第33図6 図版12-6 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [6.7] | 器形は外転する | 内外面：斜位の条痕文／内面の条痕文は浅い | 内面：黄褐色／ 外面：明褐色を基調 | チャート・白色粒子を含む | 縄文早期末葉 条痕文系 | 912D |
| 第33図7 図版12-7 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [4.0] | 器形は直線的に外転する | 内面斜位の条痕文／外面縦・斜位の条痕文 | 内面：黄褐色／ 外面：明褐色を基調 | チャート・長石・ 石英・白色粒子・ 繊維を含む | 縄文早期末葉 条痕文系 | 10W |
| 第33図8 図版12-8 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [5.4] | 器形は僅かに内湾する | 内面：ナデ／外面：横位の緩やかな放射条線と直線の条線を多段に施文 | 胎土は褐色を基調 | チャート・白色粒子・ 黒色粒子・繊維を含む | 縄文早期末葉 条痕文系 | 10W |
| 第33図9 図版12-9 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [6.0] | 器形は直線的に外転する | 内外面：斜位の浅い条痕文 | 胎土は褐色を基調 | チャート・白色粒子・ 黒色粒子・繊維を含む | 縄文早期末葉 条痕文系 | 10W |
| 第33図10 図版12-10 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [3.2] | 器形は直線的に外転する | 内面：ナデ／外面：斜位の具散開圧痕文 | 内面：褐色／ 外面：暗褐色を基調 | チャート・白色粒子・ 繊維を含む | 縄文前期初頭 花輪下層式 | 10W |
| 第33図11 図版12-11 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [4.0] | 器形は直線的に外転する | 内面：ナデ／外面：斜位の0段多条結束羽状縄文 | 内面：褐色／ 外面：明褐色を基調 | 長石・白色粒子・ 褐色粒子・繊維を含む | 縄文前期 羽状縄文系 | 10W |
| 第33図12 図版12-12 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [3.8] | 器形は直線的に外転する | 内面：ナデ／外面：斜位の0段多条結束羽状縄文 | 胎土は濃い黄褐色を基調 | 石英・チャート・ 白色粒子・繊維を含む | 縄文前期 羽状縄文系 | 10W |
| 第33図13 図版12-13 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [5.6] | 器形は僅かに外反する | 内面：ナデ／外面：横位の平行沈線をやや均なりに彫く施文 | 内面：褐色／ 外面：暗褐色を基調 | 石英・チャート・ 白色粒子・黒色粒子・ 繊維を含む | 縄文前期 羽状縄文系 | 912D |
| 第33図14 図版12-14 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [4.5] | 器形は直線的に外転する | 内面：ナデ／外面：地文横位卑部L R縄文→半截竹管状工具による横位平行沈線施文 | 胎土は褐色を基調 | 長石・チャート・ 白色粒子・黒色粒子を含む | 縄文前期後葉 漆黒a後半か b前半 | 912D |
| 第33図15 図版12-15 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [6.0] | 内面の観察剥離顕著 | 外面：横位縄文L Rを施文／φ4mmの補修孔あり | 胎土は褐色を基調 | 石英・チャート・ 角閃石・白色粒子を含む | 縄文前期後葉 漆黒a後半か b前半 | 表土 |
| 第33図16 図版12-16 | 縄文 深鉢 | 口縁部 破片 | 高 [3.2] | 器形は強く内湾する 状状二種 | 内面：ナデ／外面：地文横位R L卑部縄文→集合沈線を上部には横位、下部には斜位・羽状に施文 | 胎土は黄褐色を基調 | 長石・石英・チャート・ 白色粒子・黒色粒子を含む | 縄文前期後葉 漆黒b式 | 912D |

第10表 遺構外出土土器一覧(1)

第3章 検出された遺構・遺物

| 調査番号 図版番号 | 遺構 種類 | 遺存部位 | 法量 (m) | 形状・形態 | 文様・特徴 | 色調 | 土質 | 時期 型式 | 出土位置 |
|-------------------|----------|------------|--------------------|-----------------------------------|--|-------------------------|---------------------------|--------------------------|------|
| 第34図17 図版12-17 | 縄文 深鉢 | 口縁部 破片 | 高 [6.3] | 5字状に湾曲する口縁部、口縁部は欠損 | 内面：横位のナデ/外面：上部は横位平行沈線、下部は対向する弧状の平行沈線無文 | 内面：土に近い褐色を基調 | 石英・チャート・緑泥石を含む | 縄文前期後葉 深鉢B式 | 912D |
| 第34図18 図版12-18 | 縄文 深鉢 | 胴～体部 破片 | 高 [5.9] | 器形は僅かに外傾する | 内面：ナデ/外面：横位横位準直L縄文→半載竹貫文工具による平行沈線と器蓋式並行沈線で山文内にも筋貫文を施す | 土質は褐色を基調 | 石英・チャート・白色粘土・黒色粘土を含む | 縄文前期後葉 深鉢B式 | 912D |
| 第34図19 図版12-19 | 縄文 深鉢 | 口縁部 破片 | 高 [5.8] | 器形は僅かに外反する | 内面：ナデ/外面：横位の平行沈線を多段に施文、間に緩やかな弧状沈線も施文 | 内面：黄褐色を基調 | 石英・長石・チャート・白色粘土・白色粘土を含む | 縄文前期後葉 深鉢C式 | 912D |
| 第34図20 図版12-20 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [3.0] | 器形は僅かに外反する | 内面：ナデ/外面：横位の緩やかな弧状沈線と直線の条線を多段に施文 | 内面：黄褐色を基調 | 石英・チャート・白色粘土・黒色粘土を含む | 縄文前期後葉 深鉢C式 | 912D |
| 第34図21 図版12-21 | 縄文 深鉢 | 腹部把手 破片 | 高 [3.2] | 腹部把手の突起部、こぶ状の断面にφ2～3mmの首孔が2ヶ所見られる | 内面：ナデ/外面：突起部下に2条の弧状沈線施文/全体の厚縁部著 | 土質は褐色を基調 | 石英・長石・白色粘土を含む | 縄文前期後葉 深鉢式 | 912D |
| 第34図22 図版12-22 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [4.65] | 器形は僅かに外反する | 内面：ナデ/外面：横位横位準直L/上方に横位平行沈線を粗く施文 | 内面：土に近い褐色/外面：土に近い褐色を基調 | 石英・長石・チャート・白色粘土を含む | 縄文前期後葉 深鉢(器蓋)並行 | 10W |
| 第34図23 図版12-23 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [4.7] | 器形は直線的に外傾する | 横位横位の無筋L縄文/上位に横位の平行沈線 | 内面：土に近い褐色/外面：土に近い黄褐色を基調 | 石英・チャート・褐色粘土・白色粘土を含む | 縄文前期後葉 深鉢(器蓋)並行 | 930D |
| 第34図24 図版12-24 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [4.7] | 器形は直線的に外傾する | 内面：ナデ/外面：横位の半載竹貫文工具による三角文 | 土質は黄褐色を基調 | 石英・チャート・白色粘土を含む | 縄文前期後半 深鉢式後半 | 912D |
| 第34図25 図版12-25 | 縄文 深鉢 | 底部 破片 | 高 [4.8] | 体部下方から底部にかけて強くくびれる | 内面：ナデ/外面：横位の無筋縄文Rに横位沈線を施文 | 内面：灰褐色/外面：土に近い褐色を基調 | 石英・チャート・白色粘土を含む | 縄文前期後葉 深鉢C式 | 912D |
| 第34図26 図版12-26 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [3.7] | 器形は直線的に外傾する | 横位の筋貫文準直線から5本の筋貫文準直線を垂下させる | 土質は明褐色を基調 | 石英・チャート・白色粘土を含む | 縄文前期後半 十二筋貫式 | 横穴 |
| 第34図27 図版12-27 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [3.9] | 器形は内湾する | 内面：ナデ/外面：横位準直L縄文/上位は横位ナデ、下位に横位準直線施文/平行沈線による横・弧線モチーフ、印文を施文 | 内面：土に近い褐色/外面：灰褐色を基調 | 石英・長石・金銅を含む | 縄文中期の頭 五筋貫り台式 | 10W |
| 第34図28 図版12-28 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [3.3] | 口縁部は強く外反 | 外面地紋横位準直L縄文→平行沈線3条を器蓋部下位に「つ」の字状に深く施文 | 土質は土に近い褐色を基調 | 石英・白色粘土を含む | 縄文中期中葉 東国東中鉢式 | 表土 |
| 第34図29 図版12-29 | 縄文 深鉢 | 口縁部 破片 | 高 [6.4] | 内湾する弧状口縁 | 内面：口縁断面に横位平行沈線/外面：上部断面に横位の筋貫文/平行沈線による三角区画内に横位の連続帯体を施文し、中央に三角文、筋に交互の三角筋貫文を配する/下部に横位の角形文 | 土質は黄褐色を基調 | 石英・チャート・白色粘土を含む | 縄文中期の頭 五筋貫り台式 | 912D |
| 第34図30 図版12-30 | 縄文 深鉢 | 口縁部 破片 | 高 [4.0] | 弧状口縁/やや内湾しつつ外傾する | 内面：ナデ/外面：上部断面にやや横位の筋貫文、以下斜位の平行沈線間に交互の三角筋貫文、横位の平行沈線施文 | 土質は褐色を基調 | 石英・チャート・白色粘土を含む | 縄文中期の頭 五筋貫り台式 | 912D |
| 第34図31 図版12-31 | 縄文 深鉢 | 口縁部 破片 | 高 [3.2] | やや内湾する口縁部 | 口縁断面：内面：ナデ/外面：互い違いの斜線を施し、矢羽状を呈す/器蓋の一部厚みを持つ | 土質は褐色を基調 | 長石・チャート・褐色粘土・白色粘土・黒色粘土を含む | 縄文中期の頭 五筋貫り台式 | 10W |
| 第34図32 図版12-32 | 縄文 深鉢 | 口縁部 破片 | 高 [2.7] | 直線的に外傾する口縁部、口縁部欠損 | 内面：ナデ/外面：上方に横位平行沈線、下方に平行沈線による筋貫り文 | 土質は明褐色を基調 | 長石・石英・チャート・白色粘土・黒色粘土を含む | 縄文中期の頭 五筋貫り台式 | 912D |
| 第34図33 図版12-33 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [3.4] | 直線的な体部 | 内面：ナデ/外面：2字状筋貫文を伴う横位L縄文/下部に輪縁帯を施す | 内面：黄褐色/外面：明褐色を基調 | 石英・長石・黒色粘土を含む | 縄文中期の頭 表土 | |
| 第34図34 図版12-34 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [2.6] | 器形は僅かに内湾する | 内面：ナデ/外面：2字状筋貫文を伴う横位L縄文+横位準直L縄文 | 内面：褐色/外面：土に近い褐色を基調 | 石英・長石・白色粘土を含む | 縄文中期の頭 912D | |
| 第34図35 図版12-35 | 縄文 深鉢 | 口縁部 破片 | 高 [3.75] | 内面がわずかに張り出し、口縁部が湾曲する | 口縁上位に横位の条線、下位に平行沈線で区画し、斜位の角形文を施す | 土質は土に近い褐色を基調 | 長石・長石・チャート・金銅を含む | 縄文中期中葉 後葉-加賀利E型半 | 表土 |
| 第34図36 図版12-36 | 縄文 深鉢 | 腹部把手 破片 | 高 [4.3] | 口縁部欠損/幅1.8cmの筋貫文把手 | 内外面ナデのみ | 土質は土に近い褐色を基調 | 長石・長石・チャート・金銅を含む | 縄文中期中葉 後葉 | 表土 |
| 第34図37 図版12-37 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [6.9] | 直線的に外傾する | 横位横位準直L縄文/縦位の緩帯に横位の連続した筋貫文 | 内面：黄褐色/外面：黄褐色を基調 | 石英・チャート・褐色粘土を含む | 縄文中期中葉 後葉筋貫式 | 930D |
| 第34図38 図版12-38 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [5.9] | 直線的に外傾する | 横位横位準直L縄文/縦位の緩帯に横位の連続した筋貫文 | 土質は土に近い褐色を基調 | 石英・赤色粘土・黄褐色粘土を含む | 縄文中期中葉 後葉筋貫式 | 930D |
| 第34図39 図版12-39 | 縄文 深鉢 | 胴～体部 破片 | 高 [5.2] | 頸部は直立し、体部は僅かに外反する | 頸部断面無文/頸部と体部の間に横位の平行沈線/器蓋横位準直L縄文 | 内面：土に近い褐色/外面：褐色を基調 | 石英・チャート・白色粘土・白色粘土を含む | 縄文中期後半 加賀利EⅠ～EⅡ式 | 933D |
| 第34図40 図版12-40 | 縄文 深鉢 | 体部 破片 | 高 [6.7] | やや外反する体部 | 内面：ナデ/外面：横位準直L縄文に平行する沈線を垂下 | 内面：褐色/外面：土に近い褐色を基調 | 長石・チャート・黒色粘土を含む | 縄文中期後半 加賀利EⅡ式 | 912D |
| 第34図41 図版13-41 | 縄文 深鉢 | 口縁部 破片 | 高 [6.0] | やや内湾しつつ外傾する | 口縁上位に横位平行沈線/以下横位準直Lに斜位(弧状の一部)の沈線施文 | 土質は土に近い褐色を基調 | 石英・長石・チャート・褐色粘土を含む | 縄文中期後半 加賀利EⅡ並行 遺構外 | 遺構外 |
| 第34図42 図版13-42 | 縄文 深鉢 | 胴～体部 破片 | 高 [3.1] 径 [8.4] | 底面から体部は直線的に外傾 | 内面：ナデ/外面：無文 | 土質は土に近い褐色を基調 | 石英・長石・チャート・角閃石を含む | 縄文中期 | 912D |

第11表 遺構外出土土器一覽(2)

| 探検番号 図版番号 | 器物 種別 | 遺存部位 | 法量 (cm) | 形状・形態 | 文様・特徴 | 色調 | 胎土 | 時期 型式等 | 出土位置 |
|-----------------------|----------------|-----------|---------------------|--|---|-----------------------------|---------------------|---------------------|------|
| 第 34 図 43 図版 13-43 | 蓋 または 土師 | 口縁部 破片 | 高 [3.7] | 断面は直線的に外縁 する/底は不明 | 内面：横位・斜位の条線文→一部ナデ消 し/外面：地文に斜位の条線文/条線文 は幅約 1.5mm 均等な斜位で面文/上方 に幅約 0.8mm の突帯を付付し、丸棒状工 具により連続した押圧を加える | 内面：土に深い 褐色/外面：褐色 色を基調 | 石灰・白色粒子・ 褐色粒子を含む | 縄文晩期終末 → 弥生初期 | 10W |
| 第 35 図 44 図版 13-44 | 土師 甕 | 坏部 破片 | 口 [10.8] 高 [6.7] | 坏部は直線的に開 き、口縁部は断面 を導く成面 | 内外面：多方向のミガキ・赤彩/外面： 下部の一部にハケ目が見える | 横位を基調 斜位を基調 | 石灰・チャート・ 白色粒子を含む | 弥生後期～ 古墳前期 | 912D |
| 第 35 図 45 図版 13-45 | 土師 高杯 | 脚部 破片 | 高 [4.8] | 断面は直線的に開 く/下部に穿孔 1ヶ所 /坏部内面はわず かに内湾している | 坏部内面：縦位のミガキ/脚柱部内面： 縦位ナデ/外面：縦位ミガキ | 横位を基調 | 石灰・黄色粒子を 含む | 弥生後期～ 古墳前期 | 10W |
| 第 35 図 46 図版 13-46 | 土師 甕 | 体部 破片 | 口 [22.2] 高 [5.2] | 口縁部はわずかに折 り反す/断面は丸み を持って外反する/ 体部は口縁より張り 出す | 口縁部はハケ状工具による面取り/口 縁部部に連続した斜み/内外面横・斜位 ハケ目 | 横位を基調 | 石灰・長石・黄 褐色粒子を含む | 弥生後期～ 古墳前期 | 表土出土 |
| 第 35 図 47 図版 13-47 | 土師 付付盤 | 脚部 破片 | 高 [4.3] | 断面は直線的に外へ 開く | 内面：斜位のナデ/外面：縦・斜位のハ ケ目 | 横位を基調 | 石灰・長石・白色 粒子を含む | 弥生後期～ 古墳前期 | 10W |

第 12 表 遺構外出土土器一覽 (3)

| 探検番号 図版番号 | 遺構名 | 種別 | 器種 | 法量 (cm) | 製作の特徴等 | 胎定産地 | 時期 |
|-----------------------|-----|----|----|-----------------------------|---|-------|---------------------------|
| 第 35 図 48 図版 13-48 | 表土 | 磁器 | 罎口 | 口 [8.2] 高 6.0 底 [6.4] | 外：染付面弁市松文/内：縁四方唐文 | 肥前系 | 近世 (1700～1800年代) |
| 第 35 図 49 図版 13-49 | 高壁 | 磁器 | 鉢鉢 | 高 [3.6] 底 [3.9] | 外：不明/内：見込染付龍文/八角鉢/蛇の目型高台/裏底に焼痕 | 肥前系 | 近世 (1800～1860年代) |
| 第 35 図 50 図版 13-50 | 表土 | 陶器 | 椀鉢 | 高 [5.4] | 縁目 11 条一筋/口縁部 3 段/底無彩/色調は内面に深い褐色、外面明 褐色 | 堺・明石系 | 近世 (1820～1860年代) |
| 第 35 図 51 図版 13-51 | 表土 | 陶器 | 椀鉢 | 高 [9.1] 底 [12.0] | 縁目 6 条一筋/色調は内面に深い褐色、外面明 褐色 | 丹波系 | 近世 (17c 後半～ 18c 初期) |
| 第 35 図 52 図版 13-52 | 表土 | 土器 | 焙焼 | 口 [32.0] 高 [3.0] | 口縁部は丸みを帯び、肥厚する/口縁部内外面ナデ。水引き/口縁部外 面柳付着/胴～底は薄く、内面ナデ。水引き。外面は軽くざらつた/ 色調は内面褐色、底面に深い赤褐色/胎土に雲母・砂粒を含む | 在地系 | 近世 (18c 以降) |
| 第 35 図 53 図版 13-53 | 表土 | 土器 | 焙焼 | 高 [2.9] 底 [32.0] | 体部は中々外反/内面に耳の付け跡が見える/外面に連続する筋面/体 部下位～底面は丸み/色調は内面灰黄褐色、底面に深い黄褐色/胎土に 石灰・角閃石・褐色粒子・赤色粒子を含む | 在地系 | 近世 (17c 以降) |
| 第 35 図 54 図版 13-54 | 表土 | 土器 | 七厘 | 高 [3.2] | 外：型押縦横網目文/色調は褐色 | 在地系 | 近世 (18c 以降) |

第 13 表 遺構外出土陶磁器・土器一覽

| 探検番号 図版番号 | 器種 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 特徴 | 出土位置 |
|-----------------------|---------|---------|------------|-----------|------------|-----------|---|------------------|
| 第 32 図 1 図版 11-1-1 | 2 次加工割片 | チャート | 4.5 | 3.8 | 1.0 | 18.3 | 上下端部欠損/割型の割片を利用/左右両側に表面から粗い調整跡 が施される/裏面下端部にも欠損後に調整が加えられる/縄文時代 | 912D |
| 第 32 図 2 図版 11-1-2 | 打製石斧 | ホルンフェルス | 12.0 | 4.2 | 2.3 | 146.9 | 表面に自然面を残す横長割片を使用/裏面および横方向から粗い調整跡 を施し、前後・左右に細かな調整を施す/縄文時代 | 確認調査 5fr |
| 第 32 図 3 図版 11-1-3 | 打製石斧 | ホルンフェルス | 8.9 | 6.0 | 1.8 | 104.6 | 表面に自然面を大きく残す/左右両側に粗い調整跡/基部・欠損方 先端・縄文時代 | 903D |
| 第 33 図 4 図版 11-1-4 | 打製石斧片 | ホルンフェルス | 15.6 | 4.1 | 2.4 | 175.2 | 平面形は横丸 2 等辺三角形/断面は正三角形に近い/全面から粗い調整 を施し、裏面と左右両側に調整が見られる/左右両端から裏面にかけて 連続する縦筋/左右上端部は所々調整するも、全体 | 表土 |
| 第 33 図 5 図版 11-1-5 | 石皿 | 多孔質火山岩 | [12.3] | [8.9] | 3.9 | 261.4 | 左側縁の一部のみ残存/縁はほぼ垂直で、全体に丁寧な作り/特に内縁 上底面に調整が顕著 | 10W |
| 第 35 図 55 図版 13-55 | 砥石 | 凝灰岩 | [10.0] | 2.8 | 1.8 | 81.6 | 扁平なカマボコ型/下部欠損/裏面に縦筋/表面中に横位の条面が 見られる/左右両側は製品切り出し時の多状工具が見える | 表土 |
| 第 35 図 56 図版 13-56 | 砥石 | 凝灰岩 | [5.3] | 2.6 | 2.5 | 43.6 | 下部欠損。現状の平面形は有形を呈する/使用面は正・裏面、左・右側 縁/前面に細かな縦状調整が見られる/正面に幅 1cm の砥面を 0.5mm づ つへ移動させた跡が見える | 10W |
| 第 36 図 57 図版 13-57 | 砥石 | 凝灰岩 | [5.6] | 3.4 | 1.9 | 55.1 | ハチ状で下部を欠損/使用面は正・裏面、左・右側面、正面と右側面 に V 字状の溝。縁は細かな縦状調整が見られる | 10W |
| 第 36 図 58 図版 13-58 | 砥石 | 粘板岩 | [7.0] | [6.7] | 1.2 | 67.1 | 表面は中央部分がわずかに凹み、縦筋、斜位の調整が見られる。裏面は 大部分欠損。右側面には縦位方向で幅 5mm 程の砥面の切り合いが観察さ れる | 表土 |
| 第 36 図 59 図版 13-59 | 多面体石製品 | 砂岩 | 6.3 | 6.4 | 6.6 | 295.5 | 三角形/球体を見し、全面に 1～2cm 四方の面が作られており、各面 に深い溝が観察される。 | 915D 北壁 第 4 層 |

第 14 表 遺構外出土石製品一覽

| 探検番号 図版番号 | 器種 | 材質 | 外径 (mm) | 口径 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 特徴 | 出土位置 |
|-----------------------|----|----|------------|------------|------------|-----------|----------------|------|
| 第 36 図 60 図版 13-60 | 銭貨 | 銅 | 2.4 | 7.0 | 0.2 | 3.0 | 拜師遺文/初建 1009 年 | 29H |

第 15 表 遺構外出土銭貨一覽

第4章 調査のまとめ

今回の調査では、古墳時代と中世以降の遺構を検出し、遺物は縄文時代から近代に至るまでのものが出土した。調査地点には掘乱が点在し深度の浅い遺構については必ずしも良好な遺存状態ではなかったが、一定の深度のある遺構については成果を上げることができ、西原大塚遺跡に新たな資料を加えることができた。以下、注目される遺物と遺構の検出された時代についてまとめておきたい。

第1節 縄文時代晩期最終末～弥生時代初頭について

10号井戸跡の覆土から縄文時代晩期最終末～弥生時代初頭の条痕文壺または甕の破片1点が出土した。詳細は本文と写真を参照いただきたいが、当該期の資料については市内はもちろん柳瀬川流域でも報告例としては管見の限りなく、県内に広げても県北部の美里町、神川町、深谷市、熊谷市などで散見される程度で県西南部では初めての報告となるか。一転して、南武蔵にあたる都下に目を向けると、あきる野市二宮神社遺跡、日野市平山遺跡などで水神平系の土器が出土しており、北武蔵よりむしろ東京の多摩地区との関係を考える必要があるのかもしれない(註1)。この期の土器組成としては通例浮線文系土器が伴うことが注目されており、遺構としては再葬墓が予想される。今後市内の未だ調査が及んでいない地点などでこの期の遺構遺物が検出される可能性があることを指摘しておきたい。

第2節 古墳時代前期後半～中期初頭について

古墳時代前期後半から中期初頭とした29号住居跡出土の高坏脚について考察する。志木市においては第1章で述べたように、古墳時代前期は集落が減少傾向にあり、総体的に遺物の出土量も少ない。長脚の高坏も同様で、おおよそ該期の脚部が残存する高坏は西原大塚遺跡第5Ⅱ・Ⅲ・72地点365号住居跡と中道遺跡第37地点19号住居跡のものが挙げられる。

西原大塚遺跡第5Ⅱ・Ⅲ・72地点 365号住居出土 高坏

高脚の高坏形土器。脚部は細身の柱状を呈し、脚根部は直線的に開く。脚部外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。脚部と内面は粗いヘラケズリ。裾部内面は横方向にヘラナデされるが、ハケ目痕を残す(志木市遺跡調査会 2009)。宮川幸佳氏は「伊勢型二重口縁壺」「上野型S字甕」と共存することなどから、実年代4世紀末～5世紀初めに位置付けられるとしている(宮川 2003・2004)。

中道遺跡第37地点 19号住居跡出土 高坏

17点もの高坏のうち、脚部が残存するのは7点である。坏部の形状を4種に分類し、調整技法については「坏部の口縁部で回転ナデ的なナデ調整が目立ち、内底面のみヘラ磨きするものが多く、ヘラ磨き技法が主流であるとは言えない。」と報告されている。7点の脚部全てにヘラ磨き調整が施されているが、実見したところヘラの幅が29号住居跡のものより若干広く、やや粗い磨き調整であった。柱状

部の高さは29号住居跡とほぼ同じであるが、柱状部と裾部の切替部の径が全て2～3cmほど大きい。

まとめでは『比田井編年（南武蔵地域参照）』に対比させて考えると、高環形土器は「Ⅰ段階に比べて、脚柱がハの字に開き、高さも低くなる」などまさにⅡ段階の特徴を備えている。しかし、これに調整技法を加味してみると、裏形土器を除き、Ⅱ段階に顕著なミガキが主体ではないことからⅡ段階よりも後出的であるものと考えざるを得ないであろう。（中略）本資料を現段階では5世紀中葉の所産のものと考えたい。」としている（佐々木・尾形 1997）。

振り返り29号住居跡の高環脚に目を向けると、坏部は欠失し、脚部のみである。脚部はやや膨らみをもつ柱状で、全体の1/3ほど下部で屈曲し裾部へ直線的に移行する器形である。調整は外面が縦位のミガキ、裾部に斜位のミガキが施され、一部にハケ目を残す。ミガキは幅1・2mmで、柱状部の上半が密に、下半がやや粗く施され、比較的丁寧で全体的に艶がある。脚が明確に柱状で、古墳時代中期以降のハの字型に移行する前段である点、磨きが主体的な調整技法であることから西原大塚遺跡365号住居跡と中道遺跡19号住居跡出土の高環の中間的要素を満たすものと考えられよう。共存遺物がないので総合的な判断はできかねるが、29号住居跡の高環を5世紀前葉ととらえたい。

第3節 中世以降について

(1) いわゆる「地下式坑」について

第234地点の調査では、形態としていわゆる「地下式坑」（房総中近世考古学研究会・東国中世考古学研究会 2007）が912・913・930号土坑の3基検出され、その内の912号土坑では地下式坑としては市内2例目となる人骨を検出した。その他に、可能性があるものとして935・936号土坑が10号井戸跡に切られ未完掘ながら2基ともオーバーハングする形状が覗えるため、1基+αの地下式坑となる可能性が推定された。また、935号土坑は同じく未完掘ながら調査区南壁セクションによれば表土下から掘り込みが確認でき、層位的に江戸時代以降の室の可能性が高いと推定できる。よって以下、出土遺物と構築面の使用時期から概ね15世紀中葉を含む後半から17世紀前半を中心に機能した可能性が高い912・913・930号土坑を地下式坑として扱い、構築面と出土遺物そして隣接調査地点も含めた配列についてまとめておく。

基本構造は、3基とも単室であった。主体部平面は912号が方形、913号は中央付近がややくびれて南奥が僅かに広がる略台形、930号土坑は隅丸方形となる。

竪坑は、912号土坑が完掘状態で長軸方向に対し横長方形に見えるが、土層断面（第10図）で確認すると、竪坑入り口はより南側へ大きく拡がった不整形のものであった可能性が高い。930号土坑は隅丸台形。913号は、天井の遺存状況と北奥壁の断面が北東にオーバーハングすることを重視し南側からのアプローチとすれば横長方形となる。930号土坑の竪坑は主体部と65cm高い段を有し60°の下り斜面で接続されていた。竪坑のステップ面となる段では硬化面が確認されている。912号土坑は竪坑部で確認面から一度2.0m下がり、主体部に向かって50cm上がって平坦面を形成し一段ステップを設けて主体部へ下って至る。この一度下がった面は本来竪坑の掘り方となり、調査段階では十分に把握されなかったが部分的に硬化した層が認められたため、この部分に一段上がった平坦面と同一面が形成されていた可

能性が指摘される。位置的には、上述した竪坑上層の南側に広がる落込み部分と整合するだろう。千葉県などに竪坑と主体部の間に仕切りの状の段を有する類例があるが（房総中近世考古学研究会・東国中世考古学研究会前掲書）、形状も異なりここでは調査時の所見を加味して確認面から1.5m下がって1.1m×1.0mの大きな平坦面を介しスロープ状の下り傾斜を経て主体部へ至る構造と把握する。方位及び竪坑の位置は、912・913号土坑が長軸N-23°~27°-Eでほぼ同じ方向を指向するが、竪坑部は北東側と南西側の反対となる可能性がある。930号土坑はN-39°-Wで竪坑は南東につく。これらの点から、この3基の構造は諸点において異なる。

出土遺物は、912号土坑が第15図1の古瀬戸後期IV段階古〜新（藤澤 2008）の完形播鉢で正位ながらやや東に傾いて主体部底面より60cm浮いて出土し、4はほぼ同一面で、2はそれらより30cm高いレベルで出土した。6は竪坑と主体部が接続する中間付近の上層で出土した18世紀後半〜19世紀にかけての製品である。1・4と同一レベルの南西壁際では、頭骨やその他の部位を含む未成人女性の1号人骨と成人女性の2号人骨（付編Ⅱ）が混在して検出された。また東隅方向に1.5m離れてタヌキの頭骨（付編Ⅲ）が確認されている。この遺構の時期は厳密には主体部底面から浮いて遺物と人骨が出土していて一定の経過年代を見る必要があるが、この時代の播鉢に高い耐久性があったとは考えられず、基本消費物資であることから、生産年代である15世紀中葉を含む後半の枠に収まるものと推定しておきたい。913号土坑は出土遺物がなく中世以降の遺構とした。930号は出土遺物の古瀬戸後期IV新の播鉢と在地系16世紀中葉〜17世紀前半の焙烙から、15世紀後半〜17世紀前半頃に機能したものと思われる。なお、912号土坑の出土人骨（1号人骨）の自然科学分析の同位体分析（付編Ⅰ）では14世紀前半〜15世紀前半の値を得ており、考古学的知見と概ね一致する結果であった。また、付編Ⅱでは2号人骨のまとまりから離れた上層出土の人骨（図版15-1~7）が2号人骨（図版15-8）の欠損部に当たっていることから同一人の骨に当たる可能性が示唆された。発掘調査の所見としては、主体部の土層が把握できず、双方の骨が同一層に属するかは不明であった。

隣接地を含めた配列については、224地点（尾形・大久保・成島・西川 2020）で878・879・880号土坑の3基の地下式坑が検出されている。ここでは、その検出位置を確認する。224地点では検出された最上段面の北端を限り南西方向を要とする弧状に878〜880号土坑の竪坑が検出され、両地点の境界未調査区域は除くと、234地点では一転して竪坑のみの位置で言えば南北方向から23°〜27°東へ振れて直線的に検出される。対照的なのは最上段面の北側がピットと土坑によって構成されるといい（尾形ほか前掲書）、224地点段切状遺構最上段面から南の234地点にかけては弧状から直線的に地下式坑が検出され、その中に土坑、ピットが散在して構成されることが解る。現段階では不明な点も多いが、地下式坑の開削、配置について最上段面の造成と西側の崖線に制約を受けながらも土地利用に関してもならぬ法則が推測されようか。

（2）西原大塚遺跡912号土坑を考える

地下式坑の用途説については、現在までのところ、大きく分けて三つの説がある。

それが「倉庫説」、「葬施設説」、その折衷説の「多機能説」である。「倉庫説」については、わざわざ雨水が流れ込んで溜まるような窪地（段切）にして、なぜそこに地下室の倉庫をつくるのか理解できない。「葬施設説」については、地下式坑を骨化のための改葬施設とする考えが主流のようであるが、その場合でも城や屋敷に多いことの説明が難しく、なにより骨化のためにあだだけの規模の土木工事が

必要なか理解に苦しむ。「多機能説」では、異なる機能の施設の消長がなぜ同時なのか説明できないと思える。このような研究状況の中で、橋口定志氏から提起される修験道との関係を指摘する説は注目すべきである(註2)。

ここでは、今回発掘された人骨を伴う西原大塚遺跡第234地点の地下式坑が、地下式坑全体の中でどう位置づけられるかを検討し、その本質的な性格論に少しでも寄与できればと考えている。

そこで、関東地方の地下式坑で個体が確認できる人骨を検出している事例を12件あげてみた。まずはその概要をみてみたい。なお、説明のための用語は葬送の用語を一部準用する。

事例1 志木市西原大塚遺跡第234地点912D 本文参照

事例2 板橋区五段田Ⅱ遺跡T3号

この地下式坑では、成人女性1体、若い男性1体、少年男性1体の人骨が、竪坑から地下室に向けて堆積した断面三角状の1次堆積の上で検出された。一番奥の傾斜の緩い面で見つかった女性の骨は分離が少なく南枕西向の伸展葬に近い状態で見ついている。竪坑の傾斜の強い方の男性の骨2体は状態が悪く分離・欠損していた。死体は骨化し分離してからロームブロックが多く含まれる土で埋められている。その後、地下室天井の竪坑側が落ち、庇状に残った奥の天井の下に皆朱漆器が置かれた。

注目点として、人骨群の一番奥の地下室の床面となる位置で正位の播鉢(半分)が置かれていた。なお播鉢に接合する破片が段切東部と3号溝から出土している。また地下室北西寄りの土坑内より紹聖元寶1枚が出土している。

古瀬戸播鉢の年代は15世紀中頃である。

事例3 調布市下布田遺跡第75地点5X07

壮年前半の女性2体、壮年半ばの女性1体、成人女性1体、壮年前半の男性1体の計5体の人骨が竪坑と地下式坑の比較的薄い1次堆積土の上で検出された。人骨は竪坑から地下室にかけて流れ込んだ大礫・砂利層・ヘドロ層に混ざって分離した状態で見ついている。一番奥の地下室の壮年前半女性は東枕北向の側臥屈葬の状態と比較的まっすぐに寝ていたが、竪坑側の4体の人骨の状態は悪く、その一部と思われる人骨片が地下室奥壁まで礫とともに流れている。竪坑は確認面から底面まで多数の礫と砂利で埋められていたが、地下室は天井から約1.3mの空洞ができていた。

つまり、竪坑から地下室前面までに5体の死体が1次堆積土の上に置かれた。その後骨化が進む中で雨水とヘドロの流入があり竪坑側の骨化した人骨が分離し、その一部が礫とともに奥壁まで流されたと考えられる。最後に礫や砂利混じりの土が一気に入れられ竪坑は完全に埋まったようである。

注目されるのは人骨群の中ほどで、正位の状態 で置かれた播鉢の中から壮年前半の女性頭蓋骨が出土したことである(第40図 図v)。また播鉢に入った頭蓋顔面の下に完形のかかわりが置かれていた。

播鉢の年代は大塚2期後半の16世紀中葉である。

事例4 川口市八本木遺跡3号地下式坑

壮年女性1体の人骨が、地下室奥壁に寄って床面から約80~90cm堆積した土の上で北枕東向の膝を強く曲げた側臥屈葬の状態 で検出された。土層図から判断すると、地下室床上の土は地下室天井が落ちた土と思われる。人骨の下には炭化物が厚く敷かれていたがその場所の土は焼けていない。また死体が置かれた面はよく踏み固められていた。頭骨は土圧でやや圧平しているが部位の散乱はなく状態はよい。ただし体幹骨及び上下肢骨の骨端線はすべてなかった。

注意されるのは、落ちなかった天井部が地下室が埋まり切るまで庇状に残っていた点である。この死体は、地下式坑の天井が奥壁部分を残して落ちた後、庇状の天井の下に炭化物を敷き置かれたのである。その後、死体が骨化し一部の骨が欠失するのに必要な時間を経て地下式坑は一気に埋められたと考えられる。

なお、時期が判断できる遺物は共伴していない。

事例5 平塚市今宮遺跡3号地下式坑

死体は竪坑と地下室（北坑）をつなぐ連結部で、西枕南向で背を曲げ膝を抱え込むような側臥屈葬の状態で検出された。人骨の年齢性別は確認されていない。3号地下式坑は竪坑を共有して北と西に地下室を持つタイプで、さらに東に隣接する2号地下式坑の地下室と3号地下式坑の北坑が地下室の壁を抜いてつながる構造となっている。3つの地下室は連結部のレベルまで人為的に埋められており、3号地下式坑の北・西の地下室は連結部が封鎖石で塞がれた状態で検出された。報告を踏まえると、この3つの地下室はほぼ同時に地下室が埋められ、3号地下式坑の北坑との連結部に死体が置かれ、その北坑と西坑の連結部を石組で封鎖し、最後に竪坑を完全に埋めたと考えられる。

注目すべきは、北坑と西坑の封鎖石の中に石臼片が混ざっており、2ヶ所の封鎖石の石臼片を接合するとほぼ上下1セットの石臼に復元できたことである。

なお、時期が判断できる遺物は共伴しない。

事例6 板橋区志村坂上遺跡F地点SY-6

地下室奥壁にほぼ接し壮年女性と推定される人骨が1体検出された。人骨の残りはあまりよくなく実測図からは西枕南向の側臥屈葬と見える。竪坑と地下室竪坑よりロームブロックを主とした三角堆積がある。人骨はその上の暗褐色土中から土の堆積の傾斜に沿って検出された。その上には天井まで厚くロームブロックを主として土が堆積するが人為的な埋め戻しと考えられる。竪坑部上層は近世の遺物を含むことから、その時期まで竪坑部は窪地であった。地下室床面奥の土坑上層から皇宋通宝が1枚出土している。

注目されるのは、竪坑と地下室の連結部に、正位で表を上にし斜めに寝かせた状態で置かれた応永15（1408）年の完形板碑である。

時期が判断できる遺物は共伴しないが遺跡の中世陶磁器の下限は16世紀前半である。

事例7 上野忍岡遺跡群国立国会図書館支部上野図書館地点第48号遺構

竪坑から地下室にかけて流れ込む1次堆積土の上に崩落した天井のり、その上面の地下室北東隅に北枕で膝を右に折り上体を仰向けにした壮年半ばの女性1体の人骨が検出された。

なお、この人骨は鑑定の結果、骨梅毒の罹患の可能性が高いとされる。

人骨の検出レベルには10cm程度の黒褐色土の堆積があることから、骨化する程度の時間をおいてから、ロームブロックを多く含む土で地下室は埋められたようである。また人骨から約80cm上方の埋土上面で永楽通宝ほか渡来銭が5枚見つかっている。

時期は覆土中の瀬戸・美濃播鉢や永楽銭を含む古銭から近世初頭に入る可能性もある。

事例8 千葉市生実城跡2C-4号

地下式坑のほぼ床面から、頭に刀傷を受け惨殺された高い身分と推定される老女2体の人骨が検出された。姿勢と位置は西枕の仰向けで顔を北に向けた伸展葬の女性が奥壁に、北枕で膝を西に折り上体は仰向けで顔を東に向けた女性が西の壁際に置かれた。

報告書土層図には床面に20cm余りの平らな堆積土があり、その上に竪坑方向からの流入土が示されている。さらにその上に貝層があるが、天井の状況等については不明である。

床面から石臼の破片の出土がある。

事例9 板橋区志村坂上遺跡F地点SY-1

地下室のほぼ中央床面で壮年女性と推定される2体の人骨が検出されている。二人は頭位逆（東枕南向と西枕北向）の側臥屈葬に近い状態で顔を向い合せ寝かされていた。竪坑から地下室奥壁に達するようにロームブロックを多く含む土が流れ込み人骨は埋まっている。その土層の上の流れ込むような堆積土は自然堆積と判断されているが、人為的な埋戻しも考慮されようか。竪坑上層には近世陶磁器を含む遺物が大量に捨てられていた。

注目されるのは、被葬者が埋められていた土山の上に、竪坑方向から投げ入れられたかのように111枚の古銭が、数枚ずつ28組、壺着した状態で出土したことである。

共存する遺物はないが、遺跡の中世陶磁器の下限は16世紀初頭である。

事例10 板橋区志村坂上遺跡F地点SY-10

地下室中央の床面に南枕北向の側臥屈葬の壮年女性と推定される1体の人骨が検出されている。

人骨は竪坑からの流入土で埋まり、その流入土は竪坑と地下室の狭い連結部を封鎖したようである。結果的に地下室上部は空洞が保たれたまま竪坑部に16世紀代の土器陶磁器片等が投棄された。その後竪坑側の天井が落ちて空洞であった地下室上部が埋り、わずかに竪坑上部が窪みとして残ったと思われる。やはりその窪みに江戸時代にゴミが投棄されている。

注目されるのは、死体が置かれた床面の竪坑寄り得意的に打ち砕かれた風炉ないし火鉢片が出ていることである。

床面出土の土師質土器の年代は不明だが、遺跡の中世陶磁器の下限は16世紀初頭である。

事例11 袖ヶ浦市荒久遺跡SK-158

壁寄りの床面から人骨片・歯がまとまって検出されている。状態がよくないので詳細は不明だが床面直置き死体と判断できる。地下室に死体が置かれた後、竪坑から土の流入があり、その後に天井が崩落している。

注目されるのは、地下室南西隅の床面に底部に小さな穿孔がある完形の古瀬戸鉄軸香炉（15世紀前葉）が置かれていたことである。

事例12 袖ヶ浦市荒久遺跡SK-237

地下式坑のほぼ中央床面で人骨片・歯が検出された。やはり状態がよくないので詳細は不明。人骨の上の土は床面から約50cmまで水平に堆積していることから、均しながら埋められた土と判断される。その上の土は竪坑から流れ込んでいるが自然堆積か人為堆積かは報告からは判断できない。

注目されるのは、地下室南東部隅の床面から15世紀後半頃の古瀬戸の卸目録軸皿8枚（15世紀後半）が正位で重ねた状態で置かれ、その脇に立てかけたように白磁皿が出土していることである。いずれも完形でその不自然な状態から有機質の物で包まれていた可能性が考えられる。

以上が、西原大塚遺跡第234地点の地下式坑のように地下式坑内に死体が入れられたと考えられる事例12例の概要である。

これらの事例からどのようなことがいえるか、事例の内容を分析し、その上で中世後期の社会的文化

的背景を考慮しながら、その存在の意味を探ってみたい。

1 人骨を伴う地下式坑の特徴

a. これらは葬送か

検出された人骨は、事例7を除き北枕西向の側臥屈葬にされていない。六道銭や完形のかわらけの副葬もほぼない。この埋葬姿勢・副葬品から、通常の土葬墓の葬法は受けていないと言えそうである。

では、地下式坑までの死体の移動は、何の規則性もない場当たりの行為なのかというと、そうとも言い切れないところがある。

例えば埋めているかという点である。確かにこの点は堆積土の評価の難しさもあるところだが、報告書を見る限り、死体が放置されたままであったケースは少ないようである。死体が隠れる程度に土が掛けられるか、ほぼ完全に埋められるか、どちらかのケースが多い。なお、斜めに堆積した1次堆積土の上に死体が置かれた場合、完全に埋められていないと骨化した遺体は雨水や土の流れで遺体の形を留めずバラバラなる。ただし骨がバラバラになったり欠失する要因としては、犬やカラスに動かされたり持ち出されたことも考えられる。

ここが重要と考えるが、骨化後、どの地下式坑も少なくとも地下室に入ることができない程度まで埋められている状況が看取できる。つまり埋めて地下室を塞いでいると言えるよう。

b. 年齢・性別

被葬者は壮年の女性の割合が高い。逆に壮年以上の男性はいない。被葬者の数は1基あたり1体から5体まで幅がある。性別不明の3件を除き、9件中女性のみが6件で、男性が含まれるのは3人以上の場合に限られる。全体では女性15人、男性3人である。

c. 身体的特徴

骨化から500年前後経過している事例群のため、骨の状態は悪く、得ることのできる情報にも限界がある。その中で事例7の壮年半ばの女性骨に骨梅毒罹患の可能性が指摘されているのは注目される。

d. 置かれたときの地下室の状況

多くは天井が残った状態で死体を地下式坑に入れる。天井が崩落した後の地下式坑に死体を置く場合でも壁際に庇状に天井が残っているところを選んで置くことが多い。

e. 伴う遺物

確実に伴うといえる遺物は、人骨を伴わない地下式坑に比べると比率は高い。ただし、特に決まった遺物はない。その中で本遺跡でも出土した瀬戸焼播鉢が3例あるのは注目できる（事例1～3）。石臼は破片で床面出土（事例8）、地下室を封鎖した石組みの中から出土（事例5）が1例ずつある。その他、地下室床面に、卸皿と白磁皿の9枚セット（事例12）、粉砕した風炉なし火鉢（事例10）、底部穿孔の鉄軸香炉（事例11）を置いた例、死体に向けて板碑を正位で置いた例（事例6）が1例ずつある。事例9のように人骨の検出面ではないが、死体を埋めた土山の上に銭を大量に撒く行為は被葬者に対する行為とれるかもしれない。但し、似た行為が、人骨が検出されない地下式坑の天井が落ちた窪みで行われているので注意が必要である。事例2の天井崩落後の窪地に置かれた皆朱漆器についても断定しがたい。

以上、5つの点で、人骨が見つかる地下式坑では、被葬者は少なくとも一般的な土葬墓のような取り扱いを受けていないこと、女性の割合が高いこと、骨の病変がみられる個体があること、死体は天井が残る地下式坑に入れられる傾向があるが、落ちている場合でも庇状に残った場所に置かれること、共伴

遺物には一見傾向がないように見えるが、播鉢、石臼がやや目につくこと、等が解った。

やはり一般的な墓とは思えないが、死体その他の扱いに規則性が見いだせる。

では、再葬のための骨化施設なのかということそれは疑問である（註3）。なぜならば、骨化しているにもかかわらず、出入り口を完全に塞いでしまっているからである。

そうすると、地下式坑に入れられた死体とは何者なのか。

2 モノから死体の性格を考える

そこで注目したいのが、西原大塚遺跡（事例1）をはじめ、五段田Ⅱ遺跡（事例2）、下布田75地点（事例3）で見つかっている播鉢と上野忍岡遺跡群で確認された病変骨を持つ女性人骨（事例7）である。

結論から先に言えば、播鉢は、通常とは異なる死に方—例えば疾病、産死、戦死、事故等—をした女性の忌むべき霊、つまり邪を封印するために置かれた、いわゆる呪物と考える。

なぜ、そう言えるのか。まず、播鉢の意味から考えてみたい。

一般的に播鉢のすり目は調理に必要な食材をすり潰すために付いているものと考えられている。それは物理的な機能で間違いないが、前近代においてすり目は呪術的な機能も有していた可能性がある。

瀬戸焼にすり目が最初に登場する器種は、格子状のすり目を持つ鎌倉時代初期の卸皿である（第39図 ⅰ）（註4）。この卸皿は大消費地の鎌倉での出土品を見ると、ほとんど卸目が使われた痕跡がないという。この格子状の卸目は14世紀後半の在地産のこね鉢の内側にも見られる（第39図 ⅱ）。瀬戸焼でも室町中期になると大皿の内面の片口の下につくようになる（第39図 ⅲ）。それは卸すことを目的したものとは考えられず、片口の下につくことに意味があったといえる。その意味とは片口を通る食材のケガレを祓うという機能ではないか。そして地下式坑に入れられた瀬戸焼の播鉢はこの時期に出現する。また地下式坑が機能した時期には、在地産の中に格子状の卸目と蓮華文の播目を施した播鉢も見られる（第39図 ⅳ）。蓮華文は回転し聖なるモノを生むとされる「蓮華」の世界で、回転は播鉢に通じているのではないかと（註5）。このように、卸目、播目は、決して食材を卸す・播るという機能だけに付けられたものではなく、食材のケガレを祓う呪術的な機能を有していたと考えられる。

卸目が邪を祓うという機能を有する意味論的根拠は何か。

それは格子目状の卸目の原型が密教や修験道でよく知られる邪を祓う時に使う「九字」にあると考えられるからである（註6）。つまり、初めて格子状の卸目を器に刻んだ頃に期待された機能は、器の中の食べ物をケガレから守ることであった。それが時がたつにつれ、物理的な卸す・播るという機能を獲得し、むしろそれが中心の機能となったのではないかと考える。

では、地下式坑の時代に播鉢に呪術的な性格を付与して使用している事例があるのか。

関根達人氏によれば、15世紀から16世紀の津軽海峡を挟んだ地域では、珠洲焼の播鉢を頭部に被せるという特殊な埋葬方法が行われていたという。そのような埋葬法が、鉄鍋が持つと信じられた祓い清める呪力と呼応し、異状な死に遭遇した人物に対し鉄鍋を被せる「鍋被り葬」（第39図 ⅳ）へと繋がったのではないかと関根氏は考えている。その「鍋被り葬」には18世紀の事例ではあるが播鉢を被せた例も知られる。また同様に近世ではあるが、「鍋被り葬」の文化圏に入るアイヌ社会では、墓に正位で鉄鍋を副葬する事例が知られ、それは女性の墓に限られるという（関根 2003）。

津軽海峡周辺で死者を埋葬する際、珠洲焼の播鉢を頭部に被せるという特異な葬送が行われていた頃、関東では、地下式坑に葬られた女性の死体のそばに播鉢が置かれた。

そうすると、女性の頭骨が播鉢に入った下布田遺跡第75地点の事例3は、16世紀中頃という時期を

考えると、播鉢を被せる「鍋被り葬」に近い意識が働いていたみることもできる。また、完形のかわりけを伴う点も他の事例と異なる。

さらに事例7は、埋葬姿勢が仰向けではあるが北頭位で膝を西に向けていることから北枕西向の可能性がある。人骨を完全に埋めた後、その上に六道銭を意識させる永楽銭を含む5枚の銭を置いており、近世の「鍋被り葬」に共通する要素がみられる。地下式坑は、すでに天井が落ちているので中世末の時期としても、埋葬自体は近世初頭に入る可能性がある。

つまり、事例3と事例7は、地下式坑へ異常死の死体を入れる段階の葬法から「鍋被り葬」段階への移行期の事例と評価できようかもしれない。

さて、播鉢のように播る機能を持つ道具に石臼がある。死体を置いた地下室側を封鎖する石の一部に割った石臼を使ったのが、平塚市今宮遺跡の地下式坑(事例5)である。また生実城跡(事例8)の自分の高い女性2体を葬った地下式坑には、床面に石臼の破片が置かれていた。これらの例も、播鉢と同じように邪を帯びた死体の忌むべき死霊を祓い、さらに封じ込め、結界を設けるために置かれたのではないか(註6)。

志村坂上F地点SY-6(事例6)の竪坑と地下室の境に置かれた板碑も、年代的には地下室の中の死体のもとは考えられないことから、その意図するところは結界封じであったかもしれない。

つまり、地下式坑に置かれた播鉢、卸皿、石臼、板碑は、異常な死に方をした死者の邪を祓い封じ込めるための道具として使われたと考えられる。

3 地下式坑を閉じる意味をどう考えるか—遺跡で見つかるモノの意味とは—

では、播鉢などの邪を祓い封じる遺物がなくて死体が置かれた地下式坑はどう説明するのか。

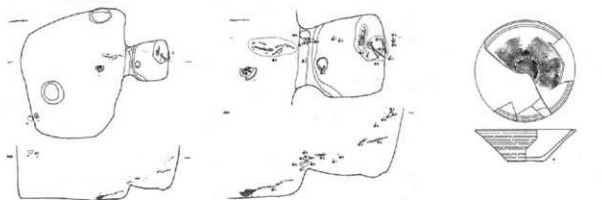
それについては、荒久遺跡(事例11)の穿孔のある香炉や志村坂上F地点(事例10)の破砕した風炉ないし火鉢をどう理解するかが今後の課題であろう。ただし、人骨が出ている地下式坑で無視できない点として、先にも触れたように、どの地下式坑も遺体の骨化後、ほぼ完全に地下式坑が埋められているのは注意しなければならない。この完全に埋める、閉じる行為が、邪を封じる最終的な行為とは考えられないだろうか。

それならば、播鉢、卸皿、石臼、板碑が地下式坑から出る場合、また地下式坑が意図的に埋められている場合、それらは全て異常死の死体が入れた地下式坑となるのか。

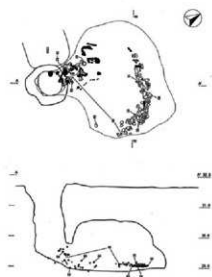
それも違うであろう。

これまで述べてきた通りに播鉢や石臼、板碑などに結界を封じる機能があるとすれば、地下式坑自体が機能を停止する際、地下式坑自体が持つ特別な機能—これこそが地下式坑の本来の機能なのである—その機能を封じる、閉じる際にこれらのモノが使用された可能性も十分考えられる。人骨が出土しない、下鶴間城山2号地下式坑の竪坑に放り込まれた完形の石臼(第39図 vii)(註8)や百済木遺跡の地下式坑の連結部に立てかけられた板碑群(第39図 viii)などは、それに該当するかもしれない。また、地下式坑の中には、天井が落ちた後にその上で火が焚かれたり、大量の銭やかわりけが置かれた例が散見される。これらも地下式坑の機能停止の際の儀礼と考えられないだろうか。

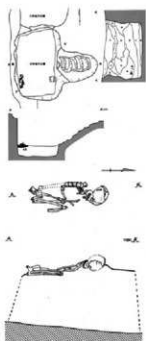
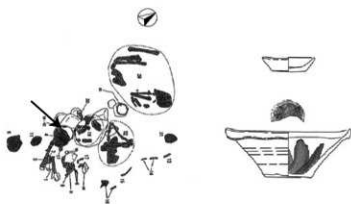
また、播鉢や石臼は中世後期の遺跡では決して珍しくはなく、よく見かける遺物である。その多くは割れた状態で出土する。それらのモノの機能の停止は、破損によるか別の理由があるのかは置くとして、何れにしろ、機能停止の際に、必要があればさらに割られ、慎重に処分されたようである。そうしなければ、「モノに崇められる」と考えられていたのがこの時代であるから。しかし、その廃棄されたモノ自体が、



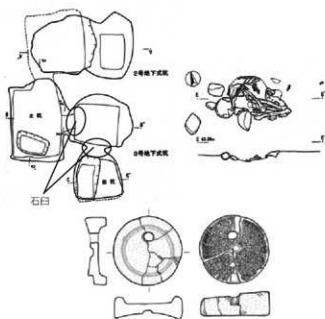
事例2 五反田II T3号



事例3 下布田75地点 SX07



事例4 八本木 3号地下式坑

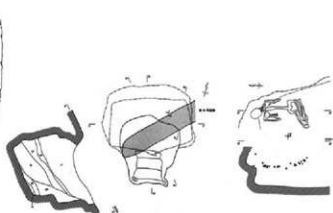


事例5 今宮 3号地下式坑

第37図 事例2～5



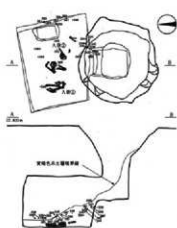
事例6 志村坂上下地点 SY-6



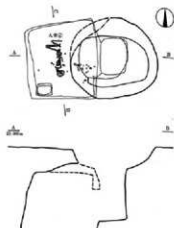
事例7 上野忍岡通跡群上野図書館地点 46号通橋



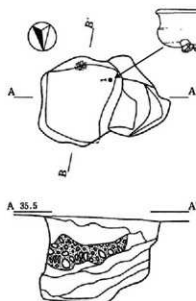
事例8 生実城跡 20-4号



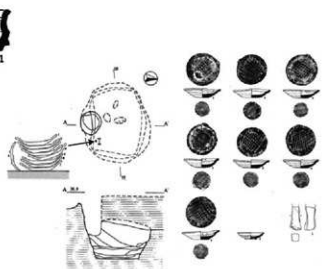
事例9 志村坂上下地点 SY-1



事例10 志村坂上下地点 SY-10



事例11 荒久 SK-158

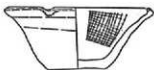


事例12 荒久 SK-237

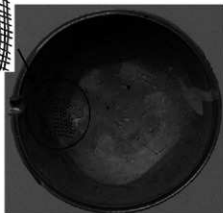
第38図 事例6~12



i. 御目皿



ii. こね鉢 (東谷中世墓址)
透野 1992 より



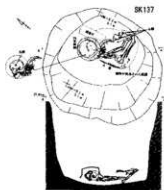
iii. 古瀬戸御目付大皿
(松山遺跡)



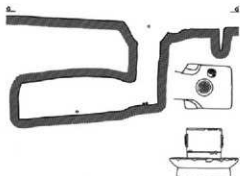
iv. 在地産蓮華文すり目付きすり鉢
(八幡台 10 次)



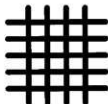
v. すり鉢と頭蓋骨
(下布田 75 地点 SK07)



vi. 鍋被り煎 (根城跡)
関根 2003 より



vii. 堅坑に茶臼を投げ入れる
(下観開城山遺跡)



九字



vii. 地下室を板碑で塞ぐ
(白清水遺跡)

第 39 図 参考図

ずっと顔物に触るように扱われていたかという点、とてもそうとは思えない。遺跡の各所で無造作に散らばるように出てくるからである（ただしこの判断は慎重でなければならない）。つまり廃棄の際に決められた手続き—例えば魂抜き—さえされれば、後はただの石ころのように扱われ、土の移動等に伴いあちこちに散らばったと考えられる。

しかし一方で、地下式坑に入れられた播鉢や石臼などは、一見それらと同じように見えるモノであっても、特別な手続きを経て意味が付与されたモノであって、その意味された機能を期待され地下式坑の必要な場所に配置されたと考える。

つまり、遺跡で見つかる遺構・遺物は、それぞれ同じように見えるモノでも、最終的に付与された意味はその当時のそのモノが置かれたシチュエーションに返って理解しようとしなければ、正しくは理解できないのだと思う。なかなか困難な作業ではあるが。

4 まとめにかえて

西原大塚遺跡第234地点で見つかった播鉢を伴う地下式坑の2体の人骨の性格について、同様に人骨が出土した地下式坑の例や関連する遺構・遺物を参考に考えてみた。その結果、二人の女性が通常とは異なる状況で死を迎えたことで帯びた邪を封印するために播鉢が置かれたものと結論付けた。

ところで、このような扱いは特殊な事情によるもので、通常の死を迎えた人々は丁寧に埋葬されたのかという点でもないようである。地下式坑が点在する地下式坑遺構群の当時の景観は、橋口定志氏（橋口 2009）が指摘するように『餓鬼草紙』第四段・疾行餓鬼の図のような、遺棄された死体や骨となった遺体があちこちに点在するような、そんな風景であったのかもしれない。例えば、下布田遺跡では使用されなくなった堀割状の道の覆土から馬や牛の骨に混じって人骨片が見つかっている。つまりそれは、地下式坑に入れられずに地上に置かれた牛や馬、人の死体とその周囲にあって、骨となった後で堀割状の使われなくなった道へ片付けられ、あるいは雨水で流れ込んだことを物語っていると言えよう。

(3) 井戸跡について

当調査区南西端部より10号井戸跡が一基検出された。西原大塚遺跡の中世の井戸跡は本件で3例目となる。ここでは既出の中世の井戸跡と比較検討し、10号井戸跡を概観してみようと思う。

213地点出土8号井戸跡

15世紀中に行われた造成工事後の緩やかな斜面地に15世紀後半に掘削されている（尾形・大久保・深井・青木 2019）。開口部径2.15×1.95m、深さ200cmまで精査されており、形状は漏斗状で、足掛穴3ヶ所が確認されている。覆土の堆積状況は自然堆積と見られる。

220地点9号井戸跡

本調査区と隣接し、15世紀後半の段切状遺構の最上段面に掘削されている（大久保・尾形 2020）。時期は段切状遺構に先行する14～15世紀中頃と考えられている。開口部は円形で、長軸3.74m、短軸不明、深さ170cmまで精査されている。形状は漏斗状、北西側に幅75cm程度で一部階段状の平場が井筒に対して逆し字型に構築されている。覆土の堆積状況は自然堆積と見られる。

234地点10号井戸跡

平面形の2／3程の検出であるが、確認できた最上辺で1辺9.5mを測る。開口部の平面形は不整形円形、井筒部の平面形は円形である。2段の壇状造成を行い、再下面から鑿井し、上部が大きく広がる漏斗

形を呈する。井筒部周縁には幅0.2～1.0mの平場があり、北東から南東・南西にかけて巡るように広がっている。甕壇状造成面の上段が西側の現斜面を背に、南東に向けて開ける様相からも、井筒南東側に昇降ルートがあったと推定される。

大型の掘鉢状土坑と井筒・降り道で構成される特徴的な井戸は、総称して「まいまいず井戸」「漏斗状井戸」などと呼称される。志木市からは検出されていないが、武蔵野台地上には、大井町の「大井戸（松本・小泉 1976）」、狭山市の「堀兼の井（吉川 1984）」「七曲井（柳田・吉川 1973）」、羽村市の「まいまいず井戸（深澤 2021）」、青梅市の「青梅新町の大井戸（伊藤・木下 1994）」などが分布している。降り道が所謂「まいまい」状の螺旋構造なのは上記の中では羽村市の「まいまいず井戸」のみで、他はつづれ折りなどの多様な形態を採ることから、10号井戸跡も「まいまい」状の降り道は確認できないものの、これらの井戸の一つに加えられよう。

10号井戸跡の土層断面からは下段の甕壇状造成跡を版築状に埋めつつも井戸が開いていたことが伺える。木枠など何らかの構築材が壁に存在していたと仮定すると裏込めのような造作を行い、壁を補強した痕跡かもしれない。井筒部分の土層には多数の礫と共に16世紀中葉～17世紀前半の遺物が含まれ、人為的に埋められた痕跡がある点、近隣の段切造成が15世紀後半に行われた点から、10号井戸は15世紀後半から17世紀前半に使用されていたと言える。上段の甕壇造成面から約1.75m下の井筒開口部間に17世紀中頃以降の遺物が纏まって出土していることから、井戸を廃絶した後の窪地に一度に遺物を入れた可能性が考えられる。

また、本調査区の北西側には「西原斜面林」として保全され、調査地との比高差約5mの下面に現在も湧水が見られる場があり、関東ローム層下の武蔵野礫層を透過し、東京礫層上を帯水していた地下水が台地の突端に湧水として現れたものと考えられる。当時は湧水があったのかは定かではないが、湧水する地層が近接するにも関わらず、より労力を要する井戸の掘削を選択したという点に何らかの地勢上の制約があったのではないかと推測される。

まとめると、3基の井戸間の共通要素は形態が漏斗状で素掘り井戸という点のみであった。9・10号井戸跡には平場が付随しており、規模は10号井戸跡が突出して大型である。立地と時期は8・10号井戸跡が15世紀以降に行われた段切造成工事後の緩やかな斜面地に15世紀後半に、9号井戸跡は15世紀後半の段切状遺構最上段面に、造成に先行する14～15世紀中頃に鑿井されている。さらに8・9号井戸跡は自然堆積であるが、10号井戸は人為的な埋め戻しの要素がみられる。それぞれ形態・立地・鑿井時期・埋没状況に共通点と相違点が認められる。

志木市内では他に、中世の井戸として城山遺跡第42地点からスロープ付きの井戸が検出されており、今後多様な形態の井戸の検出が増えれば、さらに何らかの共通項が見出せるようになるかもしれない。

また、10号井戸の東約80mには鎌倉街道上道と中道を繋ぐと推定される羽根倉道が通っている（埼玉県歴史資料館 1983）。青梅新町の大井戸は旧青梅街道と秩父道の交差点に、狭山市の七曲井は鎌倉街道上道沿いに、大型井戸が主要道沿いに鑿井されていることから、羽根倉道と10号井戸にも何らかの関連があったのではないだろうか。今後は古道と地下式坑・段切造成などの他遺構を含めた集落構成も考え合わせ、中世から近世初頭の志木市の包括的な集落様相の解明を進める必要がある。

(4) ピットと建物跡及び柵列について

本調査地点では、ピットが68本検出されいづれも中世または中世以降の所産と推定された。その中には、柱痕跡の痕跡を土層に確認できるものも存在した。また、その平面的な配列には直線的またはL字状などに連なる部分も見受けられるが、土層と配列が整合して確実に略方形または長方形となるものは認められなかった。当地点が近代以降の激しい攪乱を受けていることも関連する可能性を考慮する必要があるかもしれない。ここでは小型の土坑も含めて、配列面から建物跡や柵列の可能性のあるものについて指摘するに留め、以下に簡条に示し今後の調査と検討の材に供したいと思う。

① C-2・3-D-2・3グリッドにおいて、43P-931D-34P-32Pが北から東へ24°振った方向で直線に連なる。それぞれの掘り方中心で概ね195~200cm(≒6尺5寸)である。仮にこのラインを西桁と仮定すると42Pを南端に直角の梁方向で35・36Pが当たるが、その先はなく一本抜けて25Pが方向的に存在するものの、その柱間隔は不揃いである。桁北辺は32Pとなり梁方向は928・922・923Dが方向的に当たる柱間は不揃いで、かつその先は攪乱があり不明となる。26Pを南端とする東桁を仮定すると921Dがありその先は攪乱でない。よって、ここでは屋根を持つ構造的な建物を想定するのは現状では難しく、柵列的なL字形またはコの字形の区画が存在した可能性を指摘できるかもしれない。

② 調査区北側のB-3・4、C-3・4グリッドは、本調査地点の中で多くのピットが確認されているエリアである。その中で16Pと53~55Pはそれぞれに切り合いがあり、ピット自体が少しずつ移動して更新される形態が伺え柵列の一部となる可能性がある。その場合は、地下式坑913Dを挟んで1P-57P-4P-2P-3PがN-60°-Wでほぼ同一方向となり関連する可能性があるかもしれない。また、この1~3Pの列に59P-9・8・7Pと58P-12~15Pの2例が概ね平行する。その場合、1Pと58Pを西辺の隅と捉えそれぞれ東へ延びる独立したコの字形の区画と解することもできるかもしれない。

③ B-3~C-3グリッドにかけて、28P-63P-22P-38Pがほぼ東西方向に、18~20P-21P-63P-62Pがそれにほぼ直行して確認された。掘り直しが行われている形態から柵列となる可能性がある。

【註】

註1 当該土器については、金子直行氏と書上博博氏に実現いただき有益な示唆をうけた。またこの期の土器分布や資料的な位置づけなどについては、書上氏より多くの教示をいただいている。記して両氏に御礼申し上げる。

註2 この論考は、横口定志氏のご好意により発表前(東京考古40号<2022.5.刊予定>)に拝読させていただいたものである。

註3 横口氏は「人の死をめぐる一連の儀式が一定の死生観に基づいているもの以上、再葬儀礼に伴う骨の移動に際しても、少なくともある特定の部位の骨は失われ、一次葬地には残されないと考えるのが自然であろう。だが、これまでの地下式坑出土人骨を見る限り、「一次葬地」に残されている骨に有るはずの一定の傾向を、私は見いだせていない。骨を伴う地下式坑がいずれも再葬の一次墓であるとするならば、地下式坑という特異な埋葬施設を使用する葬法は、どのような死生観に基づく再葬なのか説明する必要がある」としている(横口 2009)。

註4 節目を適切に図化した例が見当たらないため、荒久遺跡SK-231の卸皿の図を使う。なお、「袖ヶ浦市荒久遺跡」の遺構説明文では卸皿8点とあるが実測図・写真では7枚になっている。報文のとおり8枚であれば、八大尊・八葉の「八」に、白磁皿を含めた9枚は「九字」につながる可能性が興味深い。

註5 「蓮華」から聖なる者あるいは物が生まれることを「蓮華化生」と呼ぶ。その最もよく知られている場面は阿彌陀浄土変相図の蓮池の華に往生者が化転するところであろう。蓮華はまた無限の創造性を戴する聖なる花であり、それ故に自ら動いて回転し始め、化生への心を見せるという。井上正1996「蓮華文一創造と化生の世界一」『日本の美術4 蓮華紋』

註6 「九字」は9世紀の土器の見込または底部に線刻文を中心に施される例が知られる。その位置からすでに器に施されるものに対する辟邪の意識があったと考えられる。

- 註7 古墳時代の横穴墓の封鎖石の意味を、古事記の伊弉那岐命が黄泉比良坂の入り口において塞いだ「千引岩」に求める説は古くから知られるが、それらは本事例の封鎖石の意圖に通じるといえる。
- 註8 報文では、茶臼は竪坑底面にめり込むように出土したことから投げ込まれたとみている。また竪坑覆土は埋め戻しと判断されている。なお竪坑の中層から底部にかけて大量の炭化物和灰が出土していることから、埋め戻しに伴う儀礼の可能性もある。

[引用・参考文献]

- 浅野晴樹 1991『東国における中世在地系土器について—主に関東を中心にして—』『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集
- 井汲隆夫 1992『内藤町遺跡—放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』東京都建設局・新宿内藤町遺跡調査会
- 板橋区志村坂上遺跡F地点調査会 1998『志村坂上遺跡F地点発掘調査報告書』
- 伊藤博司・木下裕雄 1994『青梅新町の大井戸発掘調査概報』青州市遺跡調査会
- 尾形剛敏・大久保 聡・深井恵子・青木 修 2019『西原大塚第213地点 中野遺跡第102地点 中野遺跡第104地点発掘調査報告書』埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・大久保 聡・成島一也・西川忠春 2020『西原大塚第224地点』埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・大久保 聡・深井恵子・青木 修 2005『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会
- 小川町教育委員会 1998『小川町埋蔵文化財調査報告書第16集 町内遺跡発掘調査報告書VII』
- 川本町遺跡調査会 2003『川本町遺跡調査報告書第8集 百済木遺跡』
- 大久保 聡・尾形剛敏 2020『西原大塚第220地点 西原大塚第222地点 西原大塚第227地点』埼玉県志木市教育委員会
- 五段田遺跡調査団 1991『五段田遺跡II』
- 埼玉県立歴史資料館 1983『歴史の道調査報告書第1集 鎌倉街道上道』埼玉県教育委員会
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第77集 八木木遺跡』
- 財団法人千葉県文化財センター 1998『袖ヶ浦市荒久遺跡』
- 財団法人茨城県教育財団 2005『茨城県教育財団法人報告書第280集 松村白根遺跡I』
- 佐々木保俊・尾形剛敏 1997『第7章中道遺跡第37地点の調査』『志木市遺跡群VII』志木市の文化財第25集 埼玉県志木市教育委員会
- 志木市遺跡調査会 2009『西原大塚遺跡II Ⅲ』志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 鈴木孝之 1990『古代から中近世の井戸跡について（1）—埼玉県における形態分類を中心として—』『研究紀要 第7号』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 関根道人 2003『鍋被り葬考—その系譜と葬法上の意味合い—』『人文社会論叢 人文科学編9』
- 台東区文化財調査会 1999『上野忍岡遺跡群国国会図書館支部上野図書館地点I』
- 立石盛嗣ほか 1982『後張I』埼玉県埋蔵文化財報告書第15集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 千葉市文化財調査協会 2001『千葉市生実城跡』
- 調布市遺跡調査会 2006『下布田遺跡—第75地点（宅地造成工事）の調査—』
- 東海大学ほか 2006『今宮遺跡』『東海大学校地内遺跡調査研報告13・14—2003・2004年度—』
- 中村倉司 1999『埼玉県における5世紀の土器—和泉式土器の行方—』『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 中野晴久『中世常滑窯の研究』愛知学院大学
- 横口定志 2009『地下式坑研究序説』『物質文化史学論叢』北海道出版企画センター
- 比田井克仁 1998『南関東五世紀土器考』『史観』第20号
- 藤澤靖幸 2021『まいまいず井戸』『羽村市史』資料編 考古・中世補遺 羽村市史編さん委員会
- 藤澤良祐 2002『瀬戸・美濃大塚編年の再検討』『研究紀要第10輯』財団法人埼玉県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 房総中近世考古学研究会 東国中世考古学研究会 2007『全国地下式坑集成果集』
- 松本新八郎・小泉 功・坪田幹男・鹿島英明 1976『大井戸跡発掘調査報告書』文化財報告第5集 大井町教育委員会
- 宮川幸佳 2003『西原大塚遺跡における方形周溝墓出土土器』『埼玉考古第38号—弥生時代特集—』埼玉考古学会
- 宮川幸佳 2003『西原大塚遺跡出土の古墳時代前期後半の土器』『埼玉考古第39号』埼玉考古学会
- 薬瀬裕一 2009『コラム：地下式坑に葬るといふこと』『中世の地下室』高志書院
- 柳田敏司・吉川親男ほか 1973『七曲井—復元発掘の記録—』狭山市教育委員会
- 大和市教育委員会 1998『大和市文化財調査報告書第66集 下鶴間城山』
- 吉川國男 1994『漏斗状井戸と「ほりかむの井」』『武蔵野』第72巻 第1・2号 武蔵野文化協会

[付 編]

自然 科学 分析

I. 西原大塚遺跡出土人骨の同位体分析

米田穰・大森貴之・尾崎大真（東京大学総合研究博物館）

西原大塚遺跡第234地点912号土坑から出土した人骨資料2点と動物骨資料1点から残存するコラーゲンを抽出し、生前のタンパク質の由来を反映する炭素・窒素同位体比と、生存年代を示す放射性炭素年代の測定を試みた。うち2点ではコラーゲンの保存状態が悪く分析結果が得られなかったが、1点は保存状態のよいコラーゲンが回収できたので、分析結果を報告する。

1. 資料と方法

1号人骨（図版14-19）・2号人骨（図版15-7）、動物骨（図版16）の骨資料3点から、約0.5g程度の緻密質片をダイヤモンドカッターで採取し、骨の主要な有機物であるコラーゲンというタンパク質を抽出して分析に供した。試料の前処理として、アルカリ溶液で土壌有機物を除去し、さらにコラーゲンを熱変成させることで他の有機物から精製するゼラチン化を行った（Longin 1971; Yoneda et al. 2002）。具体的な手順として、最初に酸化アルミニウム粉末をサンドブラストし、超純水中で10分間超音波洗浄して表面に付着する異物や海綿質を除去した。次に4℃の0.4M塩酸中に39.5時間静置して、無機質のヒドロキシアパタイトを脱灰してから、純水中で4.5時間静置して中性に戻した。脱灰した試料を0.1Mの水酸化ナトリウム溶液中に3.5時間静置して、フルボ酸やフミン酸などの酸に溶ける土壌有機物を除去した。超純水で3.5時間静置することで中性にしてから、塩酸でpH 4の薄い塩酸溶液中で90℃まで加熱して、水に溶けるゼラチン化して、ガラス繊維ろ紙（Whatman GF/F）で吸引濾過して不要成分を除去して、コラーゲンを主成分とする期待されるゼラチンを精製した。

ゼラチンの炭素および窒素の重量含有率および安定同位体比の測定は、放射性炭素年代測定室において、Thermo Fisher Scientifics社製のFlash2000元素分析を前処理装置として、ConFloインターフェースを経由して、Delta V安定同位体比質量分析装置で測定する、EA-IRMS装置を用いて行った。約0.4mgの精製試料を錫箔に包み取り、測定に供した。測定誤差は、同位体比が値付けされている二次標準物質（アラニン等）を試料と同時に測定することで標準偏差を計算した。通常の測定では、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定誤差は0.2‰、 $\delta^{15}\text{N}$ の誤差は0.2‰である。

年代測定用の試料は、1mgの炭素に相当する約2.5mgのコラーゲンを銀カップに秤量し、Elementar社製Vario ISOTOPE SELECT元素分析計に導入し、燃焼後、精製された二酸化炭素を真空ガラスラインに導入し、あらかじめ鉄触媒約2mgを秤量したコック付き反応管に水素ガス（炭素モル数の2.2倍相当）とともに封入して、650℃で6時間加熱して実施した（Omori et al. 2017）。

グラフアイト化した炭素試料の放射性炭素同位体比を、東京大学総合研究博物館が所有する加速器質量分析装置（AMS）を用いて測定した。放射性炭素同位体比から慣用 ^{14}C 年代（BP年代）を算出する際に同位体比分別の補正に用いる $\delta^{13}\text{C}$ 値は、AMSによって同時測定した値を用いている（Stuiver and Polach 1977）。較正年代の算出には、暦年較正年代の推定には、専用プログラムOxCal4.4（Bronk Ramsey, 2009）を使用し、較正データにはIntCal20（Reimer et al. 2020）を用いた。

2. 結果

ゼラチン回収率が1%未満の場合、コラーゲンが変性している可能性があるが(van Klinken 1999)、今回分析した骨資料3点のうち動物骨では0.5%の回収率となり、目安を下回った(第16表)。また、コラーゲンの保存状態の指標となる炭素・窒素の原子数比(C/N比)では2号人骨と動物骨がそれぞれ4.9と4.3という値を示し、生体中で期待される2.9~3.6の範囲から外れた。以上より、2号人骨と動物骨ではコラーゲンの変性あるいは外部有機物の混入の可能性があると判断し、また放射性炭素年代の測定は実施しないことにした。残りの1号人骨のゼラチンではC/N比は3.6と期待される範囲内であり、炭素濃度と窒素(重量比)がそれぞれ13%以上と4.8%以上という、保存状態のよいコラーゲンの目安を上回ったことから、1号人骨では抽出されたゼラチンから構成されると考えられる。

保存状態が良好と考えられた1号人骨のコラーゲンにおける炭素・窒素同位体比を、日本列島の動物と比較すると(Yoneda et al. 2004)、C3植物を中心とした生態系から多くのタンパク質を摂取しており、海産物やC4植物からの寄与はほとんどないと推定された(第40図)。水稲を利用していれば、窒素同位体比は上昇すると期待されるが(米田他 2019)、今回分析結果が得られた1号人骨は天然の動物で説明できる。

海産物を多く摂取した人骨の場合は海洋リザーバ効果で放射性炭素年代が見かけ上古くなる影響があるが、本資料ではその影響はないと考えられる。未校正の 537 ± 18 BP(第17表)を陸上生態系用の校正曲線(IntCal20)で校正した結果、1標準偏差に相当する確率分布の範囲は15世紀前半、2標準偏差相当範囲では14世紀前半から15世紀前半と推定された(第18表、第41図)。

[引用文献]

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (4) . 337-360.
- DeNiro, M.J. 1985 Postmortem preservation and alteration of in vivo bone-collagen isotope ratios in relation to paleodietary reconstruction. *Nature* 317, 806-809.
- Longin, R. 1971 New method of collagen extraction for radiocarbon dating. *Nature*, 230, 241-242.
- Omori, T., Yamazaki, K., Itahashi, Y., Ozaki, H., Yoneda, M., 2017 Development of a simple automated graphitization system for radiocarbon dating at the University of Tokyo. The 14th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry.
- Reimer, P. J., Austin, W. E. N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, L., J. Heaton, T., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B., Manning, S. W., Muscheler, R., Palmer, J. G., Pearson, C. J., van der Plicht, C., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Turney, C. S. M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S. M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., Talamo, S. 2020 The IntCal20 Northern hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP) . *Radiocarbon* 62 (4) , 725-757.
- Stuiver, M., and H.A. Polach. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19 (3) . 355-363.
- Van Klinken, G.J. 1999 Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements. *Journal of Archaeological Science* 26, 687-695.
- Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa. 2002 Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. *Radiocarbon* 44, 549-557.

Yoneda, M., Y. Shibata, M. Morita, R. Suzuki, T. Sukegawa, N. Shigehara, and T. Akazawa. 2004 Isotopic evidence of inland-water fishing by a Jomon population excavated from the Boji site, Nagano, Japan. *Journal of Archaeological Science* 31 (1), 97-107.

米田穰・菊地有希子・那須浩郎・山崎孔平 2019 同位体分析による弥生時代の水稲利用の評価にむけて：同位体生態学的な背景と実験水田における基礎研究。「農耕文化複合形成の考古学（下）—農耕のもたらしたモノ—」（設楽博己編），pp. 209-230, 雄山閣

| 資料名 | 測定 ID | 回収率 | $\delta^{13}\text{C}$ | $\delta^{15}\text{N}$ | 炭素濃度 | 窒素濃度 | C/N 比 |
|------|---------|------|-----------------------|-----------------------|-------|------|-------|
| 1号人骨 | YL44273 | 1.0% | -20.8‰ | 6.6‰ | 30.8% | 9.9% | 3.6 |
| 2号人骨 | YL44272 | 1.0% | -21.9‰ | 12.1‰ | 33.2% | 7.9% | 4.9 |
| 動物骨 | YL44274 | 0.5% | -20.0‰ | 9.9‰ | 32.1% | 8.6% | 4.3 |

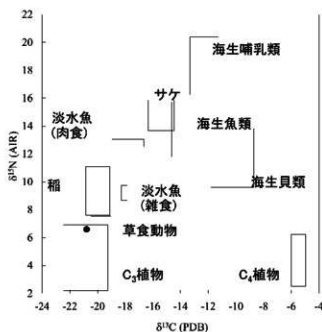
第 16 表 ゼラチン回収率と EA-IRMS による分析結果

| 資料名 | 測定 ID | ^{14}C 年代 | 補正用 $\delta^{13}\text{C}$ |
|------|-----------|--------------------|---------------------------|
| 1号人骨 | TKA-24437 | 537 ± 18 BP | -21.1 ± 0.2 ‰ |

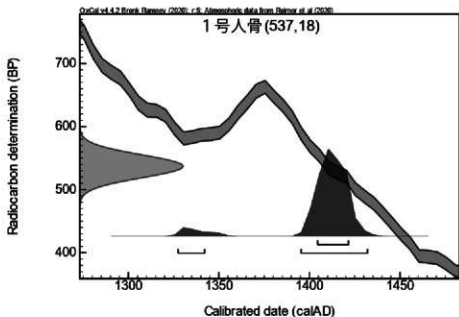
第 17 表 慣用放射性炭素年代

| 資料名 | 較正年代 (1SD) | 較正年代 (2SD) | 較正データ |
|------|---------------------------------|---|----------|
| 1号人骨 | 1405 cal AD (68.2%) 1420 cal AD | 1328 cal AD (2.1%) 1336 cal AD 1395 cal AD (93.3%) 1430 cal AD | IntCal20 |

第 18 表 比較放射性炭素年代



第 40 図 骨コラーゲンと食料資源から期待される炭素・窒素の同位体比



第 41 図 較正放射性炭素年代の確率分布

分布の下に示した範囲は 1 標準偏差 (上) と 2 標準偏差 (下) に相当する。

Ⅱ. 西原大塚遺跡出土人骨の人類学的研究

佐伯史子⁽¹⁾・平慶子⁽¹⁾・辰巳晃司⁽¹⁾・波田野悠夏⁽²⁾・鈴木敏彦⁽²⁾・奈良貴史⁽¹⁾

(1) 東北大学大学院歯学研究科

(2) 新潟医療福祉大学自然人類学研究所

1. はじめに

2021年、志木市所在の西原大塚遺跡の発掘調査において中世の地下式坑から人骨が出土した。本報告は、これらの人骨の人類学的研究報告である。

2. 方法

資料の年齢段階の区分は、胎児期（胎生期～出生）、乳児期（0-1歳）、幼児期（2-6歳）、小児期（7-14歳）、若年期（15-19歳）、壮年期（20-39歳）、熟年期（40-59歳）、老年期（60歳以上）とした。資料の計測は、骨はMartin法（Martin and Saller, 1957；馬場,1991）に、歯は藤田（1949）に準拠した。歯の形態小変異は松村（1995）と金澤（2011）に準拠した。歯の咬耗度はMolnar（1971）に基づいて分類した。また、咬耗段階が1度の場合は未萌出歯または萌出したものの咬合平面に達していない未使用歯と判断し、2度以上は咬合に関与した萌出歯とした。

エナメル質減形成については山本（1988）の基準によつての有無を確認し、齶蝕に関してはWHO（1979）の基準によつて齶蝕の程度をC1～C4の4段階に区分した。

頭骨の計測値は第19表、頭骨の形態小変異は第20表、歯冠計測値は第21表、四肢骨の計測値は第22表に示した。

912D出土人骨

出土状況：中世に比定される地下式坑から人骨が出土したとの報を受け、現地で人骨の取り上げ作業に着手した。著者らの観察では、人骨は地下式坑912Dの南壁側にまとまっており、頭骨1個が南壁に平行に左側に上に横臥の状態、下顎骨は東壁に北東方向に約70cmほど離れて下向き、大腿骨頭と寛骨臼が離れているなど四肢骨も解剖学的位置関係を保っていないことが確認できた。さらに東壁寄り出土した完形の播鉢の口縁にほぼ完形の大腿骨1本と、それよりか数十cm低いレベルで左右の大腿骨が確認されたことから複数個体があると把握できた。大腿骨3本は、骨端が癒合していない未成人の左右の大腿骨と癒合が完了している成人の右大腿骨である。さらに北側の入口部から頭骨片と歯が出土していることが現地で報告された。以上のことから未成人骨を1号人骨、成人を2号人骨とし、本分析を進めることにした。

1号人骨（未成人）

遺存状態：南壁に位置した頭骨と北東方向に約70cmほど離れており下顎骨は、いずれも第3大白歯が萌出途中なことから15歳前後と同じ成長段階と判断され、さらに咬耗の進行状況からみても同一個体としても矛盾はないことから、同一個体として判断した（図版14-1・2）。また、骨端が未融合なのは、体幹骨では仙骨椎体輪、四肢骨では右肩甲骨関節窩部片、左橈骨遠位端、右寛骨腸骨稜、左右の大腿骨、左右の脛骨、左腓骨遠位端である（図版14-3～20）。四肢長骨の骨端部と骨幹部は完全に分離する。歯の萌出状況と骨端の癒合状況からの年齢推定に大きな差がないことと、重複する部位が認められないことから、この遺構の未成人骨を同一個体として扱った。確認できた部位は第42図に示す。以下に歯の歯式を示す。水平線は上下顎の境界を、垂直線は正中線を表し、向かって左側が個体の右を意味する。歯の記号が記されている箇所は歯の存在が確認された部分で、Iは切歯、Cは犬歯、Pは小臼歯、Mは大白歯をそれぞれ表し、また数字は同一歯種内での順位を表す。歯の状態を表す記号の意味は歯式下記の凡例の通りである。明らかに歯槽窩を認めた部位は死後脱落とし、歯槽窩の有無が判然としない部分は歯槽破損と判断した。全ての歯種が植立する。齶触は認めない。エナメル質減形成が全ての歯について認められた。咬耗度は上顎両側第一大臼歯、下顎両側第二大臼歯が3度、上下顎両側第三大白歯が1度で未萌出であった。その他の永久歯が2度であった。上顎両側中切歯及び側切歯には斜切痕を認めた。

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|----|----|----|----|---|----|----|----|----|---|----|----|----|----|------|---|
| ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ | ◇ |
| (M3) | M2 | M1 | P2 | P1 | C | I2 | I1 | I1 | I2 | C | P1 | P2 | M1 | M2 | (M3) | |
| (M3) | M2 | M1 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| ◇ | ◇ | ◇ | | | | | | | | | | | | | | |

- ◇：植立
- ：死後脱落
- ()：未萌出

年齢推定：歯の萌出状況からは下顎右側第三大白歯は根尖部が未完成、上下顎第三大白歯が未萌出であることから、18歳には達していないと思われる。さらに、左橈骨、左右の大腿骨、左右の脛骨、左腓

骨の骨端部は完全に遊離することから若年前半段階である。以上のことから15歳前後と推定される。
性別推定：四肢骨において右寛骨の大坐骨切痕が広い、大腿骨の骨幹部が華奢なこと頭骨では、額が垂直に立ち上がり、前頭結節が明瞭、眼窩下縁が鋭角、外後頭隆起が未発達なことから、若年段階という年齢を考慮しても女性と推定される。

特記事項：頭長幅示数70.9と長頭型を呈し、長頭型が半数を占める中世の鎌倉時代材木座出土成人女性の平均74.2値よりも低く、頭骨が前後方向に長い中世人の特徴を示している。上顎前歯部が前方に突出するいわゆる反っ歯の傾向が強い。歯槽側面角は53°と突顎に分類され、鎌倉時代材木座出土成人女性の平均59.1°よりも小さい。鼻根部の隆起の隆起もほとんど認められず、鼻骨平坦度示数は13.1と、日本列島の各時代の平均値よりもかなり低く、平坦な顔である（第43図）。上顔高は推定値だが61.5mmと材木座出土成人女性の平均61.6mmとほぼ同じであり、顔高は低い。以上のことから、鈴木尚が中世人の特徴とした顔高ならびに鼻が低く、反っ歯が強く、長頭型だという特徴を西原大塚の個体はすべて備えている。大腿骨骨幹部は後方への張出しは見られず、示数は98.7と材木座成人女性の平均右119.9、左111.7よりも低い値を示す。

2号人骨（成人）

遺存状況：頭骨において、細片化が著しい頭骨片が多数確認できる。同定できた部位は、右の頭頂骨正中部片、左側頭骨錐体部片、下顎骨左右の歯槽部片である（図版15-1～5）。歯については、上顎は全て遊離歯であり、下顎は臼歯部の歯槽部のみが遺存し、前歯部から小臼歯部にかけての歯槽部は欠損している。歯根は全ての歯種について完成している。同一の種類歯の重複はない。歯の重複はない。歯の病変に関しては、齶蝕を認めた歯を網掛にすることで示し、齶蝕の程度は歯式に併記した。エナメル質減形成が全ての歯について認められた。咬耗度は上顎左側第一大臼歯・下顎左側第一大臼歯が4度、他の永久歯が2～3度であった。以下に歯の歯式を示す。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|
| C2 | C2 | | | | | | | | | | | C2 | | | | | |
| ▽ | ▽ | ▽ | ▽ | = | = | = | = | = | = | = | = | ▽ | ▽ | ▽ | ▽ | ▽ | ▽ |
| M3 | M2 | M1 | P2 | = | = | = | = | = | = | = | = | P2 | M1 | M2 | M3 | M3 | M3 |
| M3 | ○ | × | = | = | = | = | = | = | = | = | = | = | M1 | × | M3 | M3 | M3 |
| ◇ | | | | | | | | | | | | | ◇ | | | | ◇ |
| C2 | | | | | | | | | | | | | | | | | |

◇：植立

○：死後脱落

×：生前喪失

▽：歯槽の有無は確認できないが、歯冠のみが遺存するもの（遊離歯）

=：歯槽、歯ともに確認できず状況不明であるもの

四肢骨においては、両骨端部が欠損しているが骨幹部が保存状態の良い左大腿骨と右大腿骨の骨幹部片が確認できる（図版15-6～8）。

成人と推定された歯と大腿骨に重複する部位がみられないことから断定はできないが同一個体として本報告では扱った。

年齢：第三大臼歯に咬耗が認められることから成人段階に達していた。

性別：大腿骨の骨幹部が華奢なことから女性と思われる。

特記事項：四肢骨では骨端部の破損により、若年か成人か判断ができない右上腕骨骨幹部、左尺骨骨幹

部、左右腓骨骨幹部、左右の距骨片が確認されている。

65P人骨

出土状況：調査区中央付近のD3グリッドから出土した。

遺存状況：細片化が著しい頭骨片が多数確認される。同定できた部位は、左側頭骨内耳部、右前頭骨頬骨突起部、前頭骨正中部片、右頬骨片である。

年齢：確認できる頭骨片の縫合が、内板は閉じ、外板は閉じてないことから成人段階には達していたと思われる。

性別：性別を推定できる部位が確認できず不明。

3. まとめ

①地下式坑912D出土人骨は少なくとも15歳程度の若年女性と成人女性が確認できる。

②若年女性の頭骨は、顔高ならびに鼻が低く、反つ歯が強く、長頭型だという中世人の特徴を示す。

4. 謝辞

人骨の調査にあたっては以下の方々にご協力を賜った。記して感謝の意を申し上げる。池田彩華、小林千花、菊地条太郎、栗川桃華、澤浦亮平、千代初音、富田啓貴、中村謙伸、望月信吾、山口あかり、山田敏輝、吉田萌（五十音順・敬称略）

[引用文献]

- 馬場悠男 1991 人骨計測法。人類学講座別巻1—人体計測法。雄山閣、東京。
- Brothwell DR 1989 The relationship of tooth wear to aging. In: Iscan MY (ed) Age markers in skeleton. Thomas, Springfield, pp.303-316.
- 藤田恒太郎 1949 歯の計測基準について。人類学雑誌 61:27-31.
- 金澤英作 2011 日本人の歯とそのルーツ。わかば出版、東京、pp.143-189.
- Martin, R. and Saller, K. 1957 Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. G. Fischer, Stuttgart.
- Matsumura H. 1989 Geographical variation of dental measurements in the Jomon population. Anthropological Science 97 (4) : 493-512.
- Matsumura H. 1994 A microevolutional history of the Japanese people from a dental characteristics perspective. Anthropological Science 102 (2) : 93-118.
- Matsumura H. 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology. National Science Museum monographs 9: 1-130.
- Matsumura H. 1998 Native or migrant lineage? The aeneolithic Yayoi people in western and eastern Japan. Anthropological Science 106 (Supplement) : 17-25.
- Matsumura H. 2007 Non-metric dental trait variation among local sites and regional groups of the neolithic Jomon period, Japan. Anthropological Science 115: 25-33.
- Molnar S. 1971 Human tooth wear, tooth function and cultural variability. American Journal of Physical Anthropology 34: 175-190.
- 鈴木 尚・林都志夫・田辺義一・佐倉 朔 1956 XI.頭骨の形質。日本人類学会編(編集代表者 鈴木尚)。鎌倉村木座の中世遺跡と人骨。岩波書店、東京:75-148.
- Ubelaker DH. 1999 Human skeletal remains, 3rd edition. Academic Press, San Diego.
- 山口 敏 1982 縄文人骨。縄文文化の研究 1, pp.16-88, 雄山閣、東京。
- 山本美代子 1988 日本人古人骨永久歯のエナメル質減形成。人類学雑誌, 96:417-433.

Yamamoto M. 1989 Enamel hypoplasia in the deciduous teeth of Edo Japanese. Anthropological Science 97 (4) : 487-492.

WHO (World Health Organization) 2013 World health statistics 2013. WHO Press, Geneva.

WHO (World Health Organization) 1979 Oral health surveys-basic methods. 2nd edition, Geneva.

| 頭蓋計測値・示数 | | 西原大塚1号人骨 | |
|-----------|---------|----------|------|
| Martin 番号 | | R | L |
| 1 | 頭蓋最大長 | 184 | |
| 8 | 頭蓋最大幅 | 131 | |
| 8/1 | 頭蓋長幅示数 | 73.9 | |
| 48 | 上顔高 | 61.5 | |
| 50 | 前歯窩間幅 | 16.8 | |
| 52 | 眼窩高 | 36 | 35.6 |
| 54 | 鼻幅 | 26.7 | |
| 55 | 鼻高 | 44.7 | |
| 54/55 | 鼻示数 | 53.0 | |
| 57 | 鼻骨最大幅 | 2.6 | |
| 61 | 上顎歯槽突起幅 | 64.9 | |
| 63 | 口蓋幅 | 40.5 | |
| 74 | 前歯槽角 | 53° | |

単位: mm

第19表 頭骨計測表

| | 西原大塚1号人骨 | |
|-----------|----------|---|
| | R | L |
| 前頭縫合 | - | - |
| 眼窩上神経溝 | - | / |
| 眼窩上孔 | - | - |
| ラムダ小骨 | + | / |
| インカ骨 | / | / |
| 横後頭縫合痕跡 | + | / |
| アステリオン骨 | + | / |
| 後頭乳突縫合骨 | + | / |
| 頭頂切痕骨 | - | / |
| 額骨閉鎖 | / | - |
| 前額結節 | - | - |
| 傍額突起 | / | / |
| 舌下神経管二分 | - | - |
| フシケ孔 | - | - |
| 卵円孔棘孔連続 | / | - |
| ヴェサリウス孔 | - | - |
| 翼棘孔 | / | - |
| 内側口蓋管 | - | - |
| 額骨横縫合痕跡 | / | / |
| 床状突起閉鎖骨橋 | / | / |
| 顎舌骨筋神経溝骨橋 | / | / |
| 下顎隆起 | / | / |
| 顔額二分 | / | / |
| 矢状溝溝左折 | - | - |

+:有 - :無 / :欠損または不明

第20表 頭骨形態小変異

| | | 1号人骨 | | | | 2号人骨 | | | |
|---------|------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | 右側 | | 左側 | | 右側 | | 左側 | |
| | | 近遠心径 | 唇・頬舌径 | 近遠心径 | 唇・頬舌径 | 近遠心径 | 唇・頬舌径 | 近遠心径 | 唇・頬舌径 |
| 【永久歯】上顎 | 中切歯 (I1) | 8.41 | 7.52 | 8.60 | 7.79 | - | - | - | - |
| | 側切歯 (I2) | 7.38 | 6.40 | 7.22 | 6.78 | - | - | - | - |
| | 犬歯 (C) | 8.60 | 9.77 | 8.43 | 9.47 | 8.34 | 9.52 | - | - |
| | 第一小臼歯 (P1) | 7.76 | 10.30 | 7.99 | 10.20 | - | - | - | - |
| | 第二小臼歯 (P2) | 7.10 | 9.74 | 7.08 | 9.27 | 7.28 | 9.63 | 7.27 | 10.11 |
| | 第一大臼歯 (M1) | 11.11 | 12.28 | 11.39 | 12.23 | 10.80 | 12.24 | 10.73 | 12.76 |
| 下顎 | 第二大臼歯 (M2) | 10.39 | 12.09 | 10.22 | 12.28 | 9.08 | 11.12 | 9.31 | 11.46 |
| | 第三大臼歯 (M3) | 12.07 | 11.61 | 8.30 | 10.14 | 8.06 | 10.66 | 8.10 | 10.29 |
| | 中切歯 (I1) | - | - | 5.86 | 6.11 | - | - | - | - |
| | 側切歯 (I2) | - | - | 6.29 | 6.82 | - | - | - | - |
| | 犬歯 (C) | - | - | 7.66 | 8.83 | - | - | - | - |
| | 第一小臼歯 (P1) | - | - | 8.05 | 8.84 | - | - | - | - |
| 【永久歯】下顎 | 第二小臼歯 (P2) | - | - | 7.57 | 8.98 | - | - | - | - |
| | 第一大臼歯 (M1) | 12.19 | 11.70 | 11.87 | 10.39 | - | - | 11.47 | 11.59 |
| | 第二大臼歯 (M2) | 11.82 | 10.67 | 11.94 | 10.81 | - | - | - | - |
| | 第三大臼歯 (M3) | 11.57 | 10.50 | x | x | 10.43 | 9.82 | 10.89 | 8.76 |

不明型: 2本

- :該当歯が存在しないもの

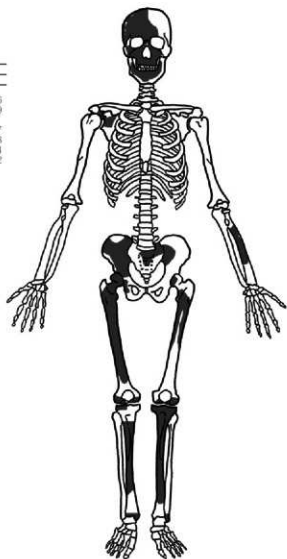
x :埋伏・破損等のため計測値が得られない計測項目

* :咬耗、エナメル質の欠損等によって計測点を欠くために、計測点の近くを用いて計測した近似値である。

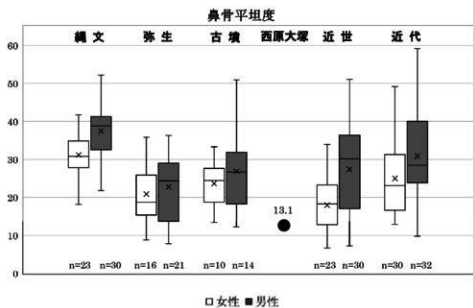
第21表 歯計測値

| Martin's No. | | 1 男入骨 | | 2 女入骨 | |
|-------------------|---------|-------|------|-------|------|
| | | R | L | R | L |
| 大脚骨 | | | | | |
| 6 | 骨体中央矢状径 | 24 | — | — | 22.6 |
| 7 | 骨体中央横径 | 22.5 | — | — | 22.9 |
| 8 | 骨体中央宽 | 73.5 | — | — | 71 |
| 6/7 | 中央断面示数 | 106.7 | — | — | 98.7 |
| 9 | 骨体上横径 | 28.2 | — | — | 27.8 |
| 10 | 骨体上矢状径 | 21 | — | — | 18.4 |
| 10/9 | 骨体上断面示数 | 74.5 | — | — | 66.2 |
| 胫骨 | | | | | |
| 8 | 中央最大矢状径 | — | 24.9 | — | — |
| 8a | 桡窝孔位最大径 | — | 27.4 | — | — |
| 9 | 中央横径 | — | 16.7 | — | — |
| 9' Vallois (1938) | 中央横径 | — | 17.2 | — | — |
| 9a | 桡窝孔位横径 | — | 20.7 | — | — |
| 10 | 骨体中央宽 | — | 69.5 | — | — |
| 10a | 桡窝孔位宽 | — | 79.0 | — | — |
| 9/8 | 中央断面示数 | — | 67.1 | — | — |

第 22 表 四肢骨計測表



第 42 图 残存状况图



第 43 图 鼻骨平坦度

Ⅲ. 西原大塚遺跡出土の動物骨

澤田純明（新潟医療福祉大学自然人類学研究所）

佐伯史子（東北大学大学院歯学研究所）

西原大塚遺跡第234地点の912号土坑から出土した動物骨（図版16）について報告する。

1. 同定結果と残存部位

出土したのは1個体に由来するイヌ科の頭部の骨で、歯および顎骨の形態学的特徴とサイズを各種イヌ科標本と比較し、タヌキ (*Nyctereutes procyonoides*) に同定した。

残存部位は左右の上顎骨と口蓋骨（図版16-左）、左右の下顎骨（図版16-右）、蝶形骨の断片、左右不明側頭骨の断片、部位不明頭蓋骨の断片、および上下左右不明の切歯と犬歯の断片である。傷病変などの骨変化は見当たらなかった。

左右の上顎骨と口蓋骨は、全て癒合して硬口蓋の形状を保った状態で残存していたが、左右ともに第2前臼歯より前方の部位、および第2後臼歯より後方の部位は欠損していた。上顎の歯は、左右の第2・3・4前臼歯と第1・2後臼歯が植立する。

右下顎骨は臼歯部から下顎枝の前部までが残存し、第3・4前臼歯と第1・2後臼歯が植立するが、第1・2前臼歯と第3後臼歯は死後脱落していた。

左下顎骨も臼歯部から下顎枝の前部までが残存し、第2・3・4前臼歯と第1後臼歯が植立するが、第1前臼歯と第2・3後臼歯は死後脱落していた。

永久歯が全て植立していたことから成体に比定される。臼歯の咬頭は磨耗していたが、咬耗の進行はエナメル質にとどまり、象牙質に及んでいないことから老齢ではなさそうである。性別は不明である。

2. 残存状況に関する所見

調査担当者から提供された出土状況の記録写真をみるに、上顎と下顎が解剖学的に自然な位置関係にあったことから、上顎と下顎が咬み合わさったまま、おそらくは皮膚・筋・靭帯が骨に付着した状態で白骨化していない段階のうちに土中に埋まったものと推察された。

少々奇妙に思われたのは、頭骨以外の骨が全く見当たらなかったことである。脆弱な硬口蓋の骨が残存していたにも関わらず、緻密質が厚いために保存に優れるはずの四肢骨骨幹部や、多数の椎骨が欠片も見つからない理由として、(1)当初より頭部のみが残存していた、(2)全身が埋存していたものの、土中の局所的な保存環境の違いにより体幹骨と四肢骨が消失し、頭部のみが残存した、の2つが考えられた。出土骨の検討からではどちらが正しいのかを追求できなかったものの、もし前者だとすれば、頭部の埋存が人の手によってなされたのか、という疑問が生じる。自然死したタヌキが頭部のみ解剖学的位置を保って土中に埋まることは、全くあり得ないとは言えないものの想定しにくく、遺跡から出土したことと合わせて考えるに、人がタヌキの頭部のみを埋めた可能性は検討に値するのではなからうか。中近世の動物利用の様相を知る上で興味深い事例となるかもしれず、類例の増加を待ちたい。

圖 版



1. 調査区全景



2. 調査区遠景



1. 調査前現況(東から)



2. 表土剥ぎ



3. プラン確認(北から)



4. プラン確認(南から)



5. 29号住居跡土層断面(東から)



6. 29号住居跡土層断面(北から)



7. 29号住居跡完掘(東から)



8. 29号住居跡掘り方完掘(東から)



1. 912号土坑人骨検出(東から)



2. 912号土坑人骨遠景(北から)



3. 912号土坑人骨近景(南から)



4. 912号土坑人骨取り上げ作業1



5. 912号土坑人骨取り上げ作業2



6. 912号土坑動物骨検出(西から)



7. 913号土坑土層断面(南から)



8. 912・913号土坑完掘(北から)



1. 915号土坑遺物出土状況(南から)



2. 914・915号土坑完掘(南から)



3. 917号土坑土層断面(北から)



4. 917号土坑完掘(北から)



5. 920・930号土坑土層断面(東から)



6. 930号土坑土層断面(西から)



7. 930号土坑硬化面(西から)



8. 930号土坑完掘(南から)



1. 931号土坑土層断面(南から)



2. 931号土坑完掘(南から)



3. 933号土坑土層断面(北から)



4. 933号土坑土層断面(東から)



5. 933号土坑完掘(北から)



6. 936号土坑土層断面(南から)



7. 65号ビット土層断面(北から)



8. 65号ビット完掘(北から)



1. 10号井戸跡(東から)



2. 調査区南壁(北から)



3. 深掘トレンチ(TP 1)西壁(東から)



4. 深掘トレンチ(TP 1)南壁(北から)



5. 深掘トレンチ(TP 3)西壁(東から)



6. 深掘トレンチ(TP 3)北壁(南から)



7. 埋め戻し作業



8. 作業風景



1. 29号住居跡出土遺物



2. 912号土坑出土遺物



1. 914号土坑出土遗物



2. 915号土坑出土遗物 1



1. 915号土坑出土遗物 2



2. 930号土坑出土遗物



3. 10号井戸跡出土遗物 1



10号井戸跡出土遺物 2



1. 10号井戸跡出土遺物 3



2. 65号ピット出土遺物



3. 遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3



1. 頭蓋前面觀 2. 頭蓋右側面觀 3. 右肩甲骨 4. 左橈骨 5. 右大腿骨骨頭 6. 右大腿骨骨幹部 7·8. 右大腿骨遠位端
9. 右脛骨近位端 10. 右脛骨骨幹部 11. 右脛骨遠位端 12. 右寬骨 13. 仙骨 14. 左寬骨 15. 左脛骨近位端
16. 左脛骨骨幹部 17. 左脛骨遠位端 18. 左大腿骨骨頭 19. 左大腿骨骨幹部 20. 左大腿骨遠位端



1. 右頭頂骨片正中部 2. 左側頭骨體部 3. 後頭骨片 4. 下顎骨體右臼齒部
5. 下顎骨左臼齒部 6. 右大腿骨骨幹部片 7. 右大腿骨骨幹部片 8. 左大腿骨

912 号土坑出土 2 号人骨



顎骨

912号土坑出土 動物骨

報告書抄録

| ふりがな | にしはらおつつかいせきだい234ちてん まいどうぶんかざいはくつちようさほうこくしょ | | | | | | | |
|-------------------------------------|---|------------------|---|-------------------|--|---------------------------|--|------------|
| 書名 | 西原大塚遺跡第234地点 埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 志木市の文化財 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第86集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 尾形剛敏 徳留彰紀 大久保聡 小林陽子 福泉藍 石川安司 | | | | | | | |
| 編集機関 | 埼玉県志木市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TFL 048 (473) 1111 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 令和4(2022)年4月28日 | | | | | | | |
| 所収遺跡 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積㎡ (全地面積) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| にしはらおつつかいせきだい 西原大塚遺跡 (第234地点) | しはらおつつかいせきだい 志木市幸町2丁目 6281-2、6282、6283 | 11228 | 09-007 | 35° 49' 40" | 139° 33' 57" | 20210308 ～ 20210419 | 222.59㎡ (753.04㎡) | 集合住宅 建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 西原大塚遺跡 (第234地点) | 集落跡 | 古墳時代 中世以降 | 住居跡 1軒 土坑 30基 井戸跡 1基 ピット 68本 | 1軒 | 土師器 陶器・磁器・土器 陶器・磁器・土器・石製品 銭貨・磁器 | | 土坑のうち912・913・930Dは地下式坑である。912Dからは人骨と完形の播鉢が検出された。調査地点全体が段切状遺構によって造成されていた。 また志木市で初となる縄文時代晩期最終末～弥生時代初期の条痕文壺又は裏の破片1点が遺構外から出土した。 | |
| 要約 | <p>西原大塚遺跡は柳瀬川の南東、武蔵野台地北東端に所在する旧石器時代から近世までの複合遺跡である。第234地点は遺跡の北東部に位置し、台地の縁辺にある。本調査では古墳時代の住居跡1軒、中世以降の土坑30基、井戸跡1基、ピット68本と古墳時代～近世までの遺構が確認された。</p> <p>調査地点全面に広がる段切状遺構は、隣接する第220・224地点で確認された段切状遺構と繋がると考えられる。</p> | | | | | | | |

志木市の文化財 第86集

西原大塚遺跡第234地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 令和4（2022）年4月28日
印刷 望月印刷株式会社